

れども、その有する美麗の毛皮は、衣服、敷物等として盛んに賞用せらるゝのである。

〔一〕 鼬鼠 *Putorius itatsi*, Pallas

英に「ジャバニーズ、ウイーゼル (Japanese Weasel)」と稱する。體長は一尺有餘、毛色は赤褐色にして、脊の後部は隆起し、頭は小さいのである。幼獣は全體淡黑色にして、吻端のみ白い。田野と市街とを問はず、到る處に棲息し、夏季は主に田野に棲み、冬になると人家に近づき、又好んで池沼川畔を徘徊して、魚類を食する。家禽を掠めて、血を吸ひ、又鶏卵を盗むことは有害なれども、鼠を捕殺する効果は大なりといはざるを得ないのである。彼れは又トノサマガヘルの如き蛙を食ふことは、編者がこの獸の解剖に際し屢々實驗した所である。序でに記述するが、胃は噴門と幽門に接する部分が、著るしくピラ／＼に膨脹し居つて、その状は、恰も藁口をば、ハンケチを以つて、左右に引き締めたやうであつた。又腸全體の長さは、四尺九寸に過ぎなかつたのである。

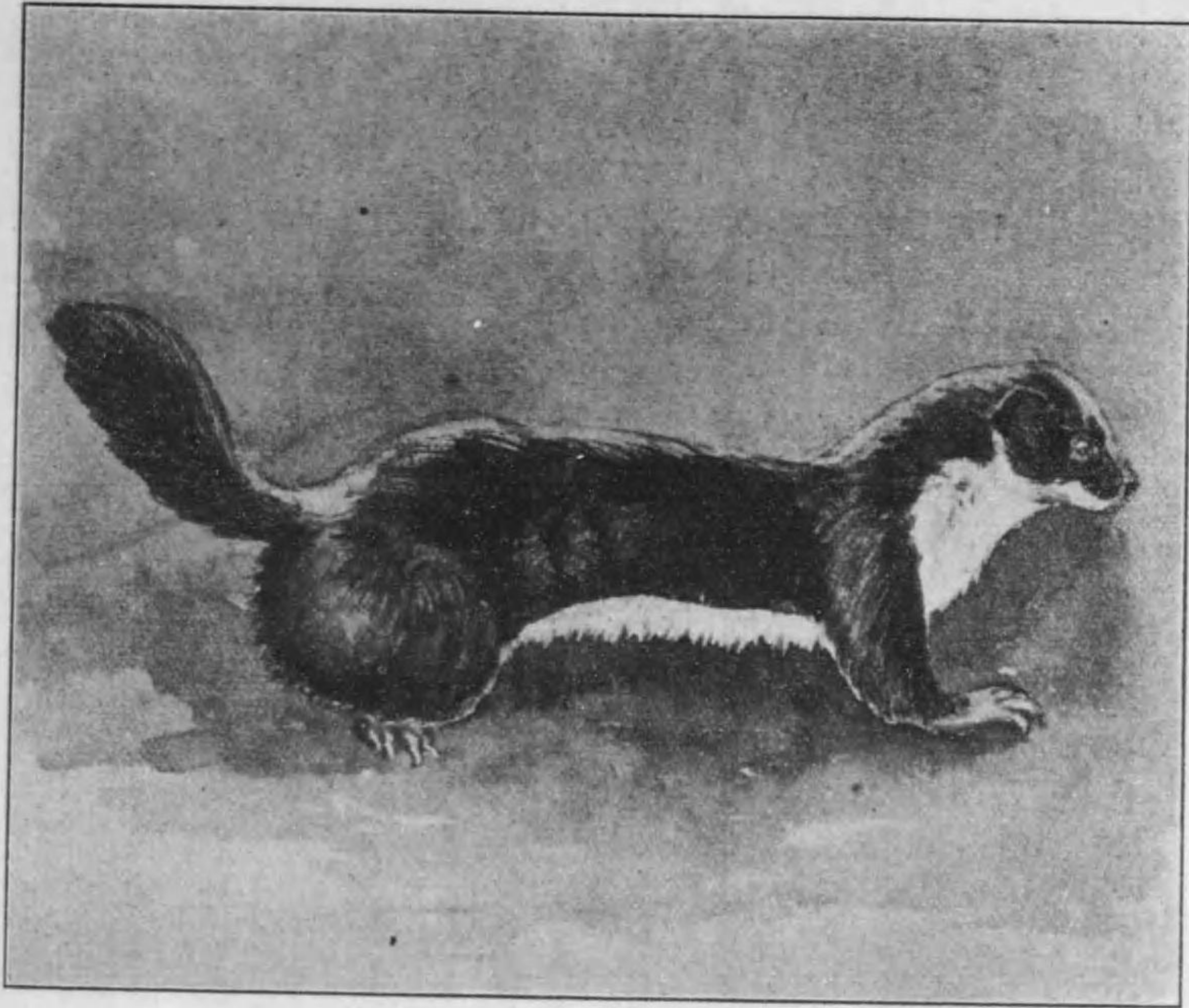
鼬鼠は大膽なる小獸にして、他より妨害せらるゝときは、直ちに立ち止つて、顔の前面に、手掌をば高く掲げ、以つて敵の動作を覗き見るの奇習がある。而して愈々敵の追窮に遭遇するときは、所謂最後屁なるものを放つは、人のよく知る所である。その毛皮は襟巻、下駄の鼻緒等となり、近來盛んに輸出せらるるのである。

〔二〕 黃鼬 *Mustela melampus*, Temm.

北海道及び本州に産し、田舎の古社寺、或は舊墟に棲み、又樹上に棲息し、鳥類鳥卵等を食し、又捕鼠に大功がある。體は鼬鼠より大きく、夏毛は黒黄色にして、鼻端と四肢の下面とは黒色である。俗に「テンマル」の名がある。

〔三〕 大蝦夷鼬鼠 *Putorius erminea*, L.

英に「ストート (Stout)」又は「エルミン (Ermine)」といふ。瑞典、那威、英國、露西亞、西比利亞、北米の極地に産し、本邦にては長野縣下、青森縣下にて捕獵せられたことある外、北海道及び樺太に産する。身長は約一尺、尾長は三四寸ある。夏毛は、體の上部は帶赤褐色をなし、體下は帶黄白色なれども、冬毛は英國産のものにては、乳白黄色をなし、又夫より北地に進むに従ひ、毛は全く白色となり、且つ長さも増すやうになる。尤も尾端の毛は、冬と雖も、黒褐色を呈するのである。冬季に於ける白毛の皮は、歐洲にては、高價の商品であつて、手袋、襟巻、其他の裝飾品に使用せらるゝのである。歐洲に於ては、君主、羅馬法王、羅馬教會の君牧師、貴族、裁判官の上衣の裝飾として貴重せらるゝ者であつて、英國のエドワード三世の治世には、この獸の毛皮の着用は、皇族に限られたることさへあり



小 蝦 夷 鼬 鼠 圖七十六第

一四四
しを見るも、その珍重せられし一斑を窺ふに足るべきである。この獸は、殊に殺戮を好み、その巢の中には、嘗つて五十個の雉子類の卵子が、一つも破砕せられずに、貯藏せられた例がある。又ある場合に於て、九疋の兎が噛まれた時の致命傷の外は、一つも切り裂かれざるまゝ、貯へられたることもあつたといふことである。

〔四〕小蝦夷鼬鼠 *Putorius Vulgaris*, Rich.
英に「ウイーゼル」(Weasel) といはる。鼬鼠科の中で、最小なるも

の、一つにして、前種に比すれば小形で、尾も前種に比すれば甚だ短く、身長約六七寸にして、尾は一寸位である。英國、北歐州、亞細亞、及び北米の温帯及び寒帯に産し、本邦にては北海道及び樺太に産する。體高は二寸位に過ぎない。夏毛は、上體部は淡赤褐色にして、胸と腹とは純白である。然して口隅の下の兩側に於ては、褐色の斑紋を有する。耳は小さく圓く、眼は黒い。冬季の毛は、尾の尖端に存する數本の黒褐色の毛の外、總て純白となる。

體軀は著しく蛇狀をなせるを以て、鼠を追ひて、その棲める穴にも入り込むことが出来る。而してその餌食動物を追窮するにあたりては、實に執拗であつて、先づその嗅覺にて、之を探り出せば、水をも渡りて追ひせまり、常に餌食の頸背を目掛けて跳び付くか、又は腦髓をば齒で突き刺すのである。而してその食するは、主として血液と腦髓のみであるといふことである。時には鷓鴣 (Partridge) 群に忍び寄り、鳥が驚き飛び上るを見るや、二尺位の高さに跳躍して難なく一羽を攫むのである。彼れは又群をなして餌食を狩るのであつて、嘗つて、牝牛が、この獸の群集せる處をば知らずして、草を食ひつゝあつた時に、突然喉の垂肉へ跳び付かれて、烈しく噛まれたことがあつたのである。小獸鳥類なれども、又嚴冬の間は漿果を食するのである。

この獸は鼬鼠科中では、最も多産にして、枯草にて巢を造り、年に三四回子を産み、一産に五子がある。然るに鼬鼠科の大多數のものは、春季一回蓄殖するのみで、一産に四五子を生むのである。

(五) 松貂 (Pine Marten) *Mustela martes*, L.

歐州及び亞細亞の北部に産すれども、英國にては稀れに見られ殆んど絶滅に近い位である。體長は一尺三四寸乃至一尺六七寸ある。尾は八九寸乃至一尺位ありて、毛を叢生する。毛色は褐色を帯び、毛皮として裝飾用に使用せられ「セーブル」にも劣らぬ位である。樹木に攀縁すること巧にして、また地上に下りて、野兔其他の小獸を食し、家禽を襲ひ、卵を盗むのである。時には小羊をも攻撃することがある。嘗つて愛蘭に於て、二十一頭の小羊を飼養したりし一農夫が、一夜の中に十四頭が殺され、次の晩残れる七頭の小羊が、亦殺されたのを見たのである。この意外の災難は、全くトリモア公園内の「カササギ」の舊巢の中に棲める、牝牡の松貂の爲めに噛み殺されたことが判然したのである。

(六) 山毛櫟貂 (Beech Marten) *Mustela foina*, Briss.

中部歐羅巴に産する。毛色は松貂よりも淡く、咽喉と胸の上部には、帯黄白色の斑紋

を有する。その性質は前種よりも残忍にして、且つ大膽である。また肉食するのみならず、種々の果實を食するを以て、歐羅巴のある地方にては、彼れが嫌ふ所の煙草汁及び石油をば、果樹の幹上に振り掛けて、果實を保護するのである。

山毛櫟貂の毛皮は「ストーン・マーテン」(Stone-marten) (石貂)の皮と呼ばれる。これこの獸は、常に森林及び樹上に棲息すれども、屢々岩石中に棲息するより、起りたる名であつて、廣く裝飾として用ひらるゝのである。

(七) 黑貂 *Mustela zibellina*, L.

英に「セーブル」(Sable)といはる。濫獵の結果、今は東部西比利亞及びカムチャツカに限られて棲む位である。非常によく松貂に酷似するを以て、或る博物學者は、唯單に松貂の地方的變種に過ぎないと説く位である。この毛皮が一番貴重せられて居る。毛色は暗褐色又は黒味ある色である。體長は一尺五寸位で、約一尺もある茂つた尾がある。獸の数は寧ろ稀少であつて、獵師は十二畧を仕懸け置きて、一つ掛ければ仕合せと思へる程である。而して冬に於て、毛皮は一番よいから、この時季に捕獲せらるゝのである。夏毛はあまり短くして、價値がない。また毛色は、冬も夏も同一であつて、變化することがない。常に森林に棲息し、夜出で、枝間を攀縁し、食を求めるのである。その食物は

〔八〕 ポール、キヤット (Polecat) *Mustela putorius*, L.

體の大きさは松貂よりは少しく小い。而して非常に短い尾がある。鼠、兎、獵鳥、家禽を掠奪することが烈しいのである。皮は淡黄褐色であつて、その上に暗褐色の毛を生じ、頭



トツヤキルイボ 圖八十六第 (After Protheroe)

は黒と白との斑紋がある。これ位殘忍なものはない。くして一たび家禽舎に来るときは、家禽、鵝、鳥を殺し、七面鳥をも殺すのである。その食ふ分量よりは二十倍以上の多數を屠るのであつて、多くの場合に於いて、唯血液を吸吮し又腦髓を食ふのである。ポール (Pole 又 Pol) は佛語の *Ponle* (牝鶏の義) の轉訛であつて、ポール、キヤットは即ち「鶏盜賊」といふ義に當るのである。兎の飼養場に一度びやつて來ると、二十疋位は殺して行くのである。

屢々その捕へたる食餌を貯藏し置く性質ありて、その穴の中には蛙、蟾、蝮、鰻があつたことがある。一たび傷を受けたり、又は危難に迫るときは、尾の基脚に近き一囊より、烈しき惡臭を發するのである。

〔九〕 フエレット (Ferret)

「ポール、キヤット」の一變種であつて、毛色は白つほい色か、又は淡黄色で、赤色、若くは石竹色の眼がある。體長は一尺二寸許ある。亞弗利加の原産であつて、初めて西班牙に輸入せられ、それより歐洲に擴がつたものである。半家養的に保護せられ、鼠の捕獲や、兎狩りに使用せられて居る。鼬鼠科の總てのものゝ如く、血液を好むものであつて、それが喰ふ分量よりは、百倍以上も、食餌を屠るのであつて、狩



トツレエフ 圖九十六第

獵に老練なる獸といへども、兎の穴へ向けらるゝ前には、口輪を嵌めて置かねばならぬ。然らざれば、その狩り取つた最初の兎の血液を、吸吮しやうとして、其處にちつと居て居て、働かないのである。「ボール、キャット」の如き激烈なる悪臭を分泌することはなく、その繁殖力は彼れよりは増したのである。

〔一〇〕 ミンク (Mink) *Mustela Intreola, L.*

肢には幾分蹠を有して、半ば水棲に適するやうになつて居る。而して主に魚類、蛙、ザリガニ、其他水邊に徘徊する小獸の何たりとも、捕へて食ふのである。體長は一尺二三寸乃至一尺五寸にして、體は鼬鼠科の過半の種類よりは、一層強壯に造られて居る。毛皮は殆んど暗色なるチョコレート色であつて、非常に貴重せられ、屢々僞「セーブル」皮として用ひられて居る。

「ミンク」は歐州に産する。亞米利加にては、その毛皮を得んが爲めに、飼育する所もある。殊に「ミンク」の銀灰色の毛は、非常に高價のものであつて、一枚百五「シリング」即ち我が五十一圓餘である位である。

〔一一〕 グラツツン (Glutton) *Gula luscus*

又「ウラルベリオン」(Uralian) *U. luscus* といはる。那威、瑞典、露西亞の極北部、西比利亞、加奈陀の



第七十七圖 (From Popular science)

北部、アラスカに産する。而して昔は英國にも夥しかつたのである。體は唯二尺乃至三尺にして、尾は六七寸位あつて、毛を叢生して太いのである。體全體が丈夫に出来て居る爲めに、小さな熊の如く見ゆる。脚にて立派に直立することは、他の鼬鼠科のものとは異なる所である。體には長毛を有し、毛色は主に帶褐色色なれども、體側は寧ろ淡色である。吻端と趾とは黒く、爪は象牙の如く白い。

食物は、主に小獸及び大形の獵鳥であるが、鹿の負傷せる者

は、之を引き倒すことも出来さうに思はれるのである。また、夏季は海狸の巣窟に來り、その強き鉤爪を以つて、壁を破り、巢の中に侵入するのであるが、冬季には、巢壁をなせる泥土は氷結するを以て、之を破りて内部へ闖入することが出来ないのである。

「グラツツン」は狩獵家の跡を追従して、罾に掛かつた獸を食ふのであるが、その性質狡猾なるを以て、自分は罾に陥ることはない。彼れは又、狩獵者の不在を窺ひ、その天幕内に忍び込み、其處にある鐵砲、毛布、其他の物品を盗み出して、之を隠匿する僻がある。

〔一一〕 スカンク (Skunk) *Mephitis mephitis*.

英に「コンモン、スカンク」(Common Skunk) (普通スカンクの義) 又「カナヂアン、スカンク」(Canadian skunk) といふ。體長は尾を除いて、一尺五寸に達し、尾は長くして長毛を密生する。四肢は短けれども、蹠は稍廣く、又銳爪を具へ、これに因つて穴を掘るに適するのである。額は白く、眼は小く、耳は短くして圓い。體の毛は長く、毛色は黒くして、一條の白色帯は、吻端より後頭に走り、此處にて幅廣くなりたる後、再び狭くなりて、肩に至つて分岐して體側に沿ふて走り、臀部に於て相合したる後、又狭くなる。尤も或る個體にありては、白條は體の後方に到らざる中途で、横腹にて消滅するものもある。尾は黒色の地の所に、尾の上部に當つて、二本の幅廣き白色の縦條を有する。

「スカンク」は性質頗る怯懦なれども、常に尾を聳て、緩歩し、遠方より見ても、彩色歴



第七十一圖 スカンク

然として、一見してその「スカンク」なるを認め得るのである。元來「スカンク」の如く、防禦器官を有せざる小獸が、態々已れが存在を他に顯すが如き彩色を有することは、抑も何故なるか。これには甚だ興味ある理由がある。即ち尾根に近き二つの肛門線よりは、動物の意志に従つて、自由に惡液を分泌し得るのである。この液は深黄色にして、繖形科の阿魏アウイの如き、厭ふべき惡臭ある液である。この液が眼に入れば、人は盲目となる位である。又人類や犬等の如き獸が、此臭を嗅げば、忽ち嘔吐を催ふす位である。舞踏用の靴に、たつた一滴が懸つたにしても、その臭氣で、舞踏室の全員をば

内外普通動物誌

その室から逃げ出さしめた程、悪液は有力で、且つ永く臭氣が繼續するのである。この液がはねかつた犬の體軀をば、毎日〱繰り返して、一週間も洗つた後に、偶然犬がテーブルの脚の所へ、體をば擦つた爲めに、そのテーブルをば、家具として使用することが出来なかつた程である。また一たびその臭氣を受けた衣服の如きは、烟で燻べて、臭を除去するにあらざれば、一ヶ月の永い間も、尙堪ゆべからざる臭氣を存するといふ位である。ウッド氏に據れば、カルム氏(Kalm)はその著書('Voyage dans l'Amérique Septentrionale)に於て左の如く述べられて居るさうである。

『千七百四十九年に於て、一疋の「スカンク」が、余が滞在せる所の、田圃に近く來つた。時は冬の晩であつた。飼犬はとび起きて之を追ひ駆けた所が「スカンク」はその瞬間に悪臭を放つたのである。折から寢室にあつた余は、これが爲めに、窒息するかと思ふた程である。牛舎に繋いであつた牝牛も、吼へ出したのである。この「スカンク」は同年の終りまで、我が地窖に隠れて居つたものと見へて、或る晩、一人の婢僕が、その居るのを見出して、殺して仕舞うたのであるが、その瞬間に、地窖は悪液を以つて、全く滿されたのみならず、婢僕はこれが爲めに、永く病床に横るやうな不運となつたのである。それから窖内に貯藏した麵包、肉類、其他の食品は全く使用に堪へなくな

つて、窖を再び使用する爲めには、是等の食品をば、盡く廢棄するの止むなきに至つた程である』云々。

「スカンク」のこの悪液について、ハドソン氏(Hudson)氏が、次の如く書いた程、亞米利加の或る處には、夥しく棲息した位である。

『外國から始めて來る人に注意する個條として、余は日射病や、「ジャグラー」及び刺客の危難を、態々話して聞かす必要はないと思ふて居るが、是非共「スカンク」に就いては、該獸の習性と外貌とについて詳述し、以つて彼れに就いて警告を與ふることをば、決して忘れなないのである』云々

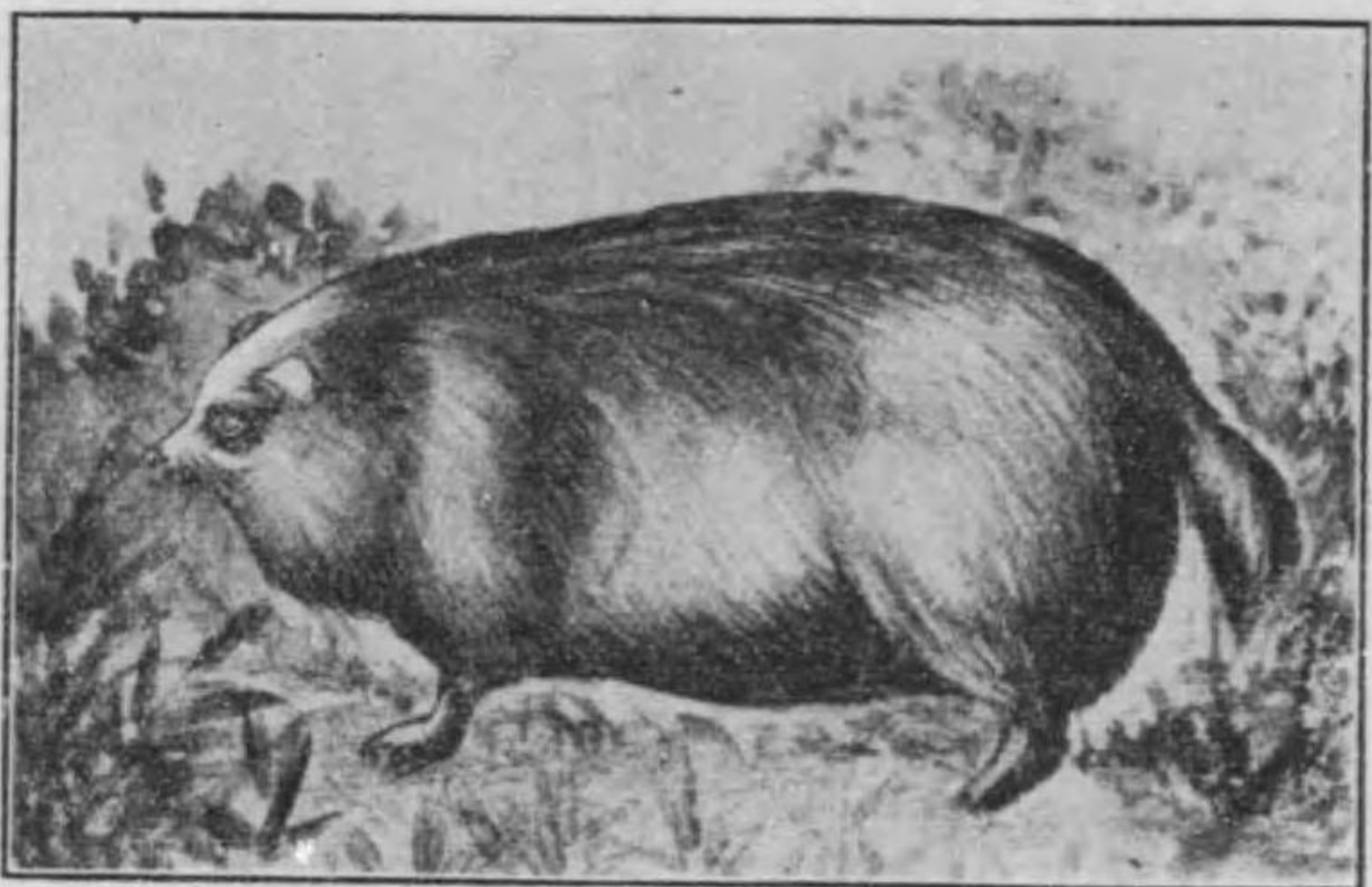
斯くの如き悪臭を有する「スカンク」に向つて、敵は容易に之を攻撃しないのであるから、「スカンク」は自分の有する悪液の効力について自覺し居て、敵より攻撃を受けたときにも、逃るゝことをしないし、又その有力なる齒を用ひて、防禦することもしないのである。反つて敵に向つて、悠々その脊を向け、尾を舉げて、十二尺乃至十六尺の距離に向つて悪液を放つのである。

彼の高く掲けたる尾は、黒色に白を混する所の旗印となり、背部に交れる黒白部は、更らにこれに映じて、一見して彼れに近ければ、危険なることを知らせるのである。彼の

實彈射撃場の旗色鮮明にして、よく着弾距離を示し、人の近づくを豫防するが如きと同様である。若し此の如く、自己を他に知らしむべき色彩を有せざるときは、敵は彼れを解せずして、發見次第攻撃し來るに相違ない。この時惡臭一發、以つて敵を苦しめ、我を棄て、逃走せしむるも、我身も亦損傷を受けて、或は恢復すべからざる損害を受くることもあらう。假令敵を困却せしめたる利益はありとも、我身の受けたる損害と差引勘定すれば、却て我身に取れて一大損害といはざるを得ないのである。されば寧ろ始めより自己の有する特獨の武器—惡臭の恐るべきをば敵に知らしめて、敵を近寄らしめざる方が得策である。即ち「スカンク」の有する體色は、よくこの目的に協ふたものである。斯くの如く、外界と一致せざる顯著なる色彩を有し、一見して、その動物の何たるを認知せしめ、以つて自己を他に廣告し、他をして自己に近寄らしむることならしむる色彩をば警戒色といふて居る。全く保護色とは反對のものである。

「スカンク」は北米に産し、常に灌木、藪叢、或は河岸に穴居し、夜出で、鳥、鼠、蛙、蛇、蚯蚓等を食する。

〔一二〕 獾又さくぐネ(甲州) *Meles Anakuma*, Temm.



圖二十七第 獾

英に「チャバニース、バツヂャー」(Japanese Badger)と稱する。大きさは殆んど狸位ある。四肢は前後肢共に五趾を具へ、前肢の爪は地を穿堀するに適する。脚は短きを以つて、體は殆んど地に接し、行歩頗る遅緩である。その歩むや趾の前方を以てのみ歩むにあらすして、全蹠を地に着けて歩むのである。頭は長く、吻端は尖り、耳と眼とは小さく、尾は短いのである。その毛皮は柔靱であつて、體には長毛を生ずる。武藏秩父、相模、甲斐、駿河等の山地に産すれども、北海道には産しない。晝間は山林又は岩窟中に於て、孤獨に穴居し、夜間出で、食を索め、又樹木に攀縁するを得るのである。信州木曾にては「マミ」と呼んで居る。毛皮は防寒用となり、

毛は筆毛、刷毛となり、肉は食用に供して美味なりといはれて居る。獾類の齒式は「 $3 \cdot 1 \cdot 3 \cdot 3$ 」又は「 $3 \cdot 1 \cdot 3 \cdot 1$ 」又は「 $3 \cdot 1 \cdot 3 \cdot 2$ 」である。

〔一四〕 西比利亞獾 *Meles taxus*, Pall 又 *Meles vulgaris*

英に「コンモン、バツヂャー」(Common Badger)と云ふ。英國、歐洲大陸、北部亞細亞に産し、



西比利亞 圖三十七第

我が北海道、本州には産せざれども、樺太には棲息する。體長は平均二尺五寸あつて、肩に於ける高さは、殆んど一尺に達する。色毛は帶赤灰色にして、肋骨部と尾とは白灰色である。頭は白く、その兩側には顯然たる黒條がある。咽喉、胸、腹部、四肢は濃褐色である。毛皮は弛るいから、うっかり皮を握つて持つと、思ひかけなく振り向いて、鋭るごい齒で烈しく噛み付かれ、その痛さは到庭忘れることが出来ぬ程である。また下顎と頭骨とは、特別なる關節となりて結合せるを以つて、緊と噛み締めることが出来る。

この獸は、鼯鼠科のものであるが、その歩み方は如何にも拙であつて、その穴より出づる所を見れば、豚の子としか思へぬ位である。常に山林中に棲み、前肢には長い鉤爪を具へ、且つ強健なる筋肉が發達せるを以つて、その穴を掘る力は非常なものである。近頃英國に於て實驗せられたる所に據ると、彼れの穴は最大にして、最も完全なものであつて、用意周到に造られ、且つ清潔であつたのである。英國のある所で、六人の掘手が、糶の穴を掘り出すべく命せられたのである。彼等は朝の十時に仕事を始め、午後一時まで發掘を繼續した。その時晝食を認めるべく休憩したる後、再び發掘に取り懸り、午後と夜中を通じて、頻りに穴を掘り進んだのである。所が翌朝五時に至つて、穴の深底に達し、そこに棲める牝牡一對を捕獲したのである。尤もこの際こゝに残つ居つた掘手は、三人であつたさうである。

糶は六十秒乃至七十秒間で、地を掘りて自分の體をば埋めることが出来る。されば鶴嘴や匙鍬を持てる人が、彼れの穴をば掘り開いて居る間に、彼れは汲々として穴の奥へくゞと掘り擴げ、土で穴中に割壁を築いて、獵犬の侵入を防ぐのである。時には糶と狐とが同穴に棲むことがある。牝は一産に三四子を産むのである。

本種の食物は、主に根、果實、蝸牛、蚯蚓、野生の蜜蜂の蜜であつて、時には幼兔を捕へ、獵

鳥の卵又は糞を奪ふことがあるが、害は殆んどない位である。また毛皮の弛いので、且つその上に長毛を有せる爲めに、蜂に螫されても、一向平氣であるから、蜜蜂や胡蜂の巢を奪ふて、その幼蟲を食ふのである。

第七十四圖 亞米利加獾



獾類は總べて尾の根元に惡臭を分泌する袋がある。この液は防禦用にあらずして、牝牡相求むる爲めの媒介をなすのである。

毛皮は、以前は旅行用の靴の被覆物として、多く使用せられたのである。又長毛は鬚剃り用刷毛及び畫工の刷毛として、廣く用ひら

れ、肉は食用として美味である。

〔一五〕 亞米利加獾 *Taxidea americana*

英に「アメリカン・バッヂャー」(American Badger) 又「タキシエル」(Taxel) といはれる。亞米利加のロッキーマウンテン等に多く棲む。毛色は、夏毛は帶黃褐色なれども、冬毛は灰白色にして、冬季は他の獾の如くに穴居する。常に鼠の如き小獸を食する。

〔一六〕 マレイ獾 *Mydaus meliceps*

一に「レンヂュー」(Tuduh) と呼ばれる。人をして假死せしむる程、刺激性に富める酸性で、且つ揮發性の液體を分泌するので著名である。

〔一七〕 レーテル *Ratel Mellivora*

「レーテル」は佛語「レーテル」(Ratel) 愚鈍の義と「ラット」(Rat) (鼠の義) の二語の結合より起つた名である。又學名「メリボラ」(Mellivora) は拉丁語の「メル」(Mel) (蜜の義) と「ホレーア」(Vorare) (貪食の義) との二語より起つたのであるから、英に又「ホネー・バッヂャー」(Honey-badger) 即ち蜜獾の名がある。外貌は獾によく似て、體は肥大し、肢は短く強壯であつて、殊に前肢には長い鉤爪を有し、之を用ひて、危險なる場合には、驚くべき迅速を以つて、地を掘り、體軀を埋めることが出来る。尾は短く、耳殼は退化する。齒は獾の齒よりは鋭

るどけれども、他の鼬鼠料の多数のもの、如くに、真に肉食するには適せない。而して兩顎の各側には、唯一本の真正の白歯を有し、下顎の白歯は食物を切る用をなすのである。その食物は、蜜蜂の蜜と、その幼蟲、白蟻、小獸より成る。この属には通例二種ありと認められて居る。而してこの兩者の毛色は、頭、軀幹、尾の上部は鐵灰色をなし、體下は黒色である。

(一) 印度レーテル (Indian Ratel) *Mellivora indica*

印度の最南部よりヒマラヤ山麓に亘れる地方に棲息し、主に丘陵地に穴居する。然しながら、北部印度にありては、大河の沿岸の寄洲に棲息する。常に牝牡對をなして棲み、鼠、鳥、蛙、其他種々の昆蟲を食ひ、北印度に於ては、墳墓を掘りて屍體を食ふのである。そこで俗に「墓掘り」の名がある。折々は蜜蜂の巢を襲ひて、蜜を嘗めることもある。又屢々家禽舎を襲ひ、損害を與ふることがある。

(二) 亞弗利加レーテル (African Ratel) *Mellivora ratel*

亞弗利加大陸の全部に亘りて産する。前種と異なる所は、黒き體下部と、灰色の上體部との界に沿ふて、體の周圍には歴然たる一白條を有することであつて、この白條は印度種には全くないのである。又齒も印度種よりは、大形にして、圓るく且つより太いのである。常に、蜜蜂の蜜を嗜むといふのである。

(一八) 水獺又趾獺 *Lutra*

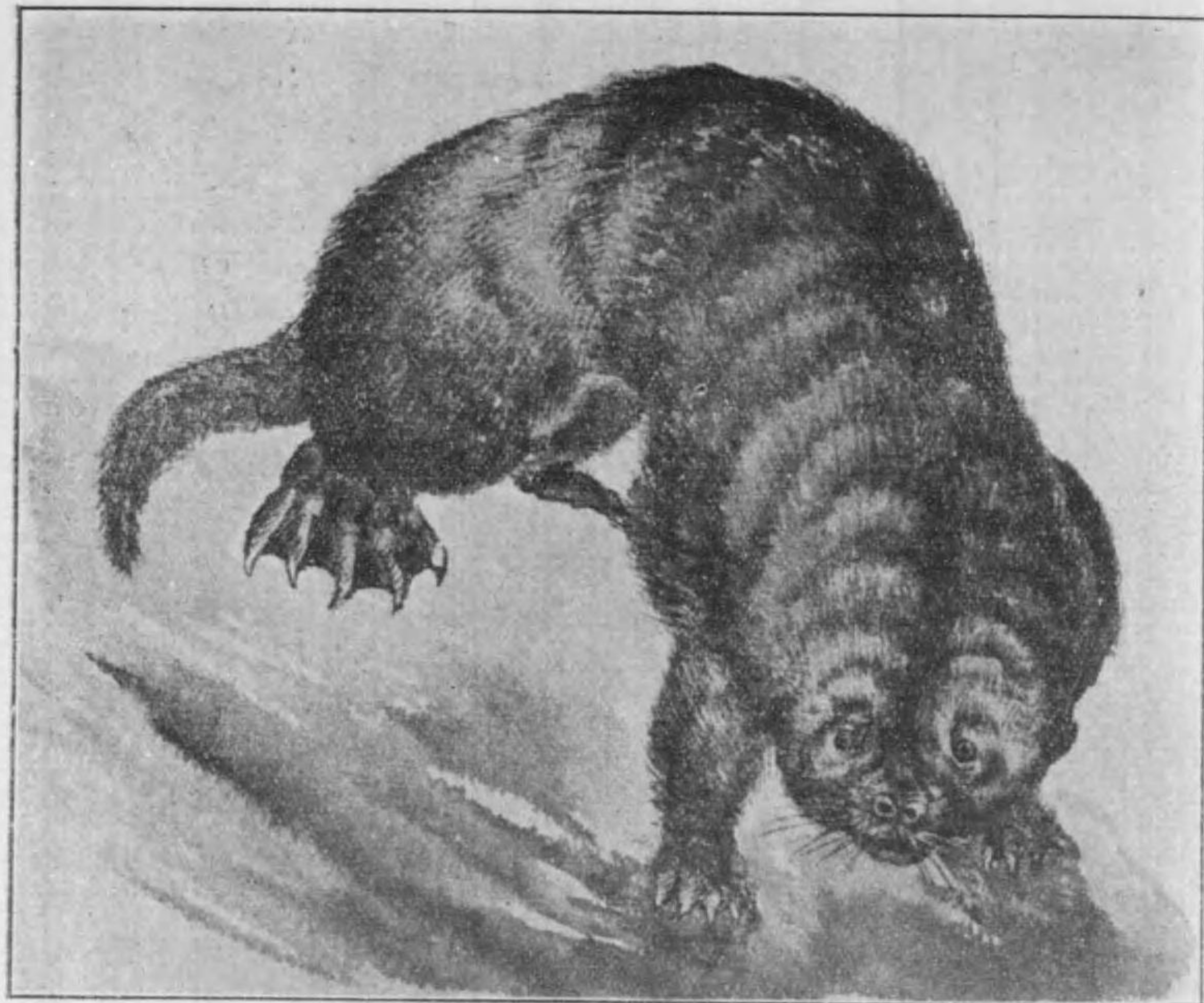
vulgaris, Erxl

英に「コンモン・オッター」(Common Otter)

と稱する。本洲及び北海道等に産し、其他歐羅巴及び北部亞細亞に産する。體長は二尺二三寸ありて、屈撓性に富み、尾は長くして、長さは一尺二三寸もあり、幅廣く、扁平にして、水中を泳ぐとき、舵の如く作用する。各肢には五趾を具へ、皆趾間に蹼を張りて、これをば櫂の如く使用して、巧みに水中を游泳するのである。眼は大きく、耳は短い。又上下兩唇には、剛き髯を有する。皮膚に次いで柔軟なる淡灰色の毛皮を有し、毛は長くして、冬は稍赤褐色を帯べども、夏は黒色である。



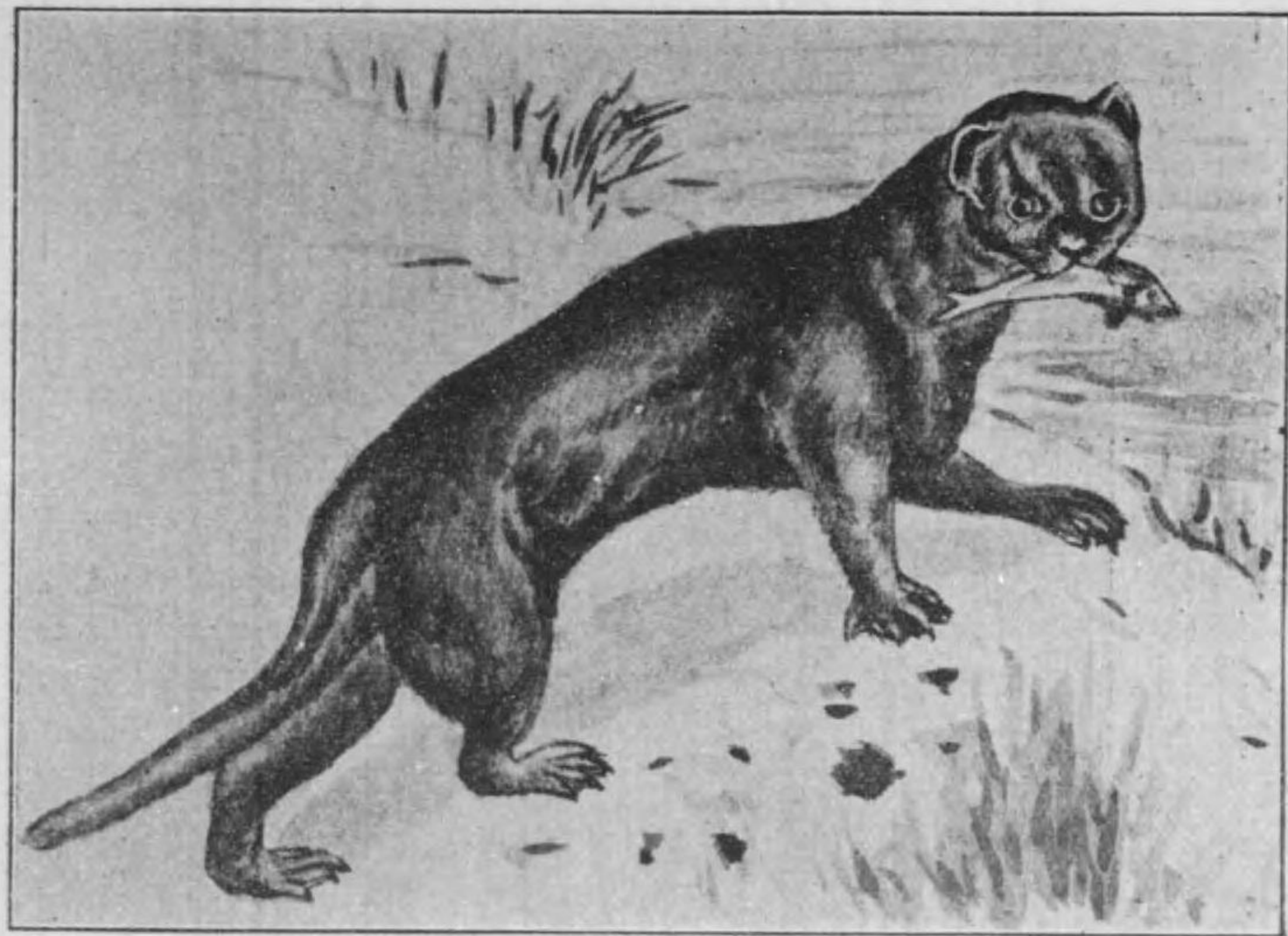
ルテレー加利弗亞 圖五十七第



海獺 圖七十七第

の命に因つて、水中をば出入するし、段々馴らして魚を捕獲することに使用するのである。而して印度、支那にては此の目的に水獺を用ゆるのである。

(一九) 海獺 又 臘虎
Enhydra marina, Exl
 英に「シー・オッター」(Sea Otter)といはる。頭は小い、耳も甚だ小く、その外面には毛少けれども内面には僅少の軟毛を生ずる。鼻端は裸出し、口邊には僅少の短い髭がある。胸部は肥大し、後部に至るに従ひ、狭少となる。前肢は殊に小く、その先端は截り



水獺 圖六十七第

體軀の形狀は、水棲に適する鼬鼠ともいふべきものである。常に河畔及び池沼の邊に穴居し、夜間出で、水中に入り、殊に魚類を貪食するのである。それは音を立てずに、静に水中に入り、肢をば魚の鱗の如く、巧みに使用して、體軀を廻轉したり、燃りたりする。彼れは水中に於て魚類を得ること能はざるときは、陸上をば跳ぶやうに疾駆して、五六呎の間も、食餌の搜索に出掛くるのである。而して一たび農園に出づるときは、家禽、幼豚、小羊をば掠奪することもある。その毛皮は外套の襟などに使用せられて居る。

この幼獸は、容易に教へ馴すことが出来る。犬の如く主人の跡を追ひ來り、主人

取られたるが如く見ゆ、指は太くして短く、爪は甚だ短小にして曲り、且つ毛中に隠在する。而して手掌には毛がない。後肢は大にして後方に向ひ、鰭状をなし游泳するに使用する。その趾間には蹠を張り、これには短小にして少しく曲れる爪を有する。尾は短くして扁平である。

毛色は、年齢と季節とに因りて變化すれども、充分に成長したるものは、暗褐色にして、處々に白毛を混入する。體長は三尺二三寸に達し、尾は一尺位もある。

我邦にては、北海道及び千島群島のウルツブ、ウシリ、スレート島の附近に産し、外國にては、北米アラスカ半島に接近せるアリユーション群島の一なるサアナツク島に夥しく産するのである。多くは海中に棲息すれども、時々沿海の岩礁上に上陸する。常に小魚、貝類、海膽を食ふ。齒は他の食肉類の如く、先端鋭尖ならずして圓く、鈍いのである。その齒式は $\text{I} \frac{3}{1} \text{C} \frac{1}{1} \text{P} \frac{3}{2} \text{M} \frac{3}{1} \parallel \text{C} \frac{2}{2}$ である。一牡は一牝と交り、年一回蕃殖し、牝は一兒を産む。

毛皮は非常に柔軟にして、黒色の光澤がある。之を外套の襟、帽子、その他の裝飾用に供する。一枚の價格は通常千圓で、往々二千圓に上るものもある。中にも最良のものは、毛皮一吋若干といふ價格の割合にて、賣買せらるゝ程珍重せらるゝのである。

〔六〕 熊科 (Ursidae)

熊は、その體は肥大にして、北半球の食肉類中の大なるものである。四肢は短く太く、且つ逞くして、前後肢共に五指(趾)を具へ、長き爪を有する。爪は猫の如く收縮すること能はざるのみならず、且つ割合に鈍きを以つて、他の動物を捕へて、その肉を裂くよりは、寧ろ穴を穿ち、或は樹木に攀縁するに適して居る。手掌は後肢の蹠と共に潤大にして、概して裸出し、全蹠を地に着けて歩行する。その動作は遅緩にして、犬の如く跳躍すること能はざれども、後肢にて直立するを得るのみならず、又前肢の掌上に食物を載せて、容易に之を口に運ぶことが出来る。

熊の頭は大きく、頭頂は幅廣く、耳は短く、圓形にして、且つ一面に毛を生ずる。鼻端は稍鈍く、眼は小なれども鋭く、尾は極めて短い。食物は雜食性なるを以て、臼齒の齒冠は鈍くして扁平である。齒式は $\text{I} \frac{3}{1} \text{C} \frac{1}{1} \text{P} \frac{4}{3} \text{M} \frac{3}{2} \parallel \text{C} \frac{2}{2}$ である。

熊は毎産二三子を産む。子は生れるゝや盲目にして、毛なく、五週間後に於て始めて毛を生ずるのである。濠太利亞を除き、殆んど地球上到る處に産し、熱帯産のあるものゝ外は、毛皮は粗く厚くして毛は長いのである。

〔一〕 熊くま又日本熊 *Ursus torquatus* Schinz. var. *Japonicus* Schleg.

英に「ジャパニースブラックベア」(Japanese Black Bear) といはる。亞細亞大陸に産する黒熊の變種にして、耳も咽喉の月輪も、彼れに比して小さい。北海道には産せざれども、駿河、甲斐、武藏の秩父、信濃、相模、下野、越中、越後等の山地に棲息する。編者は去る三十四年の七月時は正午頃、日光の白根山に於て、この種が、山頂の灌木叢中に於て餌食を索めつゝあつたのに遭遇した。編者は極く強度の近視眼の爲めに、その熊たるを氣附ずして、當時植物採集の爲めに上りたる他の學友の一人が、跪ぎて何にか植物を採つて居つたものと誤認して、彼れの背面を襲ふたやうな譯となつたのである。熊は驚いて、余等の方に振り向き、口を開き、舌を出して、余の前面二三間の所を横つて、右方の斜面を下り、狭い谷を通りて、すぐその側に立てる斜面をば登り、然かも樹木のなき所をば撰んで逃げたのである。熊が振り向いて來た瞬間は、余に取つては、驚愕の餘りなりしか、殆んど夢中であつた。聲を張り上げ、右手を上げて、急をば先頭の他の十數名の學友に知らせんとしたのである。所が余の數間先きに進める學友の一人、田村敬作氏は、余の聲に驚き、振り返つて余の方へ進み來られた瞬間、危くも熊と衝突せんとしたのである。當時我等の體には植物採集胴卵を有するのみであつて、武器は一つもなかな

つたのであるから、熊はよく我等の敵意なきを知つて、敵對し來らなんだものと思はれたのである。若し然らざりしならば、或は編者は、此處に讀者と相見ゆるの光榮を有せざりしならんかと思ふて、當時を回想する毎に、轉た天惠のありしを感謝せずには居られないのである。

然しながら、熊が人に取つて危険なる時期は、彼れが子供を携へて居る時である。彼れは魚類、蟹類、蟻等を食し、ヤマブドウを嗜み、杉の如き樹木の皮を剥ぎて、その流れ出る汁液を嘗めるのである。肉は美味にして食用となり、毛皮は敷物となり、膽は薬用となる。

〔二〕 黒熊くろくま又月輪熊 *Ursus torquatus*, Schinz.

英に「ブラックヒマラヤンベア」(Black Himalayan Bear) といはる。亞細亞大陸に産する黒熊であつて、耳は前種よりも大きく、月輪も亦大い。支那人はこの手掌をば珍羞として賞用するといふことである。

〔三〕 熊くま又魁 *Ursus arctos*, L.

英に「ブラウンベア」(Brown Bear) と稱する。我が北海道樺太より西比利亞、カムチャツカ、北部歐洲に産するも、とは英國にも産せしが、西曆千五十七年にスコットランド



熊 圖八十七第

理學博士八田三郎氏の「北海道の熊」といふ論説に據れば、北海道産のものは、肩より胸にかけて長い白斑がある。また全體が黒くして、顔丈け茶色なるものもある。又全體褐

にて捕獲したるものが、最後のものでは、以後絶滅したといふのである。體は大く、長け六七尺に達し、肩の高さは三尺一二寸にも達する。その成熟するは、生れて二十年後にして、大なるものでは、體重が八百封度、即ち我が九十六貫七百六十余匁のものもあつた。而して五十年の壽命を有すと云はれて居る。毛色は褐色にして、時には、喉下に月の輪の斑紋を有するものがある。

色のものは樺太の奥や、カムチャツカの方に多く産し、北海道には稀れであるといふことである。

北海道の熊は、英に「ジャバニース、ブラウン、ベイヤ」(Japanese Brown Bear) (Ursus Arctos, L. var. Collaris) とし、西比利亞の熊 (Ursus arctos L. var. normalis Sibiricus) と區別することもある。熊はその動作遲鈍なれども、飢餓に迫り、敵を受けて危急の場合には、眞に危険であつて、手掌で敵に打撃を與へて防禦するのである。樹にも登り、水を好みてよく泳ぎ、穴を穿つて棲むのである。夜間出でて徘徊し、草根、果實、魚類、蟹類、蟻などを食ふ、その力甚だ強くして、よく村里に出でて、家畜を掠め去るのである。

北海道に於ける熊の害は、先づ牧場内に侵入して、牛馬羊豚を捕ふることが、最も主なるものである。熊が是等を捕ふるは、突然後方より跳びかゝりて、頸部に噛み付き、骨を折り碎き、半死半生の態となして、之を脊負ひ、又は引摺り、或は後方より押しなどして、山中に運搬するが如き、實に巧妙機敏である。就中馬は熊を恐るゝこと甚しく、嘗つて、熊の肉をば、二十有餘頭の馬の鼻先に近づけたるに、何れも一種異様の鼻音をなし、後方に退き、恐怖するを認めたのである。北海道の山間を旅行する者、又は樵夫、青物採集者等の如きは、毎年危害を蒙むること少くはない。殊に夏秋の候は、晝夜の別なく

出沒し、交尾期空腹の際、兎を連れ居る時など、最もその性猛烈にして、従ひて危害を加ふることが多い。北海道廳第四部の調査によれば、去る明治四十一年五、六月に於ける害は凡そ次の如しである。

- 五月 江差警察部内 馬の死五。同負傷四。小樽 馬の死六。浦河 馬の死六。釧路 馬の死八。牛の死二。牛馬負傷各一。根室 馬の死七。同負傷二。網走 馬の死二。羊の死一。馬負傷一。宗谷 馬の死一。同負傷一。
- 六月 浦河 馬の死一。釧路 馬の死三。牛の死一。宗谷 馬負傷一。室蘭 馬の死六。牛の死二。

合計 馬の死四十五。同負傷十。牛の死五。同負傷一。羊の死一。(此項教育時論誌上 海道廳の害に據る)

冬季は洞窟中に隠くれ、蟄居の際繁殖し、毎回一乃至三子を産む。肉と脂肪とは食料に供せられ、膽は黒熊のよりも品質劣れりといふ。毛皮は敷物、寢具、手袋等に用ひらるゝのである。

〔四〕 亞米利加黑熊 (American Black Bear) *Ursus Americanus*
大きさは熊よりも小さく、その性質もそれよりも強暴ではない。

〔五〕 眼鏡熊 *Ursus ornatus*

南米に産する熊にして、眼の周圍には黄褐色の輪を有する。されば英に「スペクタクルドワーフ」(Spectacled Bear)といはる。

〔六〕 シリア熊 (Syrian Bear) *Ursus syriacus*

聖書にあく熊である。現今は唯ヘルモン及びレバノン山に棲み、小形である。出でて果樹園や葡萄園に徘徊して、食を索むるのである。

〔七〕 灰色熊 *Ursus ferox*

英に「グリズリーベア」(Grizzly Bear)といはる。灰色熊の義である。獵師は「エフライム」(Ephraim)と呼んで居る。吻端は狭長にして扁平であり、色は淡く、且つ短毛を生ずる。眼は極めて小さくある。犬齒はよく發達して有力である。吻端より尾に至るまでの體長は九尺許あつて、平均の體重は外國産の車を牽く馬位もあり、或は獅子の重さの三倍位もあるといへる程である。

熊科の大多数のものは、人の姿を見るも、攻撃を受けぬときは、人より遠ざかつて遁去するのであるが、灰色熊では、人の姿を見るや否や、人が徒歩して居らうが、又は馬に乗つて居らうが、そんな事には構はずに攻撃し來るのみならず、又武器の携帶の有無



熊 色 灰 圖九十七第

を問はないで、敵對し來るの
である。前肢の爪は、後肢の爪
よりは、少しく屈曲して、長さ
四寸二分乃至五寸許もあり、
これで樹木に攀ち登ること
は出來ぬが、よく穴を穿つに
適し、彼れに取つて有力なる
武器である。北米大陸の獸類
中で最も兇暴、悍惡なもので
ある。毛色はその名の示すが
如く、褐色に灰を混せるか、或
は鋼鐵の如き灰色である。

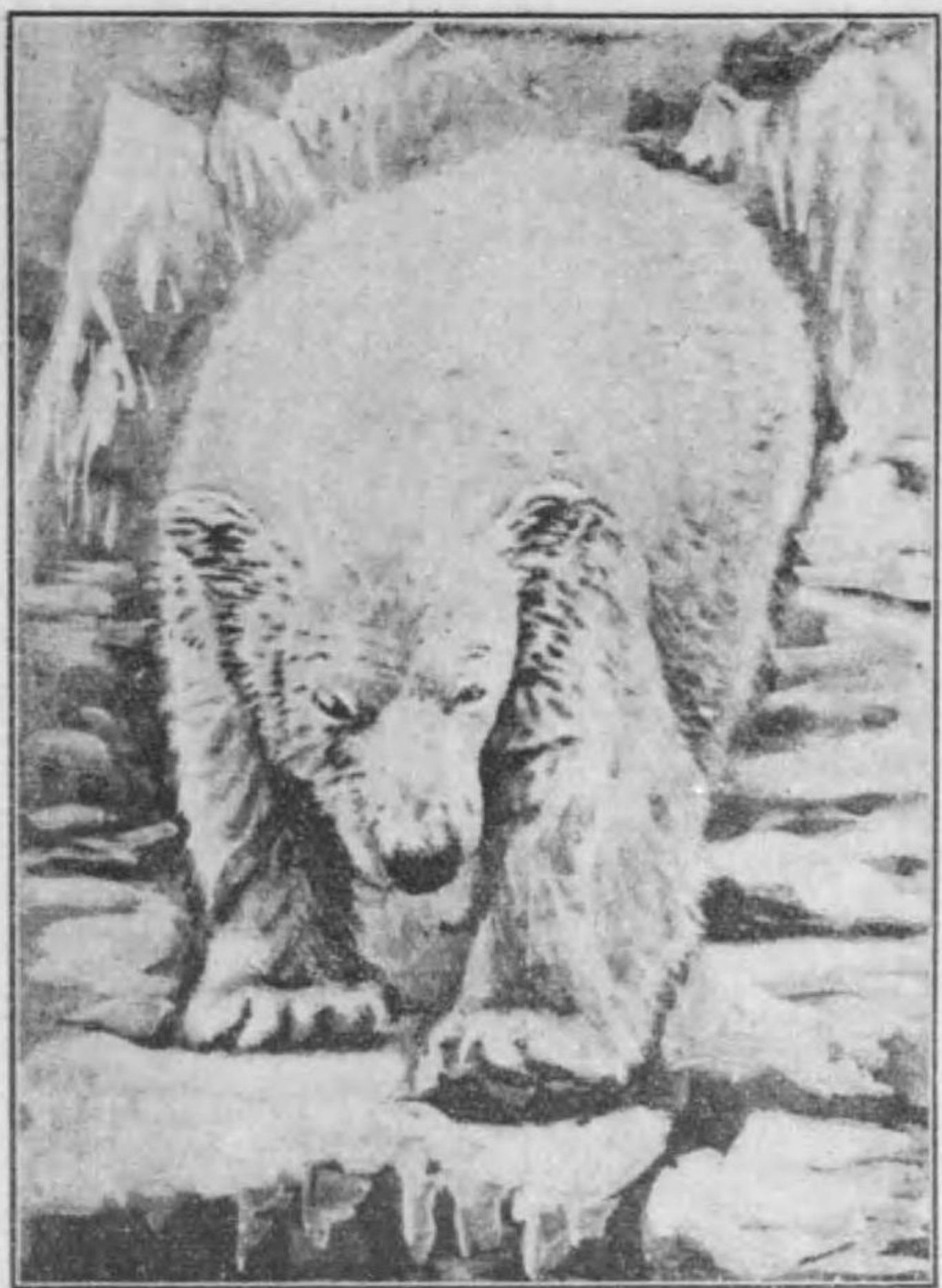
〔八〕 マレイ熊 (Ma-
layan Bear) *Ursus*
malayanus

成長したるものと雖も、體長は四尺四寸以上に超ゆることは稀れである。毛皮は殊
に立派で光澤があるが、毛は他の熊よりは短いのである。胸には帯黄白色の半月形の
斑紋を有し、又吻端と上顎にも、帯黄褐色の斑紋ある外、體は深黒色である。上下兩唇と
舌とは、大に屈撓性に富み、且つ長く伸長するを得るが故に、之をば野生の蜜蜂の巢中
に挿入して、蜜を嘗め取るに用ゆるのである。爪は非常に長く、他の熊と同じく頻りに
之を舐めるのである。殆んど全く植物質のみを食し、椰子樹を害するのである。

〔九〕 白熊しろくま 又北極熊 *Ursus maritimus*, Desm.

英に「ホワイト・ベア」(White Bear) 又「ポーラー・ベア」(Polar Bear) 又「アイス・ベア」(Ice
Bear) (氷熊の義) の名がある。我が千島より北極地方の、四時氷雪を以つて閉ざされたる、
沿海地方に棲息する。常に氷原上にあるを以つて、時としては、氷の融解等の爲めに、切
り離されて、遠く海洋に漂流することがある。故にグリーンランド海岸の白熊が、屢々
氷塊に乗りたるまゝ、アイスランドに運ばるゝことがある。

頭は小さく、鋭るごく尖り、耳及び口は割合に小さく、頸は體の他の部分と比べて甚
だ長く、且つ強健である。肢には短き、少しく屈曲せる有力なる爪を具へ、爪の色は黒く
ある。體は熊科中の最長なるものであつて、時には一丈三尺に達するものがある。中庸



熊極北 圖十八第

大のものでも、千六百封度、即ち我が百九十三貫六百匁位の體重を有する。毛色は個體に因つて相違はあれども、少しく黄色を帯べる銀白色であつて、よく四周の氷雪と一致し、爲めにその巨大なる體軀は、その捕へんとする餌食動物の注目を惹くことなくして、之に接近し得るのである。又その棲處が嚴寒の地であるから、全體には毛を密生し、蹠に至るまで長毛を生じて、防寒具となつて居る。然かのみならず、この蹠の毛の爲めに、足音を立てずに、餌食に近づく利益がある。

白熊はよく水中を泳ぎ、嘗つて陸地より八十哩の處を泳げるものがあつたといふことである。彼れは鮭を追ふ爲めに、水中に潜入し、口に魚を咬へて水面に出て、來ることもある。又氷上に眠れる海豹及び海象に忍び寄り、突然之に跳び付いて、頭骨を挫

折するが如き打撃を與へ、然る後之を食ふこともある。又水に入れる海豹をば追ひ駈けつゝ、水中に潜入し、海豹が逃出する唯一の通路たる、氷上にある穴に來る前に、先驅して、そこで待ち受け、難なく之を捕獲することもある。その他海岸に漂着せる鯨の屍肉を食ひ、鳥類、鳥卵、毒の類なども食ふのである。冬季に至れば睡眠を貪ることは、他の熊の如しであつて、岩礁の傾斜せる所にある罅隙か、或は積雪ある海邊の麓を撰びて、洞窟となし、頂上には小孔を穿ちて空氣の流通を計るといふのである。

以下記載する四種は浣熊科 (Procyonidae) として區別せらるれども、今熊科に合併して説述する。この類のものは一屬印度産のものを除き總べて亞米利加に産するのである。

[10] キンカヂウ (Kinkajou) *Cercoleptes caudivolvulus*, Illig.

英に「ホネー!」ペーヤ (Honey Bear) (蜂蜜熊) 又は「ポット」(Potto) ともいはる。中央メキシコよりブラジルに産しブラジルの土人は「ジツブラ」又は「ホフブラ」と呼ぶ。充分に成長せるものでは、大なる猫位の大きさであり、その大きさの割合には、非常に強いのである。毛は羊毛状をなし、色は淡い焦茶色の地に、幾分か暗色を帯び、且つ明瞭ならざる條がある。白



ウザカンキ 圖一十八第

齒は、熊とは異りて、前後兩臼齒を合せて、五枚宛、兩顎の左右に存する。舌は頗る長くして、屈撓性に富めるを以て、唇で届かぬ昆蟲類などの居る小穴中に挿入して、之を探り索むるのである。然し舌でも届かぬ所には、屈撓性ある尾を用ゆる。

捷に樹木上に攀縁し、一生涯の大部分は、樹上生活を營むのである。而して日中は球状に體をば捲き上げて横はり、夜間のみ出で、徘徊し、蜂蜜、果實、小鳥、卵などを食する。その食するに當てや、唇部にて坐し、一方の手で食物を握りたる後、他方の手で之を摘んだり、又は片々に挽ぐのである。

〔一一〕 浣熊 *Procyon lotor*

英に「ラクーン」(Raccoon)といはる。形狀と習性とは狸に似て、大きさは小さな狐位である。

毛皮は羊毛状をなせる灰色にして、これより出づる長毛は、黒と帯灰白色とを以て、交



圖二十八第

互に斑となつて居る。顔は黒褐色を呈し、口吻は尖れども撓め難いのである。尾は短けれども毛を密生し、暗灰色の地に於て黒輪を有する。日中は樹木の洞穴内に、體を捲上げたる儘、睡眠を貪り、夜間出で、徘徊し、樹木に攀縁することが巧妙である。趾には鋭爪を具へ、全蹠を地に着けて歩行する。

食物は動物質及び植物質より成り、よい機會さへあれば、食物を食ふ前に、水中にて激ぎ洗ふ習性がある。種名なる「ロター」(Lotor)は「洗濯者の義である。そこで英に又「ウワツシング・ベージャ」(Washing Bear)と呼ばれる飼養せる際に、屢々母親は、子供をば水中へ入れて洗ふ僻があつ

て、これが爲めに子供を殺すことがある。

浣熊は英領コロンビアよりパラグアイに亘りて分布する。肉は美味にして食用に供せられ、毛皮は馬車用の敷物として広く使用せらるゝのである。

〔一〕 赤色コアイチ (Red Coaiti) *Nasua rufa*, Desm.



赤色コアイチ 第三十八圖

一に「コアチモンヂ」(Coati-mondi)といはる。頭は狭く、口吻は突出し且つ動かし得るのである。舌は柔軟にして、且つ擴張することが出来る。全蹠を地に着けて歩行し、爪は甚だ強壯にして、よく食物をば口に運ぶに用ひらるゝのである。尾には輪状の斑紋を有し、毛色は帯赤褐色である。日中は隠伏すれども、夜出で、徘徊し、敏捷に樹枝上を攀縁して、鼻をば頻りに動しながら、餌食を探索する。殊に鳥の巢の掠奪者であつて、親鳥、雛、卵も大に貪食する外、小哺乳類、昆蟲、果實も食ふのである。ブラジルに多く産し、大さは家猫位である。

〔二〕 白鼻コアイチ (White-nosed Coaiti) *Nasua narica*

毛色は暗褐色にして黒の斑がある。ブラジルに多く産し、鼠や野鼠を捕獲する外、花園に於ては蝸牛、蛞蝓を食ふのである。然しその鋭爪と尖つた吻端を用ひて、蚯蚓を探る爲めに、地を掘り起して庭園を荒らすのである。

第二亞目 鰭脚類 又水棲食肉類 (Pinnipedia)

食肉類中、鰭虎を除いて唯一の海獣である。従つて體の形狀、構造等は水中の生活に適する。體軀は魚形をなし、頭は體の割合に甚だ小さく、圓形をなし、眼は大きく、唇は膨れ出づ。耳殻は海豹、海象の如く之を有せざるものあれども、鰭脚類にては之を有するのである。體の表面には滑澤なる短毛を密生する。四肢は短くして鰭状となり、皆五指(趾)を具へ、その間に蹠を張り游泳に用ひらる。又趾には鈍爪若くは銳爪を有する。後肢は前肢よりも長く、遙かに體の後方に位する。而して海豹の如く、耳殻を有せざる種類にては、後肢は壓搾せられ、之を後方に向けて、尾鰭の如く使用して、游泳に用ゆれども、耳殻を有する鰭脚類にありては、後肢は體下に於て、前方に向けられて居るか、若くは體と殆んど直角の位置に於て、外方に突出して、游泳鰭として使用するのである。又彼

等が游泳するときは、前肢をば體の側方に引き寄せ、之を前後に動して、舵の如く使用するのである。

鰭脚類は、水中の運動は極めて巧妙なれども、一たび陸上に出づれば、その動作甚だ拙劣である。即ち體の前部を擧げて、之を前方に投げ出し、前肢を用ひて、體をば地に固定する支へとなし、背部を屈曲して、體の後部をば前方に引き寄せて進むのである。

骨格は概して輕快にして、皮膚下には脂肪層ありて、水中生活に於て、體温の冷却するを防ぐのである。齒式は種類によりて一様でない。門齒は常に 3 よりは少く、食肉齒は發達しない、又前臼齒と後臼齒とは、圓錐狀をなして尖つて居る。この類は魚類、甲殼類、軟體動物等を食するを以つて、臼齒には鋭るごき咀嚼面を有する。海豹の齒式は一般に $I \frac{3}{1} O T D K m I = 34$ なれども、極めて稀れに門齒は 2 のこともある。海象の成長せるもの、齒式は $I \frac{1}{1} O T D K m O = 18$ にして、幼時にありては門齒は 3 なれども、間もなく減じて 2 となる。又上顎の犬齒は、犬なる牙となりて口外に突出する。

鰭脚類の大多數のものは、南北兩半球の極寒地の海洋に棲息し、南氷洋に少しく産する外、多くは北氷洋に近き地方に棲み、又少しは熱帶の海に産するものがある。

〔一〕 海豹科 (Phocidae)



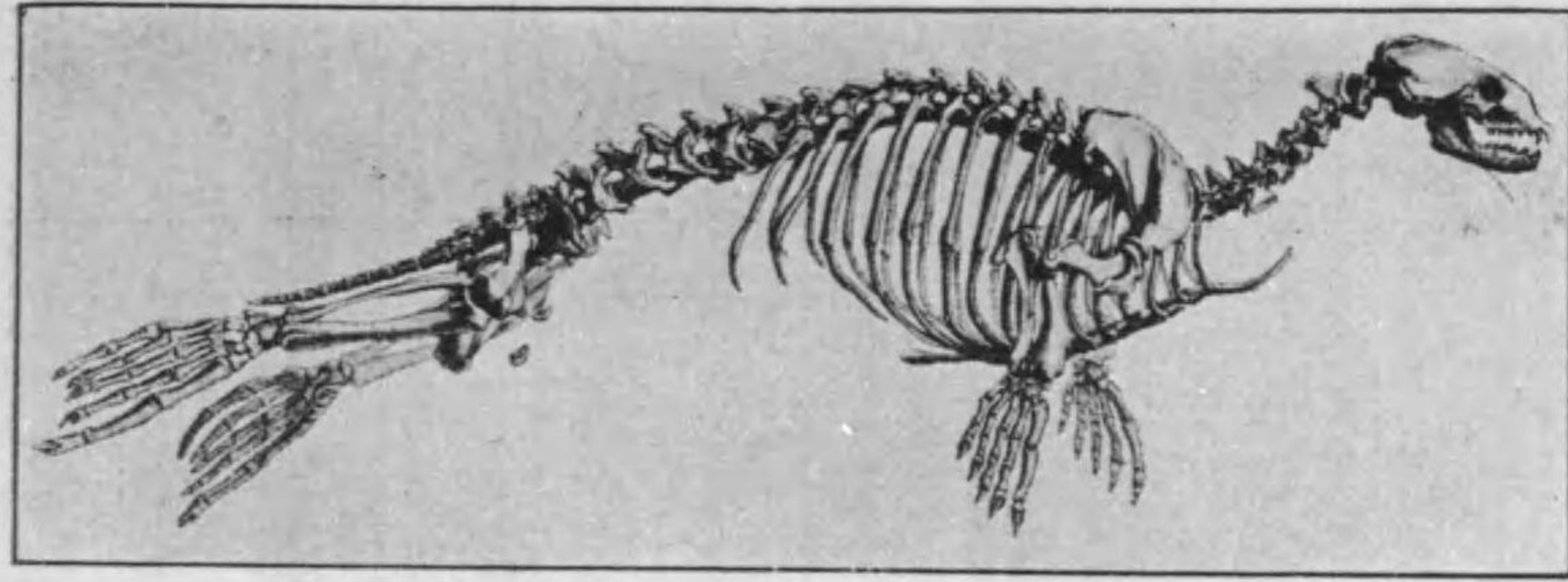
圖四十八第

海豹

頭部は圓く、軀幹は延長して、後方は狭くなる。耳殼は海豹の如く、之を有するものと、臘肭獸の如く之を有せざるものがある。犬齒は短く、臼齒の咀嚼面は鋸齒狀をなして鋭ごい。尾は甚だ短く扁平である。

〔一〕 海豹 *Phoca vitulina, L.*

英に「コンモンシール」(Common Seal) といはる。元來海豹の類には約十八種を有し、温帶及び寒帶の海洋に棲息し、皆耳殼がない。殊によく水中の生活を好み、永い間水下に沈むことが出来る。水中に居る時間は平均五分乃至八分間なれども、時として、これより三倍も永く水中に潜むことが出来る。呼吸する毎に、鼻孔をば廣く開くが、水中に跳び込む時には、鼻孔を取り圍める括約筋に因て、之を閉ぢるを以て、水は呼吸道に侵入する憂はないので



海豹の骨格 圖五十八第
(after Blainville.)

ある。

海豹は小群をなし、常に同一地方に徘徊し、周遊をなすことはない。我が北海道、千島列島より太西洋及び太平洋の北部に産する。稀に南方は地中海にまで棲むものがある。體長は五六尺に達し、體面には剛き帯黄灰色の毛を生じ、褐色若くは帯褐色の斑紋ありて、その状豹に似て居る。されば海豹の名が起つたのである。體下の色は淡い。體を被へる毛には、柔軟なる下毛なきを以て、毛皮はあまり貴ばれて居ない。然しその性質よく濕氣を凌ぐを以つて、雨具、天幕、衣服等を製するに用ひらる。又脂肪よりは油を製し、燈油は機械油として使用する。又肉は食用となし得るのである。

水中を游泳するときは、頭と肩とを水上に出すのである。時々海濱岩礁上に來りて睡眠し、此際番兵を置きて警戒の任に當らしむるといふことである。常に魚類を食す。

し、一日七封度位の重量に上る程の魚類を食ふのであるから、漁場に破壊を與るのである。又甲殻類、軟體動物を食ふのである。

〔二〕 グリーンランド海豹 (Greenland Seal) *Phoca graenlandica*

幼獸と親とは、著しく毛色を異にして居る。成長せる牡は、稀に體長六尺以上に及ぶものがある。その毛色は主に帯黄白色であつて、頭の前部は黒い。又肩より尾の基部に近き所に亘れる、半圓形の二つの幅廣き黒帯を有するを以て、「サドルバック」(Saddle-back) 鞍背の義、又は「ハーブ」(Harp) 堅琴の義の俗名を得たのである。

ニウー、ファウンドランドより北海を経て、北氷洋に産し、殊にグリーンランドの沿岸に夥しく棲む。その性大に群居を好み、大群をなして集合し、冬季にありては、遙か南方の地方へ、移住をなすのである。グリーンランドに於ける年々の捕獲高は、甚だ多くして、時にはたつた一つの漁業團體でも、尙一週間に、二萬頭を捕へた位である。而してグリーンランドの海岸は、この獸の蕃殖場として有名である。脂肪より油を製する外に、毛皮は靴用として廣く使用せらるゝのである。

〔三〕 バイカル海豹 (Baikal Seal) *Phoca sibirica*

淡水産の海豹にして、バイカル湖に棲む。

〔四〕カスピ海豹 (Caspian Seal) *Phoca caspica*
カスピ海に棲む種である。

〔五〕灰色海豹 (Grey Seal) *Halichoerus grypus*
北大西洋に産し、亞米利加沿岸よりは、歐羅巴の沿岸に來遊することが多い。體長は八尺に達する。

〔六〕鶏冠海豹 (Crested Seal) *Cystophora cristata*, Fabr.

鼻孔は頭巾狀に擴張して、動物の意志に従つて自由に膨脹させたり、又收縮させることが出来る。そこで一名を「ブレードド・シール」(Hooded Seal) 頭巾海豹の義、又「ブラッダー・ノースド・シール」(Bladder-nosed Seal) 袋鼻海豹の義といはれて居る。セント・ローレンス灣はその好んで徘徊する一地方である。

〔七〕坊主海豹 (Monk Seal) *Monachus albiventer*

温暖地方の海に産し、屢々地中海又は黒海に見ることがある。

〔八〕西印度海豹 (West Indian Seal) *Monachus tropicalis*

西印度諸島の如き温暖地方の海に棲むものである。

〔九〕豹海豹 (Leopard Seal) *Ogmorhinus leptonyx*

南半球の温帯地方の海、若くは南氷洋に棲める海豹には四種あるが、この類はその中の一種である。これは猫狀の海獸であるが、その習性等に關しては、殆んど判かつて居ない。サー・エルネスト・ジャックレトン氏 (Sir Ernest Shackleton) が南極に遠征を試みられたとき、幾多の標本を得られたのである。短い光澤ある剛毛は、銀灰色をなし、帶黄白色と、暗灰色との斑點がある。充分に成長せる牡は、體長十二尺に達するのである。

〔一〇〕象海豹 (Elephant Seal) *Macrorhinus proboscidea*

英に又「シー・エレファント」(Sea Elephant) (海の象の義) といはる。鰭脚類中の最大なるもので、その極めて伸長せる鼻より、尾端に至るまでの長さは、全く二丈二尺もある位であるから、一頭より採取する油は、二百ガロン即ち我が五石四升以上の多額に上るのである。又その大なる毛皮は、價値あるものである。牡の毛は常に帶青灰色にして、暗褐色となれるものもある。而して牝の毛色は牡よりも暗色である。

〔一一〕海驢 (Otaria stelleri) Less.

英に「ステラース・シー・ライオン」(Steller's Sea Lion) といはる。本邦にては、北は北海道及び千島列島より、本州の太平洋沿岸、並に日本海沿岸を経て、九州四國等の海中に産し、外國にては、ベーリン海なるブリビローブ群島附近、南はカリフォルニアに至る北米

の沿岸に産する。毛色は暗褐色若くは帶黃褐色にして、體長は一丈七八尺乃至二丈に達する。常に水中に群泳するか、或は岩礁上に團欒し、主に魚類を捕へて食ふのである。その眠むるとき、若くは哺乳する時は、岩上に出で來り、その時は必らず一疋は眠らずして、警戒の務に當り、一たび危険あれば、叫聲を發して警戒を興へ、一群皆水中へ逃去するのである。この獸はよく大聲を發して吼ゆるものであつて、その啼聲は、犬や牛の吠聲ともいふべく、又虎の嘯き聲ともいふべきか。恰も喉部につかへた物をば急に吐き出す時、發する音の如くにして、調子は鋭いものである。その陸上にあるや、時々尾端にて、顔や耳を撫で、「グワー、グワー」と啼くのである。毛皮は濕氣に感せざるを以つて、雨具等を製し、或は細く截りて索となし、その大なるものをば敷物(十圓位の價格)とする。齒は彫刻の材料に供し、肉は稍臭氣あれども食用となすべく、脂肪より取りたる油は燈用に供するのである。

海驢の恐るべき敵は、シャチと鱧トカとである。元來一夫多妻であるが、一牡は大抵三乃至四牝と交るのである。

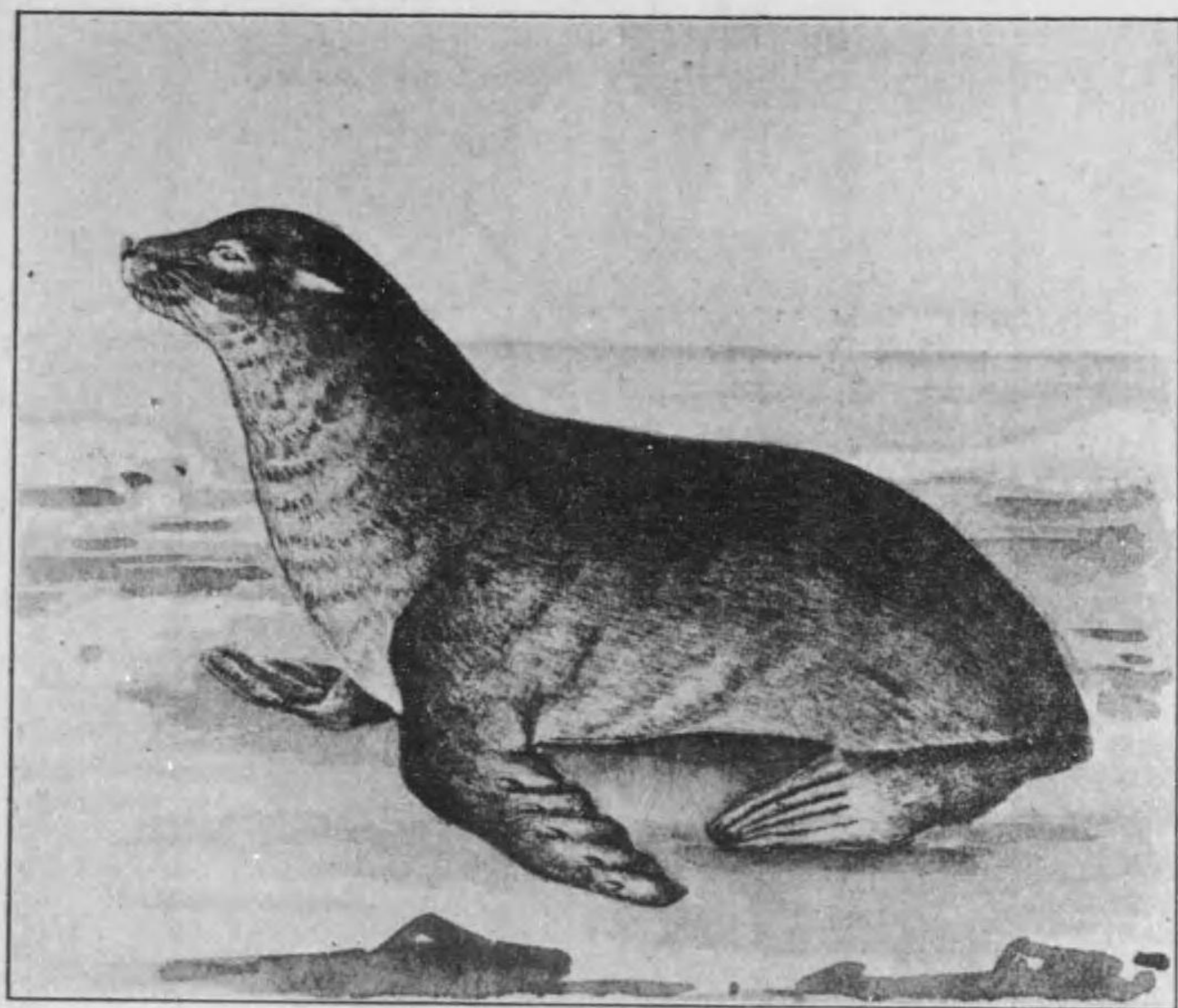
〔一一〕 バタゴニア海驢 (Patagonian Sea Lion)

Otaria jubata, Forst.

ペルー、チレ、アルヘンチナ、フエゴ地方、フォークランド島に於て、時に群集することがある。體長は七尺に超ゆることは稀れであるが、キャピチンクック氏は、これよりも二倍もあるものを見たことを報告して居る。尤も折々は、一丈二尺もある濠太利亞の海驢 (Australian Sea Lion) にも遭遇することがある。頸と肩とに生ずる波狀に縮れたる剛毛の塊は、恰も獅子の鬚たてがみの如くに見ゆるを以つて、英に「海獅子」(Sea Lion) の名が起つた譯であるが、本邦其他北太平洋に産するものにはこの鬚狀の毛塊はない。海驢の類は、海豹類と異りて耳殻を有し、又前肢の長さは、後肢よりも僅か短いのである。而して後肢は、體下に於て前方に向けられ、陸上にあるや、これで體をば前方に推し進めて、歩むのであつて、海豹よりは遙かに敏捷である。また海豹類にては、頸が不明なれども、海驢類にては、この部が明瞭に判然して居る。海驢類の主なる食物は、魚類、甲殻類、鳥賊類であつて、魚類は全く丸呑にする。然しながら動物質の食餌に缺乏するときは、海藻も食ふ場合がある。又バタゴニア海驢は「ペングイン」も食ふそうである。

〔一二〕 臙膈獸 Otaria ursina, Gray.

アイヌ語で「チツブ」又「オホチツブ」といはる。英に「ノーザン、フアー、シール」(Northern Fur Seal) (北地産の毛皮) 又「シー、ブー、ヤ」(Sea Bear) (海熊) の名がある。體軀は長くして、後方



圖六十八第 鰻 胸 獸

に至つて細く、尾は甚だ短い。四肢共に短く、前肢は鱗状となりて、之を用ひて迅速に游泳するのみならず、陸上に出たるときは、左右の前肢をば、交互に踏み換へて、前方へ出し、兩方共に、前へ出でたる後に、後肢を舉げて、前へ引き寄るのである。行歩は頗る迅速であつて、人が之に追ひ付くには、大に駆け出さねばならぬ位である。後肢は後方に向ひ、游泳の際には、楫の用をなすに過ぎないのであるが、陸上の歩行には全く用をなさないのである。

充分に成長せる牡では、體長七八尺に達し、體重は五六十貫を超ゆる

が牝は牡よりも小く、體長は四尺内外にして、體重も牡の二分の一である。體色は年齢に因つて異なれども、成熟せる牡では、濃褐色にして、所々に濃灰色の長い光澤ある剛毛を有し、腹部は淡色である。また牝の毛色は、鼠色にして光澤あり、胸と腹とは純白色なれども、成長するに従ひ、茶色を帯び、その白色の所は、青黄色となるのである。

鰻胸獸は、四度乃至五度の水温を好み、その蕃殖場は北太平洋に三個所ある。その一つはベーリング海であつて、北緯約五十七度、西徑約百七十度に位する米領のプリビローブ群島(Pribilof Islands)である。この群島は十八世紀に於て、露人プリビローブ氏の發見したものである。その一つは、樺太東岸の中央、角忍耐岬の南方にある海豹島である。この島は長さ六町半、幅三十間許りで、その周圍には砂濱がある。これは露領時代にはロツペン島と呼んだものである。その一つは堪察加半島の東岸を距る約百海里、北緯約五十五度、東徑約百六十七度に位するコンマンドルスキイ群島である。この群島はベーリング海峡の發見者なるピタス・ベーリング氏の官職「コンマンドル」(我が中佐に)に由來して命名せられたものである。

鰻胸獸は潮流を追て回游するものにして、その我邦に來るものはコンマンドルスキイ群島に棲むもので、房州の南端より正南八百海里の海上をば、回流の南の限界と

して、それよりその根據地に向つて、再び北に歸るのである。即ち一月中旬より二月頃には、八丈島沖より犬吠岬の沖合にまで來遊し、それより徐々に北方に向ひ進み、三四月頃には磐城沖、金華山沖、鮫港附近の沖合へと、次第に集り來り、五月初旬には、鮫港の東なる襟裳岬沖に至り、同下旬より六月上旬には、襟裳岬を距る三哩乃至三四十哩の所に達し、六月中旬より下旬に至りては、厚岸附近の沖合に至り、尙北上して根室花咲地方の三哩乃至二十五六哩の所に至るのである。この期は分娩に近くを以て、一層速力を早め、コンマンドルスキイ及び海豹島等の如き蕃殖場に向ふのである。(この頃國説所載南摩紀磨氏臘肭獸獵談に據れるもの多し)

臘肭獸の食物は、魚類及び鳥賊類にして、夜間多く之を索るのである。肉は食用となり、毛皮は英國倫敦に送られ、偽獵虎として、廣く賞用せらるゝのである。

(二) 海象科 (Trichechidae)

上顎の犬齒は大きく、口外に垂下して牙となる。また臼齒はその出來始めは鈍く尖れども、漸々消耗する。

(一) 海象 *Trichechus rosmarus, L.*

英に「ウラルルス (Walrus) 又「モース (Morse) 又「シー・ホールルス (Sea-Horse) (海馬) 又「ホールルス



海象 圖七十八第

ホエール (Horse-Whale) (馬鯨) 又は「シーカウ (Sea-Cow) (海牝牛) といはる。頭部は特に顯著なる形貌であつて、それは割合に小さいが、口吻は凸隆して、長き針金狀の剛毛を生ずる。又上顎よりは巨大なる犬齒が、牙となつて下方に突出する。犬齒の立派なるものは、長さ二尺に達し、その基部に於て、周圍の長さが五寸八九分もあり、重量は四封度乃至十封度、即ち我が四百八十餘斤乃至約一貫二百十斤もある。牙は海象に取つて攻撃防禦の武器となり、又氷を突き破りて、氷面

に攀縁するの用をなし、又岩角に之を突き懸けて岩に登る用をする。其他食餌の一なるオホノガヒ類の如き貝類をば、泥中より掘り出すに使用するのである。

生れて二歳の子では、牙は唯一二吋位しか伸びないから、食餌を探るには全く役立たないのである。そこで母親は永い間、幼獣を哺乳するものにして、子が牡なれば、母親と同大位になる迄は、乳を飲むのである。斯く幼児に哺乳する期間が、永いのを以て考へると、その蕃殖期は二三年の間を置いて来るものと思はれる。而して他の鯨脚類の如くに、毎産一子を産む。母は子を愛撫する情に富み、前肢の間に子を抱へて、海中を游泳する。若し子を奪はれんとするときは、性極めて猛烈となり、死を以つて之を護るのである。且つ又その子供は、親が殺さるゝも、死骸の側を離れざるを以て、母子共に獵者の手に落ちるといふことである。

體は重々しく、且つ大にして、體長は成熟せるものにては、一丈二尺に達するものも、普通でなくはない。また胸の周圍は、平均一丈乃至一丈二尺にして、體重は屢々一噸即ち我が二百七十一貫許を超ゆるものがある。皮膚は黒くして、皺襞を有し、殊に肩部に於ては、皺に富んで居る。全體面には褐色の毛を疎生すれども、老齡のものにありては、皮膚は殆んど裸出するのである。

北氷洋の海岸に大群をなして棲息し、その氷上にあるや、相互に轉倒したり、跳ねたりして、牛などの如く、高い吼聲を出して啼き、喧騒を極めて居る。而して全群の眠らんとするや、必ず番兵を置いて、白熊其他の敵の警戒に當らしむるといふのである。食物は、二枚貝類の某種、甲殻類、海星類、海膽類、蠕蟲等にして、又海藻を食する。

牙は其質象牙の如くなるを以つて、彫刻の材料に供せらる。エスキモ人は、之を用ひて釣鉤を造り、腸を振りて網となし、脂肪と肉とを食ひ、骨と皮とを、諸種の器具製造用に供する。脂肪は動物の大きに比較すると、非常に分量が少いのである。今より凡そ五十年前に、捕鯨業者はその利益の少くなるを見るや、海象の捕獲に着目して、ベーリング海峡に進入して、非常なる多数を屠殺したのである。而して十年間に、十萬頭は捕獲せられたものに相違ない。而してこれより得たる油の全量は、約二百萬ガロン（一ガロンは凡そ我が二升）で、牙の全量は約四十萬封度（一封度は我が百二）であつたのである。然かも現今に於ても、海象は北氷洋に近い沿海には尙夥しく群居するのである。

第四目 有蹄類 (Ungulata)

有蹄類は最も有用なる動物を包括する目にして、家兎以外の食用獸類は、皆この類に屬するのである。この類の構造は、種屬に因つて異同を見れども、その大多數のもの

は、大形なる體軀を有する。趾數は四個を超ゆることなく、その趾端には、大なる箱狀の爪を以て包まる。之を蹄といふのである。ウングラタ(Ungulata)は拉丁語の「ウングラ(Ungula)より出でたるものにして、爪若くは蹄の義である。皆鎖骨を有しない。臼齒は多くは潤大鈍頭にして、植物質の食物を磨碎するに適する。今、趾の數に従ひ、之を大別して次の三亞目に區別する。

第一亞目 奇蹄類 (Perissodactyla)

重々しく肥大なる獸にして、前後肢共に拇指(趾)をば必ず缺いて居る。蹠は前肢に四指を有すれども、後肢の趾數は奇數である。而してその他の種に於ても、指(趾)の數は、前後共に奇數にして、第三指(趾)は最もよく發達して、地を踏み、趾端に蹄を破るのである。犀にては、兩肢共に三指(趾)地に着けども、馬にては、第二と第四指(趾)とは、僅かに痕跡を有するに過ぎない。胃は單一にして反芻することなく、盲腸は長大である。

第二亞目 偶蹄類 (Artiodactyla)

或るものは、體軀は重々しく肥大せるものあれども、又或るものは體軀は細長にして、優美なるものもある。又四肢は短く、皮膚は厚く裡出し、僅に剛毛を有す

るのみのものあれば、又毛を密生するものもある。前後肢共に、有蹄の四指(趾)を具へ、中央の二指(趾)即ち第三第四の二指(趾)は最もよく發育して、専ら歩行に用ゐらる。而して是等の左右に位する二指(趾)即ち第二第五指(趾)は、豚、駱駝の如く、往々發育不完全にして、後方に位して懸り、地に達せざるものもある。馴鹿にては、第二第五指(趾)は、發達して地を踏み、河馬にては、第五趾が地に着いて居る。上顎には、門齒と犬齒とを缺くものがある。この類の中には、一旦胃に入りたる食物をば、再び口に戻し、細かく咀嚼して、また嚥下するものがある。この作用を名づけて、反芻(Rumination)と稱する。而して反芻すると、否らざるとに因り、この類を小別して左の二類とする。

第一類 反芻類 (Ruminantia)

第二類 不反芻類又雜食類 (Non-ruminantia)又(Omnivora)

第三亞目 爪蹄類 (Lamangia) 又 (Lamannangia)

小形の獸にして、外形習性は、齧齒類の「アゴウチ」(Agouti)に似て居る。上顎の門齒は、三稜形にして鋭る。ごきことは、大に齧齒類と異れども、その持續的に成長することは、亦齧齒類と似た所である。然して臼齒は、反つて有蹄類に似た所があ

る。前肢には四指、後肢には三趾を有し、その部にある幅廣き短爪は、皮膚を以つて連結せられて、蹄状をなせること、及び皮膚の厚きことは、象に似た所である。肢の構造は、象に似たる所多く、又胃の構造は、馬や犀などの胃によく酷似する。従つてこの類は、之を獨立の目に區分する學者あれども、今、有蹄類の一亞目として記述する。

以上

第一亞目 奇蹄類 (Perisodactyla)

(一) 馬科 (Equidae)

體軀は中庸大で、頭は稍長く、耳は常形にして尖り、頭上に直立して自在に動き、眼は大にして鋭く、前額は廣く、頸は長く縦扁で、胴も長く、胸部は腹部に比して大きく、四肢は長いのである。

指(趾)骨の中で、最も發達せるは中指にして、よく地に着き、軀重を支へて前進せしむるのである。然れども前世界に棲息せし馬類の祖先は、五指を有せしものにして、現今の馬の指骨の兩側に存する小形の骨片は、第二指と第四指との遺物である。

齒は植物質を食するに適する形狀をなし、門齒は大きく鑿狀にして、その咀嚼面には、横斷せる卵形の凹處を有する。犬齒は唯牡に於てのみ、上下兩顎に一對を有し、小形にして、圓錐形を呈する。臼齒は化石種に於ては、上下兩顎の各側に七個を有すれども、現今の種類にありては、六個を有するを常とする。犬齒と臼齒との間には、空隙を存するを以て、杏輪(くわん)を懸るを得るのである。胃は簡單なる囊狀をなす。その性好んで群居を爲すのである。

(一) 馬 Equus caballus

英名は「ホールス」(Horse)である。漢名は馬で、和名は「うま」又宇馬萬葉集字摩(日本書紀)于摩(同上)牟馬(倭名抄)いはうみ、もの(仙覺萬葉集註釋卷二曰……むかし百濟國より馬をこの國へたてまつりたり……)いはうみ、もの(とぞいひける)と稱へて居る。うまはうましのうまで、美しいといふことを意味するそうである。

頭部は牛の廣潤なるに反して長く、稍左右より壓迫せられ、耳は牛の斜めなるに反して、額上の兩側に直立し、長大にして自由に動くのである。鼻端も自由に動き、食物をば口に運ぶのに都合がよい。頸は長くして、その背面には鬃(たてがみ)を生じ、胸は廣く、腹部は割合に緊り、臀部は廣く、尾根より總狀の毛を生じて、長く垂下する。四肢は牛よりも遙か

に細長にして、中趾のみ地を踏み、これには蹄がある。而して馬科の通性に於て述べたる如く、第一と第五指趾とは、全く消滅して、第二と第四趾とは僅にその痕跡を存するに過ぎない。然しながら今日の馬の祖先は、明らかに五指を有せしことは、エール大學化石學教授マーシユ氏(去る三十二年三月逝去せらるる)の研究に因つて、明らかにせられたのである。

氏は北亞米利加の地層を調査し、第三紀の初期なるエオシオン世の地層よりして、今日の馬の祖先と考ふべき一化石を檢定して、之を「エオヒツバス」(Eolippus)と命名した。この馬の前肢には、四指と、その外に不完全なる拇指を有し、後肢には三本の趾が明らかに分れて居つた。而して體の大きさは、狐乃至羊位であつたのである。次にエオシオン時代の中頃に出でたる馬は「オロヒツバス」(Orolippus)にして、前肢のよく發達せし四指は、尙明らかに存在せるも、不完全なる拇指は消滅したのである。エオシオンの終に出でたる馬は「メソヒツバス」(Mesolippus)にして、前肢は四指を有すれども、その中、小指に當りたるものは、發育不完全にして、甚しく萎縮して用をなさないものである。次にミオシオン世に出でたる馬は「ミオヒツバス」(Miolippus)にして、前肢の小指は全く消滅し、三指中の中央の一指のみ、甚しく發達して蹄となり、その他の二指は次第に萎縮する

やうになつたのである。ミオシオンの末に出でたる馬は「プロトヒツバス」(Protolippus)にして、三指の中央のものが、益々よく發達したのであるが、それと同時に、左右兩側の指は萎縮した。既にして「プリオシオン」時代に至れば、現今の馬と、左程甚しく相違せざる「プリオヒツバス」(Pliolippus)が出でたのである。その中趾は非常に發達して大となり、且つこれが兩側にある第二指と、第四指とに相當する部分は、僅に痕跡を止むるに過ぎないのである。次に出でたるは、現代の馬即ち「エクアス」(Equus)であつて、中指は前者よりも一層大きく、發育するに至つたものである。

馬の毛色は、體を被へる毛、及び皮膚の色彩にして、飼養者の嗜好と、その用途とに因り、馬を相し、その價格を定むるに影響を有するものにして、これには種々の稱呼がある。鹿毛とは、鬣尾及び四肢の下端、黒色にして、他は悉く褐色なるをいふ。栗毛とは、前者の如く褐色なれども、その異なるは、鹿毛の如く、鬣尾、四肢の下端等が、黒色を呈することなく、全體同一色なるものである。青毛とは、通常黒毛を有するをいふ。而して眞の黒毛といふは、皮膚の色も亦黒く、耳の内面に至る迄も、全く黒色なるをいふ。月毛とは、通常白色なるをいふ。河原毛とは、軀幹の毛色、灰白色にして、稍赤色を帯び、肢端並に鬣尾の毛色が黒いものをいふ。芦毛とは、白色と黒毛とが混せるもので、皮膚の色も亦黒い

のである。また糟毛といふは、軀幹は赤と白の二色を有し、鬣尾、肢端にある毛が、黒色のものをいふのである。

中央亞細亞及び南亞米利加には、野生の馬が群居する。然しこれらは、家養種の子孫であつて、永い以前より野生々活々を營みたるものであるべきは、蓋し疑ひを容れざる所である。馬は隨分古代より飼養せられたもので、歴史前の人類が、馬を食せしこと、及び飼養せしことも、亦明らかであるといはれて居る。

『馬は我國では、何時頃から居つたか、古き史によれば、神代の昔、天照大御神、月夜見尊をして、食を大八洲なる保食神に求めしむ。保食神、則命をかしこみ、口中より種々の品物を出して、これを尊に供へた。尊は其口より出でたるを以て、穢れたりとなし、怒りて保食神を斬る。大神、尊の所爲を惡みて、相見たまはず。更に天熊人をして、往て看せしむるに、保食神すでに死して、其頂に牛馬を生じ、顛の上に粟を生じ、眼の中に稗を生じ、其他稻麥、大豆、小豆をも生せり、よつて天熊人はこれを持歸りて、大神に進めた(日本書紀)といふ、即馬はこの時に出來たとの傳へである。

その後、素盞鳴尊(即月夜見尊)の惡戯は、天斑駒を逆剝にして、大神の在す齊服殿に投入れ(古事記)、又日子遲神の出雲國より倭國に上り給ふ時、片御手を御馬の鞍にかけ、片

御足を鐙に踏入れた事も、古事記に見えて居る。

尙又信濃國佐久郡望月里、大伴神社の注進狀には、斯様なことが記されてある……
月夜見尊即青海原表治食須時龍馬爾乘給豆四方乃國中河々溪々爾至迄不殘睨巡給支其時千曲川爾至給豆川上遠指天登給……月夜見尊此處耳鎮座之時龍馬爾所置御鞍乎自手擎豆廣野之石爾懸賜支後世爾鞍掛石止號久其角馬者則駒之種止成禮利……云々

以上の記載によりて見れば、馬はすでに神代の昔に存して居た譯である。併し馬は我國の原産ではなくて、恐らく亞細亞大陸より、朝鮮を経て傳はつたものであらう。彼の保食神の神話は、金澤博士の説によると、大分朝鮮のことに關係があるらしい。或はこの話も朝鮮あたりから、傳來したのかも知れぬ。又月夜見尊も、出雲の方に居られたことがあるから、其龍馬は、恐らく朝鮮より渡來したものであらうと察せらる。

前に記した望月の里と云ふは、古くより名高き牧場であつて、史に天皇紫宸殿に出御まして、信濃の貢馬を觀覽し給ふ、とある。其貢馬は、即望月の牧場より出たものであらう。又古歌に、いまやひくらん望月の駒拾遺あきのなかばの望月駒(風雅)かげも戀しき望月の駒(續拾遺)おもかげちかき望月の駒(新千載)などある。其望月の駒も、矢張これ

である。

馬の海外より傳はつた記録の最も古るきは、應神天皇十五年、百濟王より良馬二頭を獻じ、又天武天皇十四年には、新羅より貢物として來り、降つて天文年間には、羅馬及葡萄牙の人、洋馬を九州に齎し、天正十九年又葡萄牙人、洋馬一頭を豊臣氏に獻じ、延寶年間には、徳川光圀、蘭人に托して、洋馬十二頭を輸入し、享保年間には、將軍吉宗、洋馬二十八頭を購ひ、此時ケイスルと云へる蘭人來りて、洋式の飼養法、及去勢法を傳へたと云ふことである。又文久年間には、佛帝ナポレオン三世より、駿馬二十六頭を幕府に送られた之は、初の幕府より蠶種を送つた禮としてある。明治後に至りては、政府に於ても、亦民間に於ても、度々外國種を輸入して、馬匹の改良を圖り、今日では良馬は必ず洋種又は其雜種に限ると云ふ様な次第となつて居る。

外國に於ても、馬は随分古い記録に記されてある。聖典によれば、アブラハムの子が、モーリーヤの近傍を巡回した時、馬を看出し、紀元前千九百年代、又カナンの飢饉を救はんが爲、耶哥伯は馬車を以て穀物を運搬し、又ジヨヒフの父は、埃及よりカナンに度々馬を移した。この時分、埃及には多くの馬を産し、すでに六百輛の戰車を備へ、これを牽かしむるに、數百の軍を以てしたといふことである。

紀元前千四百年頃には、希臘の民は、外國より輸入して、大に其の蕃殖を圖り、又亞刺比亞にて、馬を産するやうになつたのは、ソロモン王が、埃及より多數の馬を送りしに基くとの説である。

馬に關する著書は、ウリアム夫人が、ヘンデヨル地方に於てする捕馬に關し、其方法を記載したのが、外國に於ける最も古きもので、我國でも、天正元年、桑島新佐、衛門より、赤塚雅樂助に授與した療馬圖說寫本、寛永六年、住友勝兵衛の著はした驛驢全書板本などが、最古のものであらう。

外國でも、馬を飼養した目的は、乗用よりは、寧ろ戰車、運搬用が主なる目的で、夫より漸次乗用を主とするに至つたものらしい。農耕に使用するやうになつたのは、ずっと遅れてからのことと思はれる。我國では、前に記したが如く、月夜見尊が、龍馬に乗給ひしとか、又は日本武尊が、信濃國に入らせ給ひし時、數千の馬、山道にさかしきに働いて、進み得ざりしとか（景行紀）、其他の記事を見ても、最初より乗用を主として居た様である。（此項讀賣新聞所載山崎徳吉氏の「馬のいるく」に據る）馬の品種は、甚だ多いが、今その主要なるものを左に掲ぐる。

〔一〕 本邦在來種

我國の馬は隱岐、壹岐、對馬、沖繩等の如き島嶼に産するものと、内地に産するものとの二つがある。島嶼に産するものは、體格極めて矮小で、高さ四尺位であるが、比較的強い力を以て、忍耐力に富んで居る。内地産のものは之に比べて體格遙に大きく、四尺五寸以上五尺位に達する。この中には、青森、岩手兩縣に産する南部馬、仙臺馬、山形縣最上郡小國村附近に産する最上馬、福島縣三春の三春馬、薩摩馬等がある。東北産のものは持久力があつて、實用的であるが、九州馬は華奢で、乗用には適するが、軍馬としては大に劣つて居る。

〔一〕 亞刺比亞馬 (Arabian Horse)

高さ四尺八寸乃至五尺二寸許もあつて、額は廣く且つ扁平である。眼窠弓は突出し、眼球潤くして圓く、顔は短く、鼻孔は大きく、且つ廣く開いて居る。唇は薄く、頬は平坦で、口は小さく、耳も小さく、自由に動することが出来る。眼は秀で、鋭い。頸は長く、前胸は廣く、蹄は小さく、皮膚は薄く、且つ柔軟で、總躰の恰好がよく、步調が最も快活にして、才氣も鋭敏である。毛色は栗色が最も普通であつて、純白若くは眞白なる者は、極めて少いのである。乗用の模範たるのみならず、藝を教へ込み、曲馬用に供するのである。

〔二〕 波斯馬 (Persian Horse)

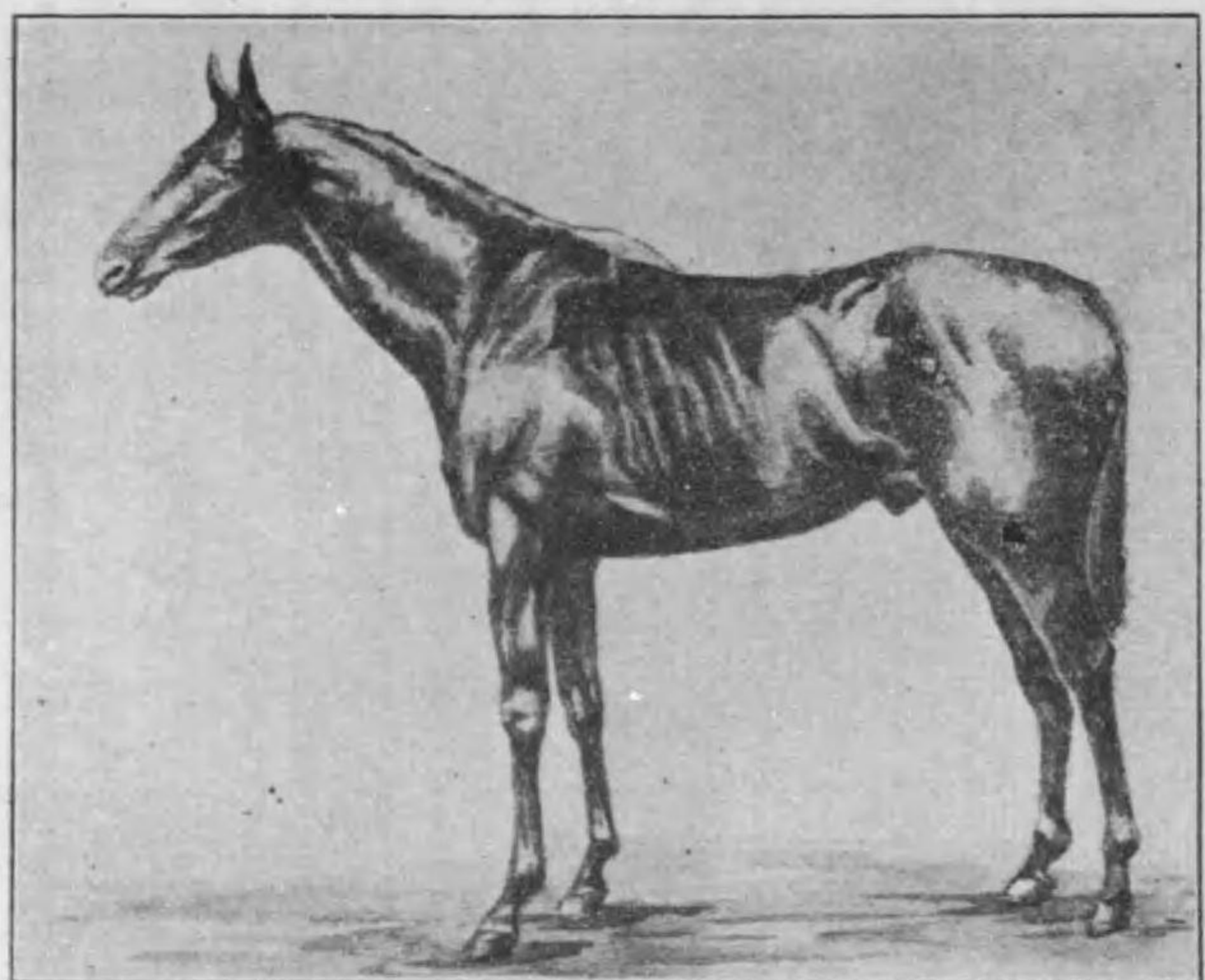
亞刺比亞馬と略ぼ同形なれども、體は肥大して優美でない。

〔四〕 バーブ馬 (Barb) 又 (Barbary Breed)

アルジェリア、マロッコ、チュニス等亞弗利加の北部に産する馬の總稱にして、亞刺比亞馬に比すれば、稍や小さく、臀稍や傾斜し、且つ發育しない。品位、能力共に亞刺比亞馬に劣るのである。

〔五〕 英國純血種

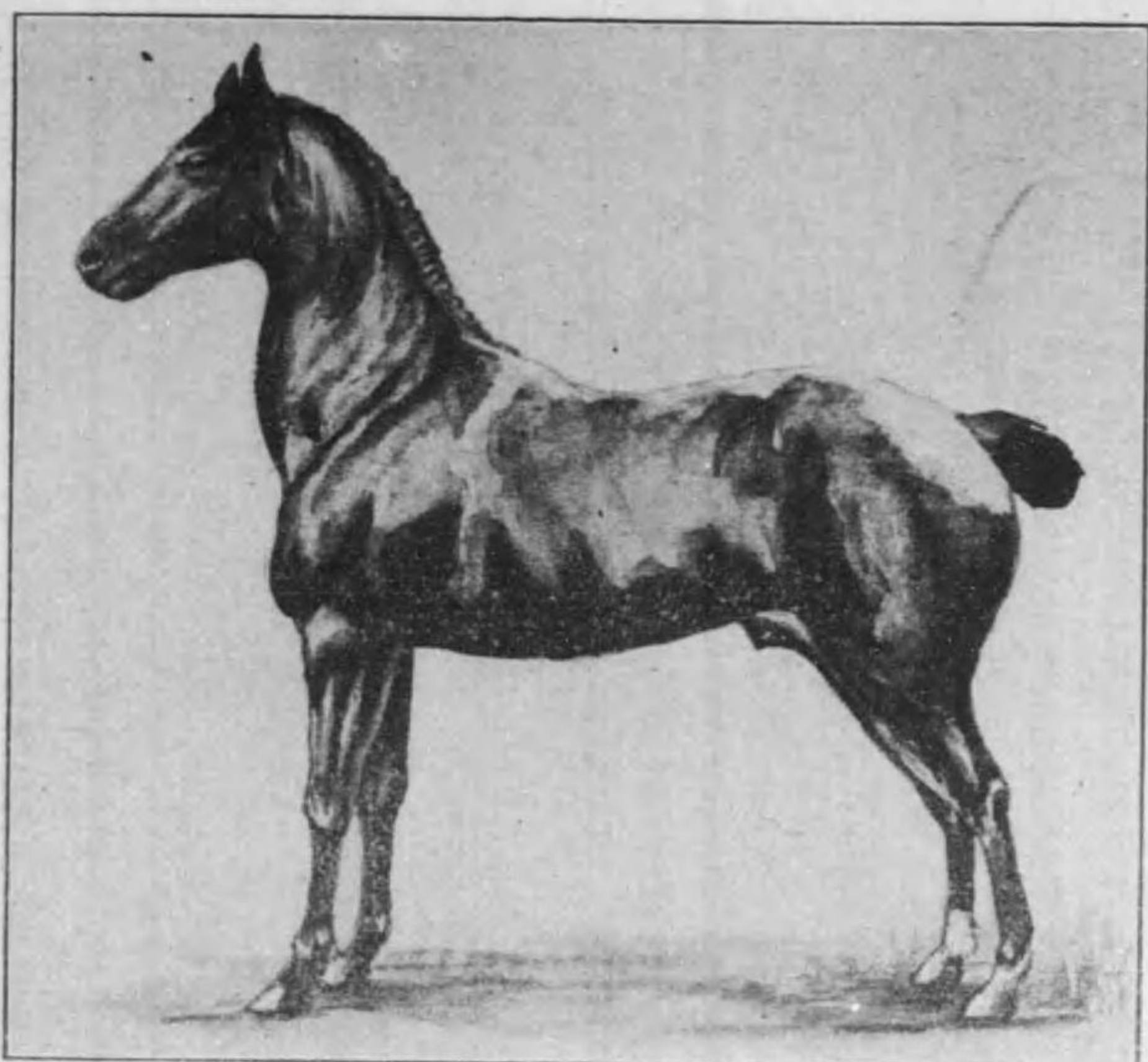
英に「サラブレッド」(Thorough Breed)といはる。亞刺比亞種を基として、英國にて改良せられたるものである。丈は五尺三寸乃至五尺八寸にして、亞刺比亞種に比すれば遙かに丈けが高い。頭は稍細長にして、口端は鋭い。皮膚は薄く、明らかに血管を現出し、鹿毛又は栗毛を多しとする。その歩足は快



圖八十八第 英國純血種

駿にして競走用馬の王と稱せられ、その遺傳力強く、よく特長を子孫に傳へるを以て
 歐米各國共に馬匹の改良には種馬として貴重せられて居る。

二〇八



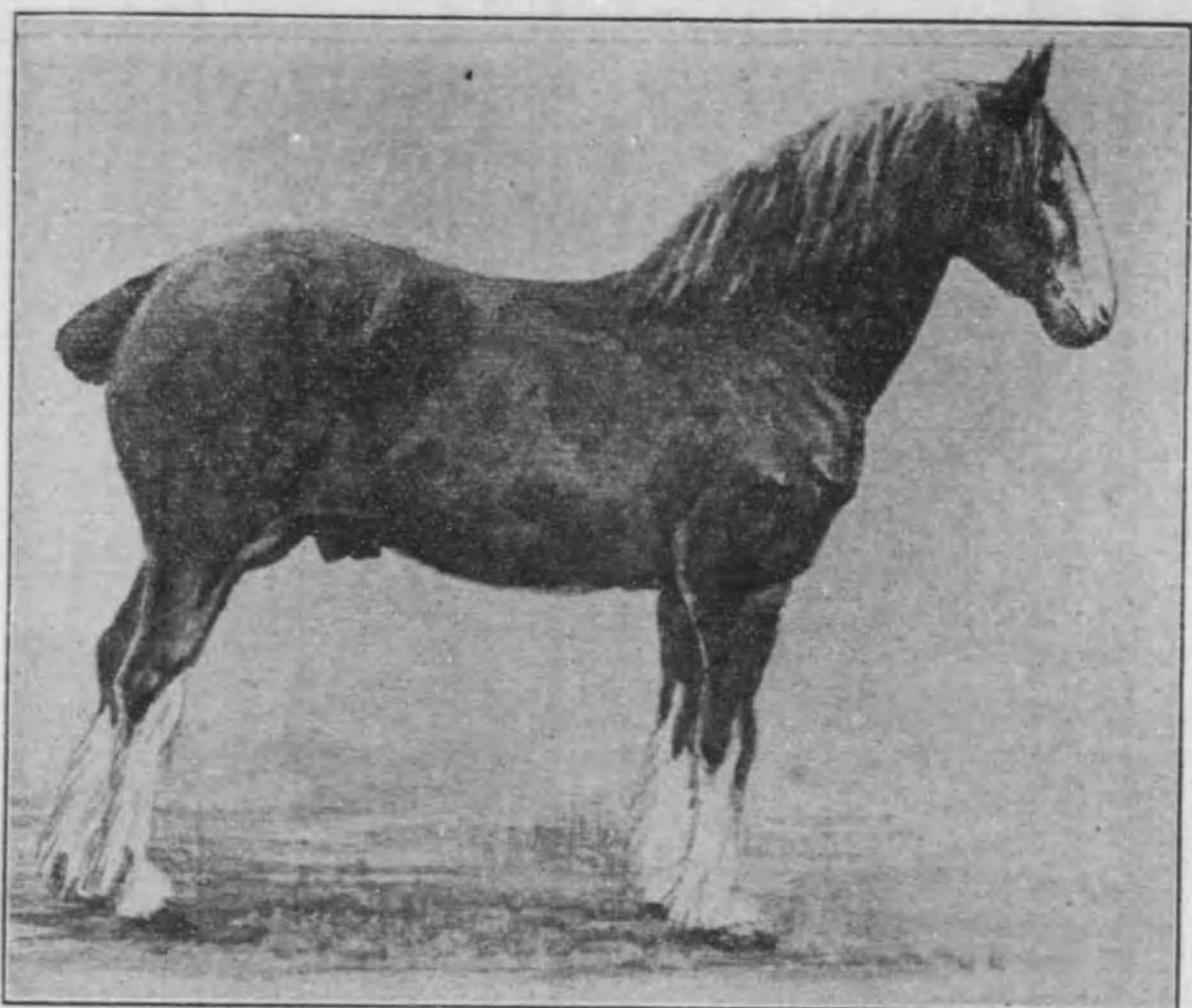
種 一 ニ ク ツ ハ 圖九十八第

〔六〕 ハックニー種 (Hackney)
 英國にて、十八世紀頃、英純血種と他の馬種との交配によりて得られたる半血種にして、相貌莊嚴にて、動作頗る輕快で、乗車用として用ゆる。殊に障害物競走に適するといはれて居る。

〔七〕 クライデスデイル種 (Clydesdale)

スコットランド南部なるクライド河の附近に産する農馬にして、體長は五尺三寸を普通とする。頭部は美しく、額は廣く、頸太く、胸は深厚であつて、四肢は短い筋力に富み、體格は立派にし

第九十圖 クライデスデイル種



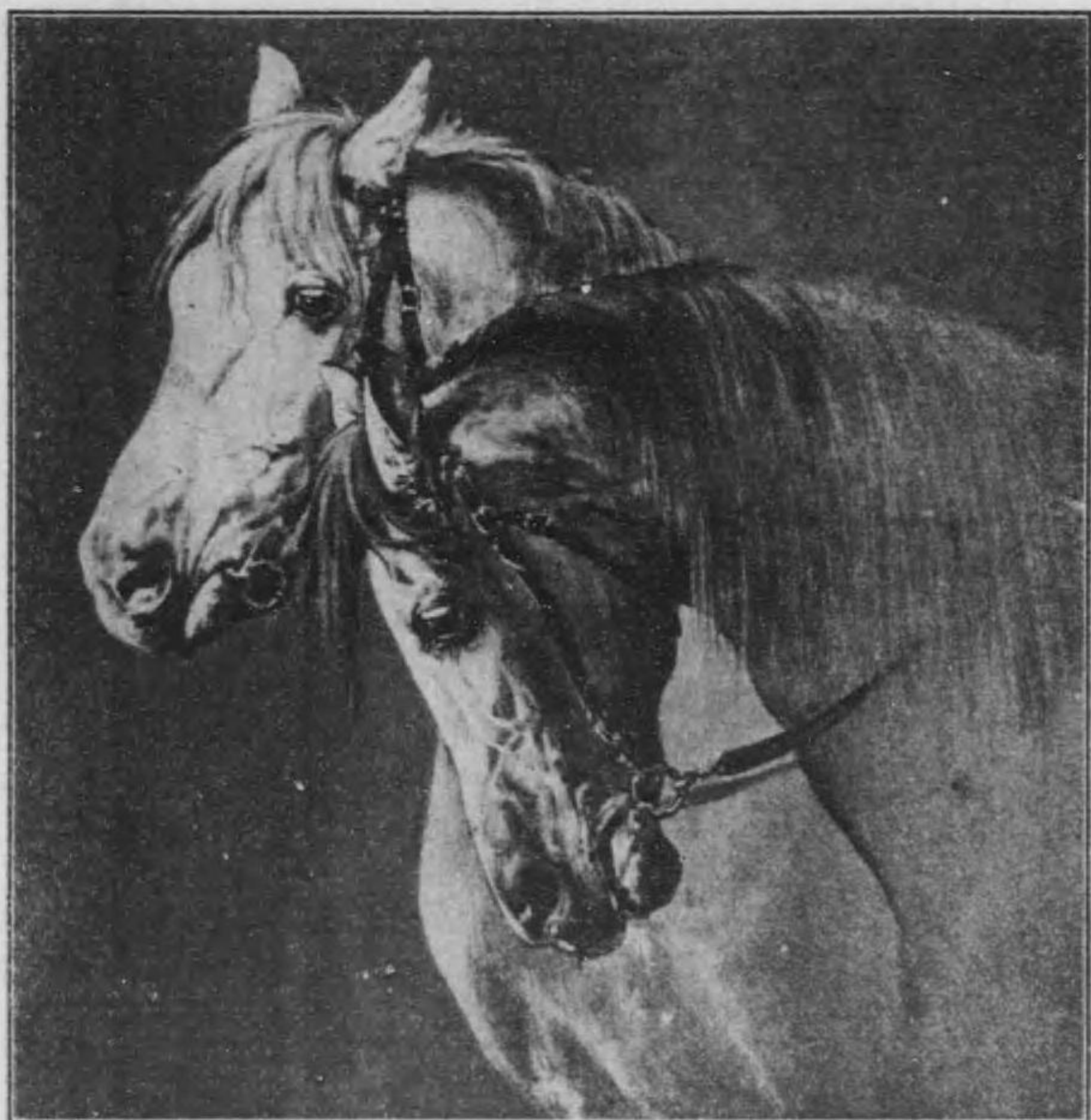
第九十一圖 亞米利加トロツター種



て行動は輕快に、且つ力強きを以て、農用馬の王と稱せられ、輓車用として賞用せられ
 内外普通動物誌

二〇九

て居る。



種ンネーケラト 圖二十九第

國英と種アラアてしにのもるす稱と王の馬軍てに逸獨
るあでのもたし其改に近最てし配に種來在ばをどな種

〔八〕 亞米利加トロ
ツター種 (American
Protter)

この混合種にして、その速力は米國トロッター種に劣ると雖も、耐久力はそれよりも

英國純血種と亞刺比亞種等の雜種にして、西曆千七百八十年以來、米國にて淘汰改良せるものである。四肢を高く舉し、速力は實に迅速であつて、騎乗用として賞用せられて居る。彼の露西亞に産する露西亞トロッター種は、該國固有の馬と亞刺比亞種と、英國の「フルブラッド (Full Blood)

優つて居る。

馬は七八歳まで、續いて肥大するものであるが、その蕃殖用に供せらるゝものは、五歳以上である。牝馬の發情期は、一年數回にして、毎回平均二日乃至四五日間持續する。懷胎日數は、平均三百三十五日乃至三百四十日にして、一産に一子を擧ぐるを普通とする。子は産れて三四時間にして自ら起ち、母馬の乳房を探りて乳を飲むが、子は三ヶ月乃至六ヶ月間、哺乳せしむるのが宜らしいといふことである。生後一ケ年間は、一日平均百三十三四夕宛體重を増加し、その成長力は頗る盛んである。而して馬の使役に堪ゆるは、十四五歳迄なれども、尙よく三十歳乃至四十五歳迄も生存するのである。

馬は軍用、乗用、耕作用、輓用等に使役せられて、重要な家畜の一つである。殊に軍事上に於ては、馬なければ軍隊が無いといふ位であるから、目下政府は軍馬の改良を第一の急務とせられ、丈けの高い、胸の濶大なる、逞しい馬を産出することを必要とせられて居る。肉は暗赤色にして脂肪に乏しく、且つ一種の臭氣を有し、美味ならざれども、廣く食用となる。馬毛はその用途廣くして、尾毛を最良とし、鬃毛はこれに次ぐ。これにて各種の刷子を製するに用ゆる。三尺以上の長さある白色の毛は、グアイオリンの弓に用ひる。黒色の毛は、重ね蒲團の下敷に用ひられ、短毛は、刷毛、兜の飾、騎兵乗馬用の手

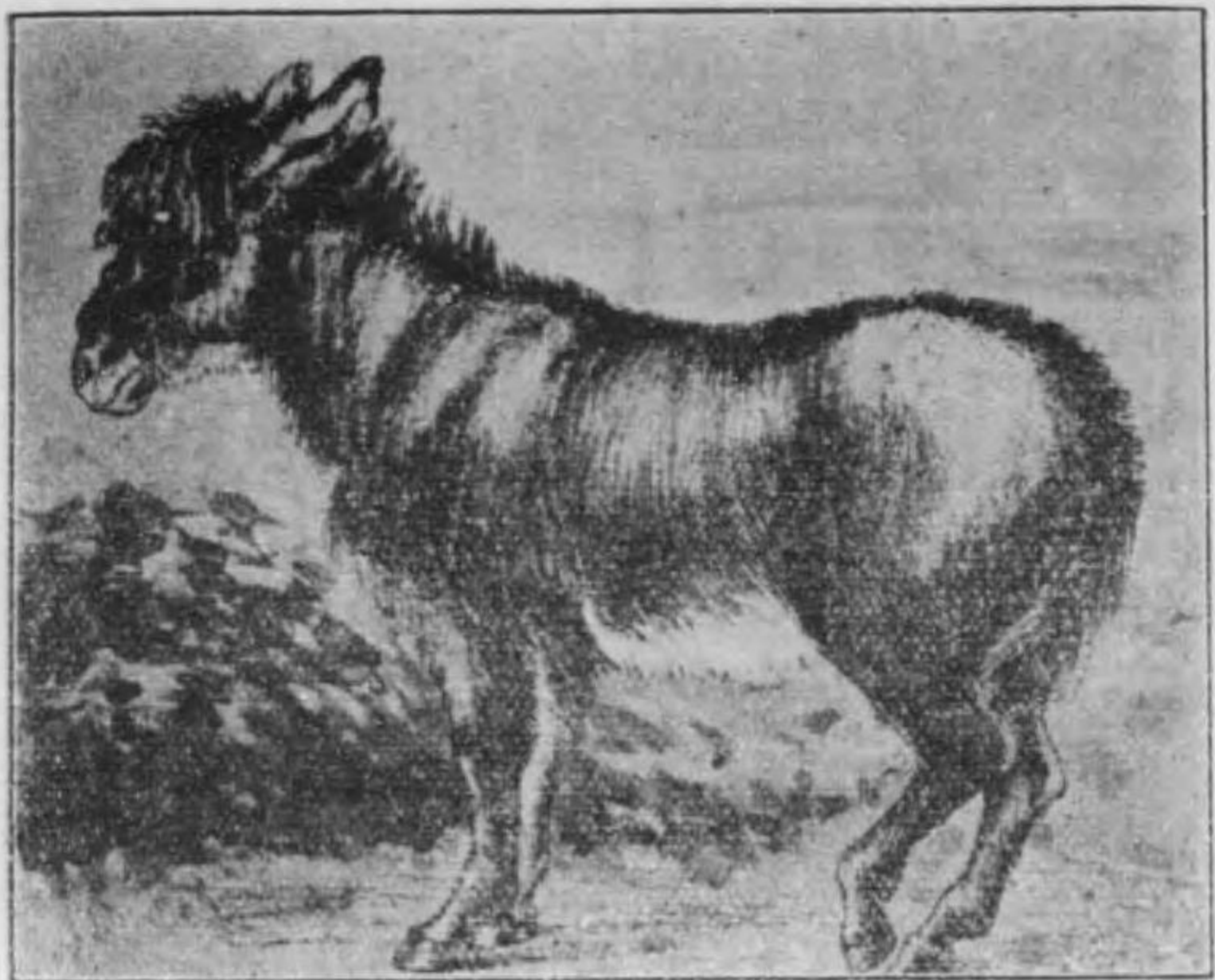
綱とする。馬毛の長きものは、織りて敷物となし、鳶色の毛は、外國にて鱈釣用の釣絲に用ひらる。また黒馬の尾毛にて綱を造り、西洋料理、其他蒲鉾製造用に供用する。骨は櫛簀、鉦鈕煙草入の筒筭等に製し、蹄もこれと同様の用途があり、また鼈甲を模造するに用ひらる。糞尿は發熱力強大なるを以て、温床を造る蒸發物の一つとして用ゐられ、又肥料として農家の賞用する所である。

(二) 驢馬

英に「アツス」(Ass)といはる。馬よりは小さく、頭は體の割合に大い。額と顛部は毛を以て被はれ、耳は長くして兎の耳の如しである。鬣は短く、且つ眞直に立ち、その毛は剛強である。胸部は稍狭く、臀は扁平にして垂下する。背は凸圓にして、その中央部には一本の黒線を有する。又尾端には長毛の總がある。而して野生の驢馬には、次の種類がある。

(一) 亞細亞驢馬 (Asiatic Wild Ass) *Equus hemionus*, Pall.

一に「コウラン」(Korlan) 又「オネーガー」(Onager) といはれ、西藏にては「キアング」(Kiang) と呼んで居る。體の高さは殆んど四尺に達し、毛色は概して帶赤灰色、若くは栗色にして、背部の中央部には、一本の黒色線を有し、體下部は白い。常に群居し、夏季には丘陵地



圖三十九第 驢馬

に來り、冬季は平原に來るのである。幼獸の毛色は、帶褐黄色にして、その棲處の砂質草原の色と一致し、狼や兀鷹類の視線を避くるに適して居る。韃靼人は之を狩りて飼養して、家養種を改良する用に供し、その毛皮を利用し、又肉を食用に供するのである。驢馬の毛皮は硬く、且つ弾力性を有するを以て、太鼓、飾、上等の靴、書籍の羊皮紙、書札、カラー、褥鞍等種々の用途に供せらる。

(二) 亞弗利加驢馬 (African Wild Ass) *Equus asinus*, L.

毛色は前種と異り、帶青灰色にして、褐赤色といふよりは、寧ろ乳脂色を帯びて居るといふ方がよい。而して脊の黒線の外に、肩に横線を有し、四肢には暗色の線を以て飾られてある。耳は前種よりも長く、鬣は黒くして且つ短い。

家養の驢馬は、この種より改良せられたるものにして、その始めて飼養せられたる

は、ニールの溪谷であるといはれて居る。

驢馬は、體の割合に重き荷物を運搬し、石塊磊礫たる山地に於ても健脚である。その性忍耐に富み、且つ粗食に堪へ、訓練し易きが故に、輓用又は乗用として飼養せらるゝのである。支那にては盛んに之を耕作用に供し、よく十歳乃至十二歳の間、使役に堪ゆるといはれて居る。乳汁はその成分人乳に近きが故に、歐洲諸國にては、育兒用として賞用せられて居る。

〔二〕 騾 (丹波氏動物學)

英に「ミューン」(Mule)といふ。驢馬の牡と馬の牝との間に産れたる雜種である。頭の形狀、耳の長さ、尾にある短毛等より、啼き聲に至るまで、驢馬に似て居る。その性質は驢馬の如く粗食に堪へ、堅忍なる動物であるのみならず、疾病に罹ることが稀れで、頸と前肢とは、非常に強力なるを以て、運搬用に用ゐらる。佛蘭西では、山砲隊の駄馬として使用せられ、又耕耘に適するといふことである。

〔四〕 馱騾くわい

英に「ヒンニイ」(Hinny)といはる。馬の牡と、驢馬の牝との間に産れたる雜種である。

〔五〕 斑驢しまま 又うしうま

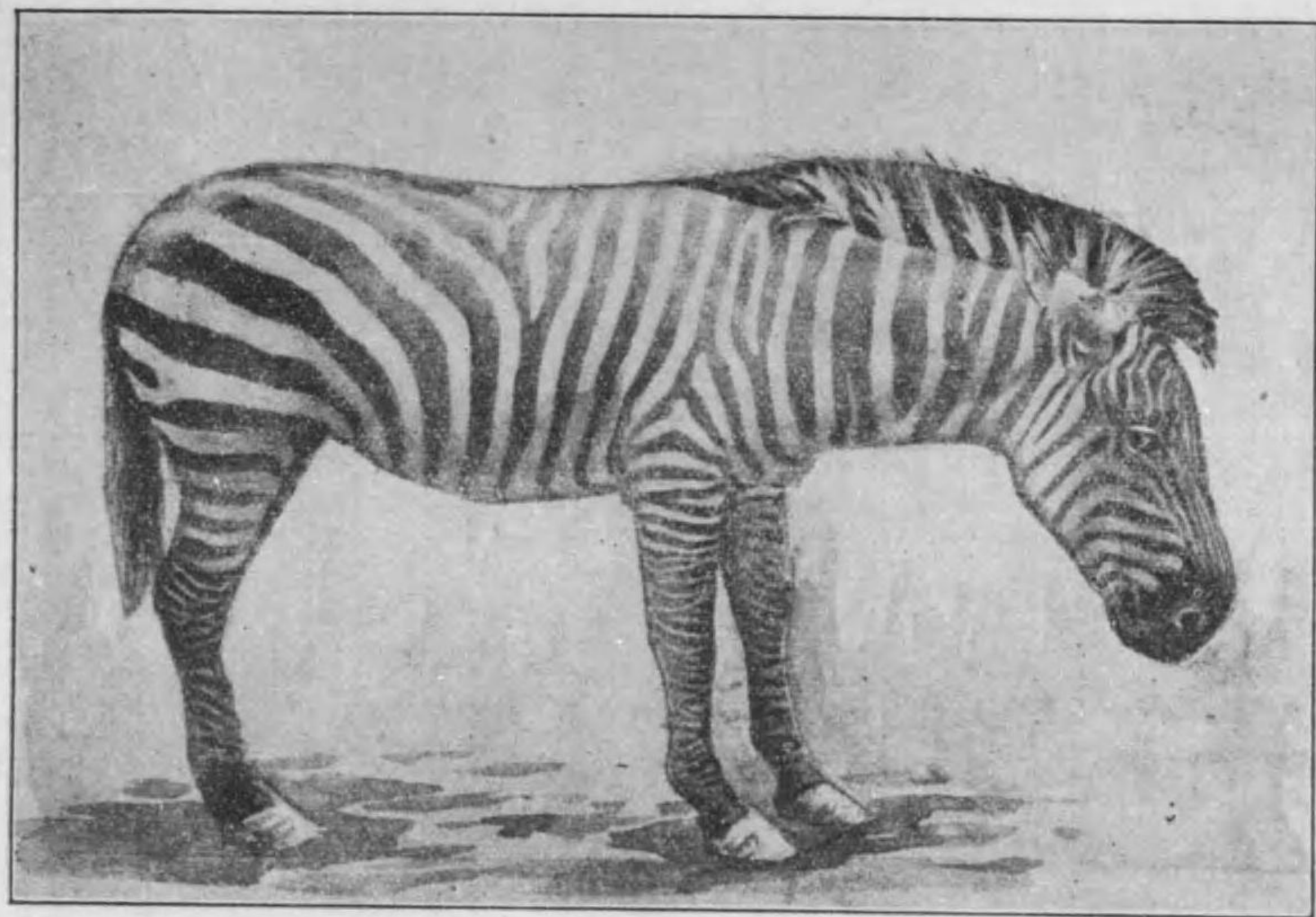
斑驢は、亞弗利加大陸特有の馬で、頭と耳とが、體の割合に大きく、鬣が直立することや、尾の先端に長毛を有すること、及び蹄の性質は、馬よりは驢馬に近いのである。視力、嗅覺、聽力は非常に發達し、些少の音響にも驚怖し、容易に全群を解散せしむるのである。獅子の如き食肉獸に攻撃せらるゝ時でも、全群は一致團結して巧に逃避し、獅子をして好餌を逸した歎を起さしむるのである。斑驢には次の四種がある。

〔一〕 眞正斑驢 (True Zebra) 又山斑驢 (Mountain Zebra) *Equus zebra, L.*

以前は、南亞弗利加のケープ殖民地の山地に、普通に見られてあつたが、今はその東方部の地方に限りて、稀れに見らるゝのである。常に山地に棲息して、平地に降ることがない。野生の驢馬よりも大きく、肩の高さは四尺以上もある。毛色は美麗にして、帶黄白色の地に、體の下面と腿の内側を除く外、頭、胴、四肢及び尾に至るまで、幅廣き黒色、及び帶黒褐色の斑條が規則正しく排列する。而して體側の斑條は、脊の中央線に亘れるものと相合するのである。斯く毛皮が美麗なるを、その狩獵が如何にも勇壯であることを以て、盛んに狩られ、爲めに近來は著しくその數を減じたのである。

〔二〕 グレビー氏斑驢 (Grey's zebra) *Equus grevyi*

東部亞弗利加のビクトリアヌヤンザ地方に産する最大最美の斑驢である。黒色の



圖四十九第 斑 馬 一 種

斑條は幅狭く且つその数が多い。又鬃より尾の基部に到るまで脊梁に沿ふて、斑條なき白色の一帶がある。常に廣濶なる平原に群居する。その肉は美味なるを以て、土人に狩られ、又獅子に食はるゝことが夥しいのである。

(三) バーチエル氏斑馬 (Burchell's zebra) *Equus burchelli*, Fisch.

英に又「ダウウ」(Dauw) 又「ビーツシ」(Pests) ともいはる。體の形状と大きとは前二種に似たれども、色彩は「クアツガ」(Quagga) に似て居る。この種は、廣く亞弗利加の東部、中部及び南部に分布し、常に五十疋以上より成れる群をなして、原野に棲む。吻端は黒く、體の上部は褐色なれども、體

下部は白色にして、暗色の斑條の排列は、稍不規則で、それは體の前方に於ては、横斷すれども、體の後部にありては、斜となり、又肢の内側には、斑條を有せざるを常とする。肉は美味にして、土人及び獅子に因て狩らるゝことが多い。

幼獸はよく人に馴れる。時事新報の報道する所に據れば、近來米國農務省は、此種と馬或は驢馬との雜種を作り、之を牽引の用に供することを創意し、既に三年間に亘りて、實驗を行ひたる結果、今や六頭の新動物を得るに至つた。之を名けて「ジブロイド」といふ。中二頭は二歳にして、體重六百封度を量り、尙大に發育の餘地あれば、成長の曉には、一千封度にも達するなるべく、試みに車を付けて之を牽かしむるに、速力もあれば、牽引力もありて、頗る好成績を示したれば、今度は實用に適するや否やを試驗することゝなれりと聞く。此新動物は、馬又は驢馬よりも、食量少く、且つ如何なるものをも食はんとする者の如く、又寒暑には一向平氣にして、三伏の炎天にも樹蔭を求むることがない。米國農務省の使用せる種斑馬は、アビシニア王より、前大統領ルーズヴェルト氏に贈れるものにして、體重八百封度を算すといふ。

(四) クアツガ (Quagga) *Equus quagga*, Lin.

以上三種よりも小さく、形貌は馬によく似て居る。頭は小さく、耳は短い。頭と頸と肩

この毛色は、黒に近い所の暗褐色であつて、脊と横腹とは輝ける褐色である。肢の上部と尾には、白色の斑條を有し、體下は白い。又尾には長毛の總を有する。以前は南亞弗利加に、多數に棲息せしが、その毛皮と肉とを得んが爲めに、絶へず土人に狩られて、今は絶滅したのである。

〔一〕 犀科 (Rhinocerotidae)

犀は、英に「ライノセロス」(Rhinoceros) といはる。これは「有角鼻」の義である。頭は頗る大にして、稍三角形を呈し、後頭部は兜状をなして隆起する。眼は小さく、視力は鈍^{トマ}けれど、耳は中庸大にして卵形をなし、且つ自由に動き、聽力及び嗅覺は、共に極めて鋭敏である。頭上には、一本若くは二本の角を有する。角は頭骨と全く關係なくして、唯單に皮膚に因つて固着するに過ぎざるを以て、小刀を以つて、頭部より分離することが出来る。而して角は、真皮内に存在せる乳頭突起の叢より生じたるものにして、各乳頭突起に出來たる角質纖維が、共に膠結したものである。されば毛塊の觀を呈する。

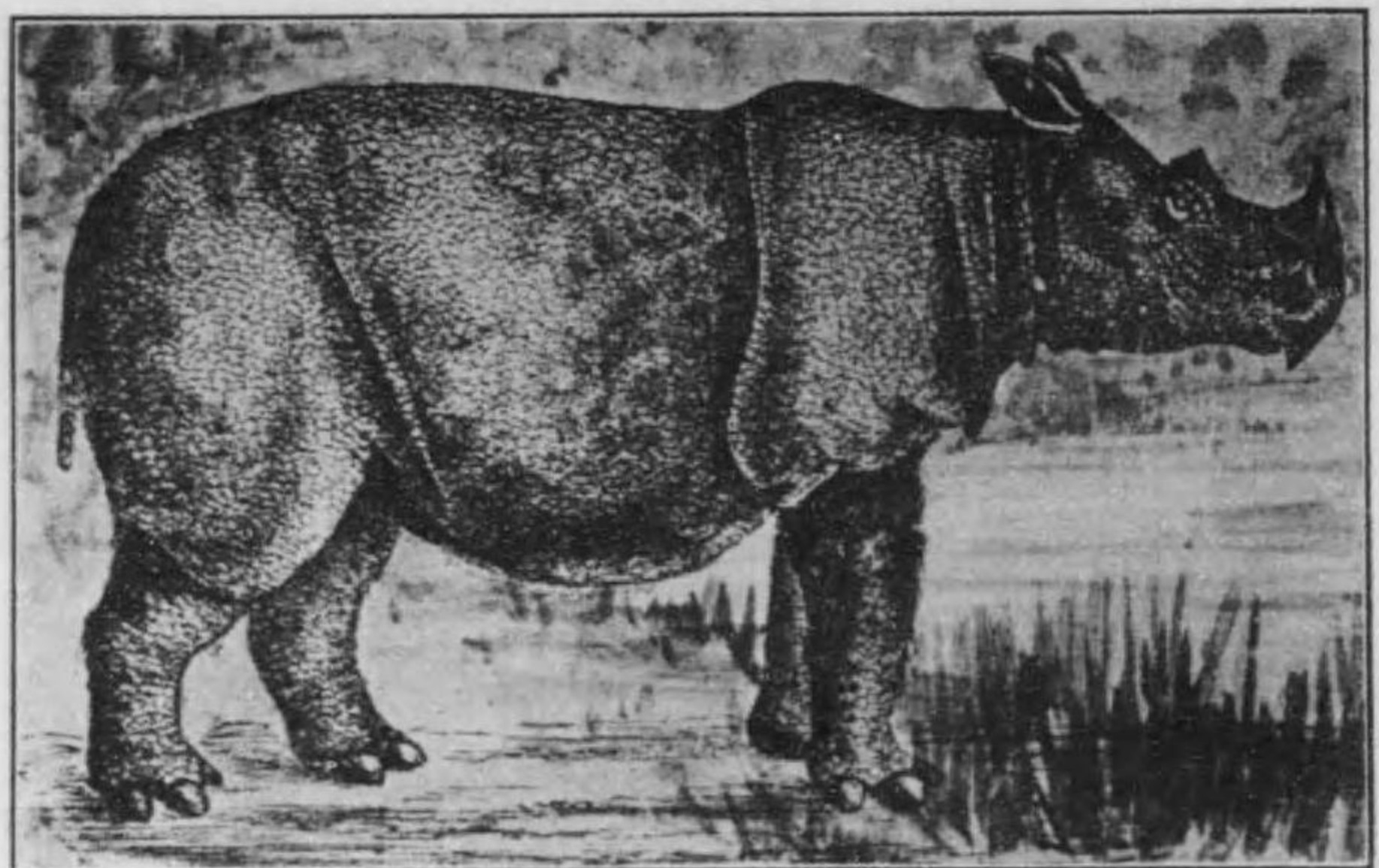
體軀は肥大にして重い。頸は短く、上唇は著るしく伸長して、通例之を用ひて、地上より食物の小片を拾ひ上げるのである。齒式は $I. 1. C. 0. P. 4. M. 3 \parallel 3. 2$ で、犬齒はない。門齒は退化し、時としては老齡に於て脱落する。下顎にある門齒は、時には大きく發達し、殆んど水平の位置を取り、且つ牙状となりて口外へ突出することがある。

皮膚は粗糙にして厚く、毛は薄いのである。而して

亞細亞産のものでは、頬、頸、肩、腰等の諸部には、著しき皺襞をなして排列すれども、亞弗利加産のものでは、その皺襞は極めて狭淺にして、且つ永久的のものでないといはれて居る。四肢は中庸大にして、強健である。前後共に、完全に發育せる三指趾^トを有し、各趾には幅廣き圓い蹄を有する。尾は短く、且つ細いのである。

〔一〕 印度犀 (Indian Rhinoceros)
Rhinoceros indicus, Cuv.

ジャバ、スマトラ、ボルネオ、マレー半島、バルマ、印度のカルカッタ、東部ベンガルに産する。スマトラ産のものは二角を有すれども、その他は一角を有する。體長は一丈余で、高さは二尺位あれども、稀に高さ五尺



第 五 十 九 圖 印 度 犀

以上に達するものがある。體は稍黒色にして、幾分か淡紫色を帯びて居る。夜間出で、

河沼湖畔の低濕地に往來し、皮膚下に寄生する昆蟲を除去せんが爲めに、好んで泥濘地に轉がり、泥や水を以て、皮膚に塗抹する。角は犀の武器にして、これを以て、象の攻撃を防ぐのである。角は磨きて杯コップを造り、又粉末として薬用に供せらるゝのである。

(一) 亞弗利加犀 (African Rhinoceros) Rhinoceros Africanus, Camp.



犀加利弗亞 圖六十九第

皮膚の皺襞は、印度犀より狭く、且つ淺い。色は頭の兩側及び鼻端に、淡紫色を帯べる外、他は黃褐色である。角は二本を有し、その前方にあるものは、長くして鼻骨の上に位すれども、後方のものは、遙に短くして、前額上に位するのである。常に林中にありて、樹枝又は灌木を食する。肉は土人の好んで食する所である。毛皮は殖民地の人々に因て、鞆に製造せらるゝのである。印度犀を區別して若干の種に分つ如くに、亞弗利加犀をば、若干の種に區別する學者もある。即ち左の如しである。

(一) 黑犀 (Black Rhinoceros) 又ボリーヌ (Boele) Rhinoceros bicornis

體は最大のものにあらずと雖も、その性質は兇暴にして、且つ最も危険である。東部及び南部亞弗利加よりケープ殖民地の界に至るまでに産する。前方にある角は、稍後方に曲り、その長さは一尺六七寸乃至二尺五寸もあるが、後方にある角は、圓錐形をなし、長さは前者の半分に過ぎない。この獸が負傷するときは、その體軀が不器用の造りであるにも拘はらず、電光の射るが如き速力を以て突進し來り、爲めに極めて危険である。

(二) ケイトロア (Kaitloa) Rhinoceros kaitloa
(三) パーチエル氏犀 (Burchell's Rhinoceros) 又「モチユート」(Mochuco) 又白犀 (White Rhinoceros) Rhinoceros simus

犀科の中で、最大のものであつて、肩に於ける高さは、六尺又は七尺であつて、體長は一丈六尺乃至一丈七尺もある。體色は前種よりも、稍青白味を帯べる褐色であるが故に、又白犀の名がある。二角の中で、前方にあるものは、非常に長くなる。南ケンシントン

博物館にある角の標本は、四尺七寸位もある。又ある狩獵者は、これよりも五寸許もより長いものを有する。

(二) 貘科 (Tapiridae)

貘は、體軀中庸大にして、重々しく造られ、外觀は豚に似て居る。眼は小さく、少しく前に傾き、上唇は下唇よりも長く突出し、且つ吻状をなし、屈伸自在である。頸は太く短く、體には短毛を生じ、尾は甚だ短く、耳も亦短く直立して、その先端は圓い。前肢には他の奇蹄類と異りて、四指を有すれども、その中一指は地を踏まない。後肢には三趾を有し、前後兩肢共、指趾には皆蹄がある。常に樹木の芽、果實等を食し、齒式は $i. 3. c. 1. p. 3. m. 3 = 42$ である。而して小白齒と犬齒との間には、大なる間隙を有する。本科のものは一種東印度に産するものを除き、他は總べて中央亞米利加及び南亞米利加に産する。

(一) 亞米利加貘 (American Tapir) (Tapirus Americanus, L.)

南亞米利加のブラグアイ、ブラジル、ガイアナの深林に夥しく産し、常に同一の通路を徘徊する。體の全長は七尺乃至八尺位にして、肩の高さは殆んど四尺位もある。毛色は一様に暗褐色にして、頭の下面、咽喉部、耳の先端は白い。幼獸は濃厚なる帶褐色の地に、黄色を帯びたる鹿子色の斑紋と、斑條とを以て、美しく斑になつて居る。その性質

は臆病にして、無害の獸であるが、一たび危難に遭遇するときは、その有力なる齒で、烈しく防禦するのである。よく水に入るを好み、常に大河の沿岸に棲息し、永い間水中に潜伏し、又水底を歩くことが出来るといはれて居る。皮は諸種の用に供せられ、肉は食ふべしといはる。

(二) 印度貘 (Indian

Tapir) 又マライ貘

(Malayan Tapir)

Tapirus indicus, Desm.

印度、スマトラ、ボルネオ、マラカ

島の深林に産する。その習性は前種と同じけれども、體は前種より大きく、肩に於ける高さは、四尺以上を越ゆるのである。眼は圓く、虹



第 七 十 九 圖 亞 米 利 加 貘
(From Popular Science)



第 八 十 九 圖 印 度 貘 其 子
(From Popular Science)

彩は紫黒色であつて蹄は黒く、吻は著しく長い。頭、頸、肩、四肢、尾は暗黒色で、耳の先端、脊、腹部の兩側、腰部、後肢は灰白色にして、恰も白色の馬被を纏へるが如しである。幼獸は

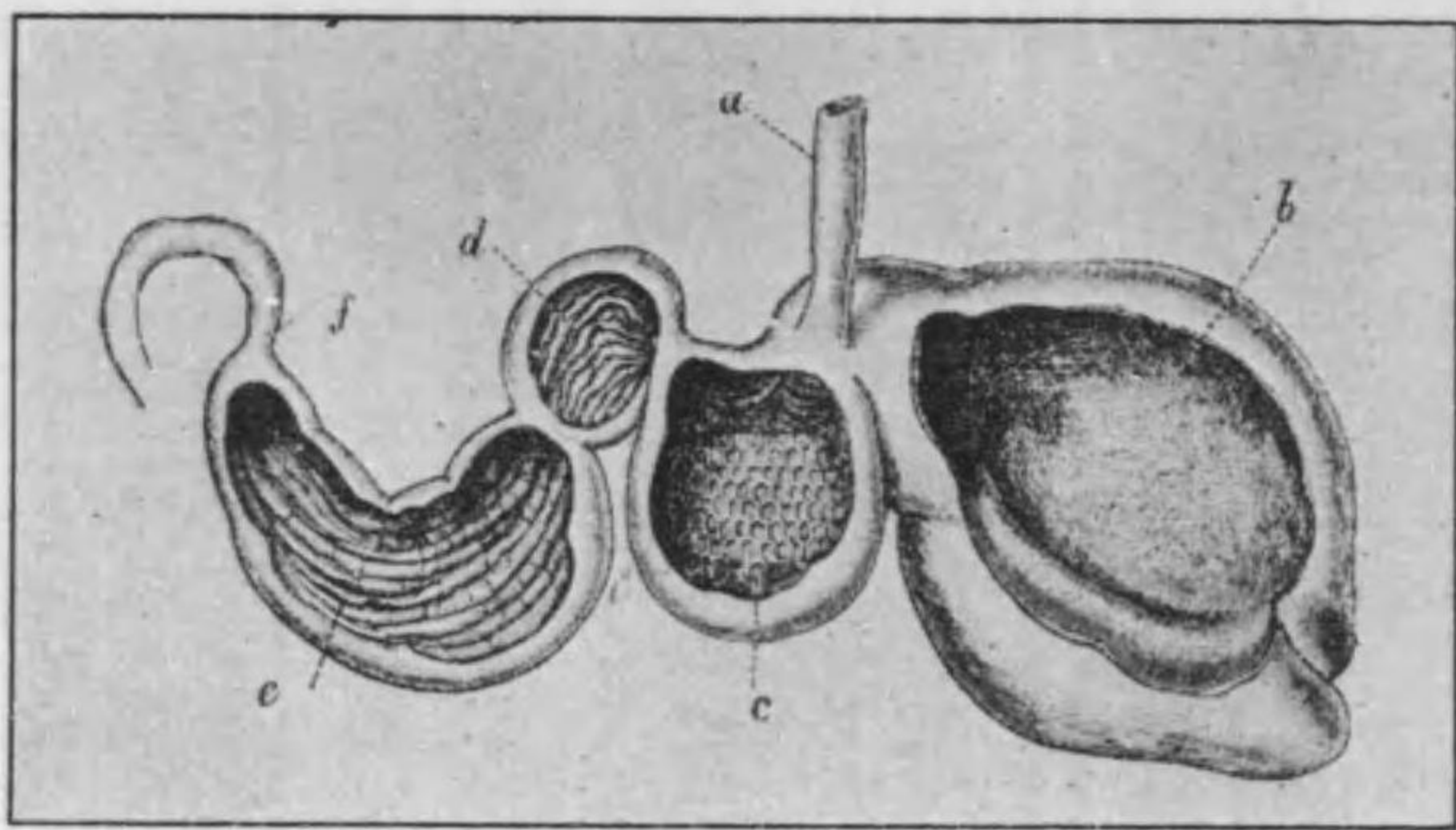
全體が帶褐黒色で、頸より尾に近くまでの間に、數個の黄色の紋條と、その前方には、恰も紋條の先端が分離して成つたかと思はるゝ同色の斑紋がある。スマトラの土人はその肉も食料に供する。

第二亞目 偶蹄類 (Artiodactyla)

第一類 反芻類 (Ruminantia)

齒式は不完全にして、駱駝を除き上顎には、門齒と犬齒となく、門齒は下顎の各半に、三枚宛ある。而して下顎の犬齒は、概ね門齒と、その形狀を同うするを以て、下顎の各側には、四枚の門齒を有するやうに見へる。又犬齒と臼齒との間には、廣き空隙がある。臼齒は、食物が草質なるを以て、その咀嚼面は廣く、四列の縦に亘れる、凸隆線がある。下顎は、上顎よりは狭く、爲めに側方より側方によく動くのである。

反芻類は、主に植物質を食する。而してそれは滋養分を含有すること少きを以て、勢ひ多量に之を攝取せざるを得ない。故に一時に澤山の草をば、細かく丁寧に咀嚼する時は、それが爲めに、多くの時間を要し、敵をして己れが間隙に乘せしむる機會が多くなる憂ひがある。故に可成短時間に於て、然かも多量の草を嚙下し、且つ又消化作用を



胃の類芻反 圖九十九第
(腸指二十)(胃臑)e(胃瓣重)d(胃巢蜂)e(胃瘤)b(道食)a
(After Flower and Lydekker)

ば、完全に營まんには、勢ひ食物の獲得と、咀嚼作用との間に、區別を付けることが、その生存上に利益がある。そこで、胃の構造は、よくこの目的に協ひ、複雑なる四囊より成り、且つ反芻するのである。動物は場所より場所に移動せる際に、自由な食物を攝取し、休息するときに、反芻してよく咀嚼するのである。彼の牧場などに於て、牛が平然として地上に横臥し、目を閉ぢながら、頸をば左右に動かし居るは、全く食物をば反芻して、之を咀嚼せるものである。

反芻類の胃は、通例は四囊より成つて居る。第一囊は、大く、食道の左側に附着し、その内面には、厚き膜を有し、これには無數の扁平にして、殆んど角質なる突起を生じ、横に收縮せる爲めに、内面には無數の瘤を有するを以て、之を瘤胃 (Pouch 又 Rumen)

と稱する。食物がこの胃に残る間は、寧ろ乾燥せる有様になつて居るが、食物を圍繞せ

る液分は之を柔軟にする作用がある。食道の末端の両側には、瘤胃の入口から突出する所の筋肉の隆起があつて、この両側の二つで、第二囊に適する所の縦溝を形成するを以て、液體を呑むときは、瘤胃の入口が閉ちて、水は直ちに第二囊に入るのである。さて先きに瘤胃に入りたる食物は、瘤胃の回旋的運動に因りて、一度に第二囊に移るのである。第二囊は第一囊の右側に位する小なる圓囊にして、その内面は網状をなし、恰も蜂の巢に似たるを以て、之を蜂巢胃 (Reticulum) と稱する。こゝにて、食物はこの囊に注がれたる水液に因つて、柔軟且つ濕潤となり、また形狀は圓塊となりて、食道に亘れる筋肉の作用にて、食道を逆行して口に吐出せらる。こゝに於て、細かく咀嚼せられて、粥の如く、半流動躰となりたる食物は、再び嚥下せられて、食道の縦溝を通過する所が、第三囊の孔は既に述べたる、二つの隆起を形成せる所の、筋肉帯によりて、前方に持ち來たされ、これら筋肉帯が收縮するとき、食物が前の二囊の何れにも、落つることがない。第三囊は、その内面には、大小不等の、無數の葉状をなせる皺襞が、相互に平行して存在し、食物がこの胃に入る時は、それらの皺の間を通過するのである。之を重瓣胃 (Plicatrum) と稱する。これより食物は第三囊と接近せる第四囊に移るのである。其内面には、無數に縦の皺あるが、これを皺胃 (Rennet Stomach 又 Abomasum) と稱する。こゝに於て、

食物は胃液を受けて、眞に消化せられて小腸に移る。尤もジャバ産の麝香鹿駱駝(ジャバ)にては、重瓣胃は特に分明でない。元來反芻類の反芻作用は、動物が固形の食物を攝取する頃より、行はるゝものであつて、母乳によりて養はるゝ小牛等にては、第一第二胃は、尙未だ充分に發達せざるを以つて、飲みたる母乳は、食道より直ちに第四囊に運ばるゝのである。

元來動物の食する食物が、動物質なるか、若くは植物質なるかは、腸管の長さに影響を與ふるものであつて、猫の腸は體長の三四倍なるに、熊の腸は、體長の十二倍となり、象では、腸は六丈許に達し、牛では腸は十五丈にも及ぶ程である。

〔一〕 牛科 (Bovidae)

概ね大形なる獸にして、頭蓋部は廣く、顔面は稍短い、角は前頭骨より突起せる骨心より成り、その上を被へる中空なる角質鞘を有するが故に、鹿の如き角を有するものと區別して、洞角類 (Cavicornia) と稱する。また骨の断面は、圓形若くは扁平である。齒式は $I. \frac{4}{2} C. \frac{0}{0} P. \frac{3}{3} M. \frac{3}{3} = 32$ である。第三第四指趾のみ地に着き、他指趾は退縮する。

〔一〕 牛 (Bos taurus, L.)

牛は英に「コンモン・オックス」(Common Ox) と稱する。體軀は肥大にして重々しく、頭部

には二本の圓柱狀にして少しく彎曲する角を有する。額は平潤にして、鼻端は扁平で且つ裸出し、顎は短い。胸下には大なる垂肉を有し、牝の腹部の後方には、隆起部ありて、二對の乳房は後肢の間に位する。尾は細長にして、唯末端にのみ總狀の毛を有する。四肢は短けれども、強健である。中央の二趾、即ち中趾と薬趾とは、地を踏めども、第二趾と第五趾とは、小さく且つ後方に懸る。之を懸蹄と稱する。

角は一たび脱落すれば、最早再生することがない。而して牝牛にては、角に存する輪數に因りて、その年齢を検することが出来る。通例三歳にして始めて妊娠し、その際第一輪を生じ、爾後毎年一回受胎するものとして、その輪數を加算する。されば年々妊娠せざるものは、自然に輪數は少なければ、輪と輪との間隔が長いから、容易に區別することが出来る。

上顎には門齒無けれども、この部分の皮膚は、堅硬にして、咀嚼の際、恰も粗板まがらの如き作用をなすのである。而して下顎にある合計八枚の門齒は、上顎に對して恰も庖刀の如く作用する。牛はかく上顎には門齒を有せざるを以て、馬の如く、轡を銜ませることが出来ないで、鼻に繩を通して牽引するのである。牛は生れたる當時は、門齒は二枚、臼齒は兩顎に六個宛を生ずるを以て、乳齒の合計は十四枚である。而してその後二週間

にして、門齒は更らに其の數二枚を増し、一ヶ月にして、門齒は合計八枚となり、他に臼齒十二枚を合して、勘定すれば、二十枚の乳齒を有することとなる。既にして六ヶ月乃至八ヶ月を経れば、中央にある第一對の門齒は、磨滅し始め、これより他の門齒も、漸々磨滅し終るのである。而して一年半乃至二ヶ年にして、中央の第一對の門齒は、永久門齒と更脱し去り、遂に三ヶ年乃至四ヶ年にして、八枚の門齒は、全部永久門齒となり終るのである。又この時期に於ては、以前ありし前臼齒は、全く永久臼齒と更脱し去り、更らに大白齒十二枚の發生を完結するを以て、永久齒の合計は、牛科に述べたるが如く、門齒八、小白齒及び大白齒が、共に十二枚で、合計三十二枚となる勘定である。されば齒の發育の状態に因りて、牛の年齢を判知することが出来る。

牛の發育は、生れてより一二歳の頃が、最も盛んにして、牝牛は往々一歳にして受胎し得るものがある。然し通常は一歳半乃至二歳にあらざれば、蕃殖用を使用することは出来ない。妊娠期間は、平均二百八十五日にして、一産一子であるのが常である。

牛に關する歴史を述べんに、本邦に於て、始めて牛といふことの、書物に見へたるは、神代紀の保食神うけもちの殺されたる段に、その神の頂が化して牛馬と爲るとあるが、そもその濫觴である。然し勿論本邦に原産なくして、外國より傳來したものである。

豊葦原中國有保食神嚮山則毛羸毛柔自口出(中略)夫品物悉備貯之百机饗月夜見命(中略)此時保食神實已死矣唯有其神頂化為牛馬云々

また牛を外國より始めて輸入したるは、欽明天皇の御宇に、百濟國より購入したものである。牛乳は、孝德天皇の御宇に、既に之を飲用することが始まりて、京都の左近の馬場へ、牛乳院を設けて、牛乳を搾らしめて、供御の御料に充てさせられたのである。その後一般庶民も、追々飲用したのである。又本邦に於ける西洋種牛購入の始めは、明治二年十二月に、大藏省通商司の管する牧牛馬掛に於て、洋種の牛豚及び製乳器械等を、横濱在留英國人より購入したのであつて、その時買入れたる牛の頭数は、十五頭であつたといふことである。

牛の品種は頗る多く、利用の方面より別つときは、勞役用、肉用、搾乳用等と別つべく、また産地の地勢に基いて、山岳種、平原種、中間種即ち溪谷種の三つとする。或は天産の國土に従ひ、日本種、英國種、獨逸種、佛蘭西種、瑞西等に大別するし、又角の長短に従ひ、長角種、中角種、短角種等に區別するのである。

(一) 本邦種

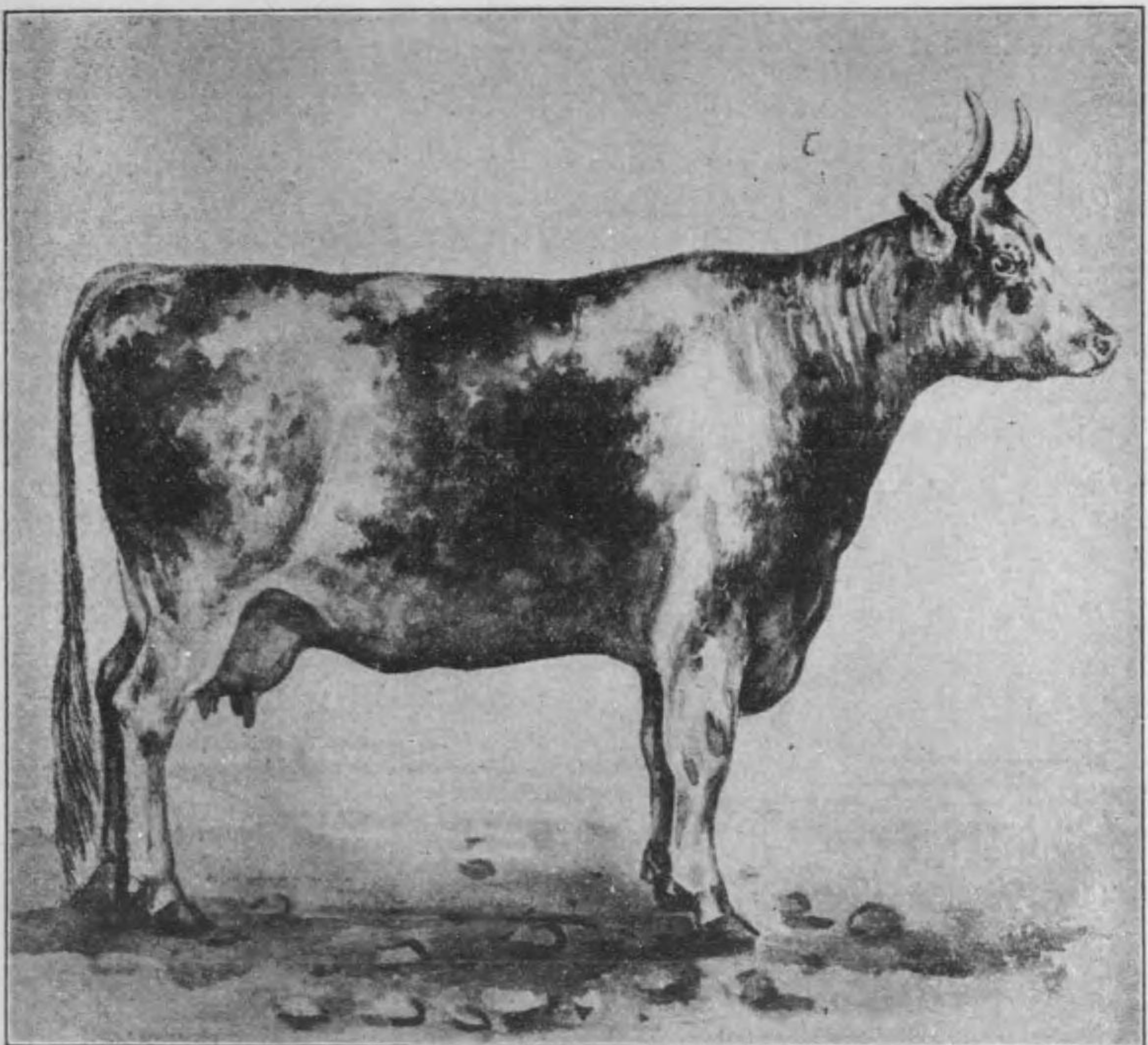
一般に體軀矮小にして、頭部は比較的に大きく、毛質は粗剛である。また乳用として乳量少く、耕耘運搬用としても、力量足らず、體軀の矮小なるを、以て、肉量も少い。然し但馬、丹波、丹後等に産する但馬牛なるものは、世に神戸牛と稱へられ、その肉の美味なることは内外に喧傳せられて居る。

(二) 短角種 (Shorthorn)

角は白若くは褐色にして、甚だ短小である。肉用として、成熟は速である。又よく其移植せらるゝ土地の風土に適應して蕃殖し、且つ遺傳力強きを以て、他の劣等なる牛を改良するに適する。然し改良過度の結果として、軀質弱く、肺結核に罹り易いのが缺點である。毛色は赤と白との斑、又は赤色等にして、軀軀は長方形をなして太く、肢は短い。この種は英國の産にして、コーリング兄弟の畜産家が、多年の苦心によりて作り出したものである。

(三) デボン種 (Devon)

英國デボンシャイヤの産であつて、山岳種に屬する。毛色は濃赤色にして、時々乳房の前方に白斑を有することがある。體軀は中等大にして、四肢の強健なること、他に比すべきものがない。農用として耕耘、運搬用に貴重せらるゝのみならず、飼育も簡易



種ヤイヤシアエ 圖百第

にして、比較的粗食に耐へ、且つ早熟早肥にして、肉量も多く、味も亦極めて佳くして、食肉牛として最良なるものである。

〔四〕 エアシャイヤ種 (Ayrshire)

スコットランドのエアシャア地方の原産にして、毛色は褐色又は赤褐色にして、白赤又は赤白の斑である。體格は楔形にして、乳牛の模範的形狀をする。角は直立して、先端上方に彎曲し、耳殻は大きい。體重

は百二十貫乃至百三十貫もある。泌乳量は體重に比して多く、且つ濃厚であつて、乾酪の製造に適する。

〔五〕 ホルンスタイン種 (Hornstein)

脂肪の含量は百分の三に下るも、乳量甚大なるを以て、搾乳用として最優等の品種であつて、一日十斗三升許りの乳汁を産すといふ。和蘭の原産である。體毛は、白と黒との斑を通常とすれども、また赤色が現はるゝものがある。後體は前體に比して、發育優り、楔形をなして居る。角は白色にして、先端稍々黒く、側方より前方に向ひて彎曲する。肩狭く、脊は伸直にして隆起し、腹部は大きく、四肢は長い。

〔六〕 ブラウン瑞西種 (Brown Swiss)

乳用種であつて、體には黒白の刺毛を有し、臀部は殆んど垂直である。體質強健にして、體重は普通百九十貫ある。一日八九升の乳を分泌する。瑞西に産し、夏季はアルプス山の高原に遊牧せられて居る。性質頑丈にして、粗食及び氣候の激變に堪ゆるを以て、在來の日本牛種改良用の種牛として、蓋し優良のものであらう。

〔七〕 ジェルシー種 (Jersey)

英佛間の海峡に散在せる、海峡島の一なる、ゼルシー島の原産であつて、乳用牛であ

る。乳は甚だ脂肪に富み、良質の牛酪を製造するに適するのである。西洋牛種中の最小なるもの、一にして、角は短小にして黒く、毛色は多くは赤褐色にして、口及び吻端が淡黄色である。外形は優美に、且つ性質極めて柔順である。

歐米諸國に於て今日飼養せる牛の種類は、洪積世に於て蕃殖せしブリミジエニアス牛 (*Bos primigenius Bos*) より生じたもの下である。この牛はケールガルの時には、英國及び歐洲大陸に生存し、十七世紀まではポーランドに生存したるものと考へられて居る。ノースアンバランドの北方にあるチリンガム公園に於ては尙、半野生の状態にて生存するといはれて居る。

牛の人生に關して効用多きは、實に至大にして、耕作用、輓用等諸種の勞役に堪へ、肉、乳より内臓に至るまで、一つも不用の部分なき位である。肉と乳汁とが食用となりて滋養分を有するは、今更らいふまでもないことである。又牛乳よりして牛酪、乾酪、煉乳を製する。剥きたる儘の毛皮は、軍用の背囊を製し、毛皮を石灰水に浸して、脱毛したる所謂生皮は、雪駄、麻裏等の裏皮靴の中底、太鼓の皮等に用ひ、鞣皮は靴底、武器、馬具等を製する。骨は鈿鈕、櫛笄、模造鼈甲箸、パイプ等種々の製作品となり。蹄も同じく鈿鈕、櫛等

を製し、角は彫刻して裝飾品となる。脂肪は石鹼、蠟燭の原料となり、糞は肥料となり、其他血液より臟腑に至るまで、一つとして廢棄すべきものはない。又本邦種は結核性の素因なきが故に痘苗製造用に供せられて、醫學上大切なるものである。

〔一〕 犛牛 (Yak) *Poëphagus grunniens*, L.

英に又「グランチング、オックス」(*Grunting Ox* (ク牛の義)) といはる。大きは普通の牛位にして、角は長く圓筒状をなし、平滑にして、その先端は尖り、一種特有に彎曲して居る。尤も家養種にありては、角を有せざるものがある。肩部は隆起し、頸より脊にかけて、鬣状をなせる柔軟なる長毛を密生する。顔面、耳及び四肢の下部にある毛は、短けれども、體側と四肢の外側とには、長毛を密生し、それが伸直に垂下せるを以て、短き四肢は、隠れて見へないことがある。毛は絹毛状をなし、色は黒若くは白色にして、或はこの兩者の混合せるものもある。尾は長くして毛を密生し、馬尾状をなして居る。

この獸はアルタイ山脈とヒマラヤ山脈の中間なる、亞細亞の高原に棲息し、野生のものど、家養せられたるものどがある。野生のものは、常に海面上二萬尺以上の高地に徘徊する。家養種には變種多くして、ある者は、肩と體側に於ける長毛を缺くものがある。つて、體軀の大きと、外貌とを異にするものがある。野生のものは、一般に黒色であるが、

家養種にては純白色のものがある。

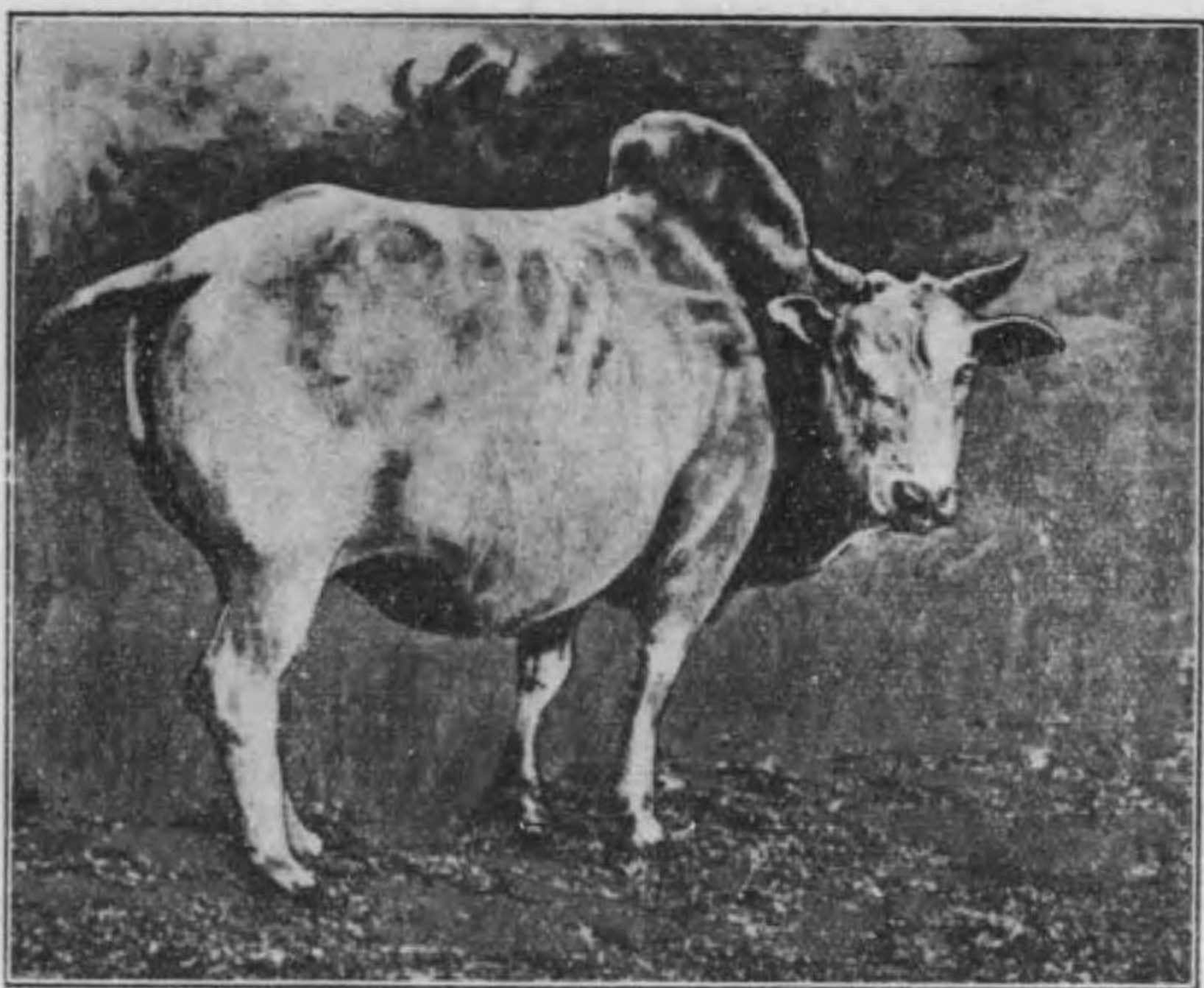
西藏國にては、之を飼養して荷物運搬用に供する。肉と乳汁

は食用として大に賞用せられて居る。尾毛はムスルマン人に因つて、投槍の裝飾として用ひられ、印度人は蠅叩きとして用ひ、支那人は、この毛を赤く染めて帽子の裝飾用に供するのである。

〔11〕 瘤牛 *Bos indicus*, L.

英に「ゼブウ」(Zebu) 又「インヂアン、オックス」(Indian Ox) (印度牛) 又「ブレイミン、ブル」(婆羅門牛) といはる。印度及びその附近の産であるが、近來

東部亞弗利加及びマダガスカル島にも輸入せられて、使役用に供せられて居る。多くの變種があつて、或るものは普通の牛よりも大きい。又或るものは、犬よりもあまり大ならざるものがある。通常肩には、瘤起を有するのである。毛色は通常乳白色であるが、時には鼠色を帯ぶるものがあり、又黒色にして斑紋を



瘤牛 圖一百第

有するものがある。

筋力強健なるが故に、荷物の運搬用として使用せられ、又耕耘用に供せられて居る。その乳汁と肉とは美味である。

〔四〕 ガウル牛 (*Gaur*) *Bos gaurus*, H.

野生牛の一種であつて、主にヒマラヤ山の北東部に位する丘陵地の森林、及びマレイ半島に産する。充分に成長したる牡牛にては、肩に於て七尺の高さに達し、この割合に、體軀も大きくある。毛色は、脚の下部が白い外、全體は黒に近い褐色であるのが、普通である。角は帯灰黄色にして、その長さは三尺に達するものがある。常に深林中に於て、小群をなして棲息し、唯朝早くか、若くは夕刻に出で、林間の空地の草原に徘徊して、草を食ふのである。ヒマラヤ山の北東部の土民は、少しくこの種を飼養せるものがある。

〔五〕 ガイアル牛 (*Gayal*) 又大額牛 *Bos frontalis*

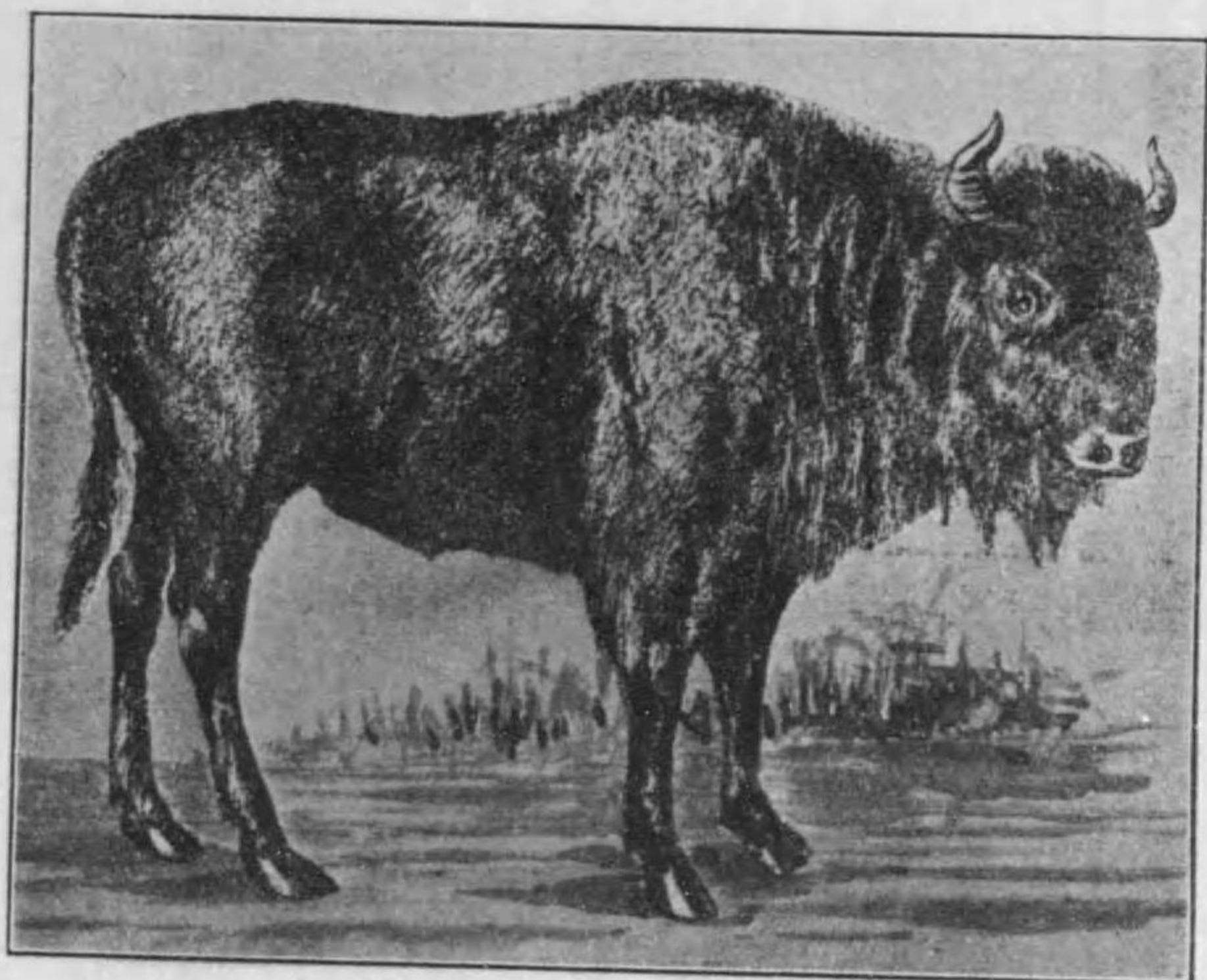
ブラマブトラの東部地方に棲息する野牛にして、屢々飼養せらるゝのである。

〔六〕 バンチング牛 (*Banting*) 又爪哇牛 (*Javan Ox*) *Bos sondaicus*

パルマ、マレイ半島、及び東印度諸島中の大なる島に、野生する強健にして、且つ迅速なる野牛である。常に小群をなして、森林ある溪谷に徘徊する。マレイ土人は、之を飼養

するのである。

〔七〕 ビゾン (Bison) ノミ



第百二圖 歐羅巴ビゾン

額は幅廣く、且つ凸隆する。頸部には、筋肉發達して隆起し、頸部と肩部とには、羊毛狀の毛を叢生する。角は甚だ短く、且つ左右遠く相離れ、その先端は内方に向つて曲つて居る。四肢は、牛よりも長けれども、割合に細いのである。常に群をなして棲息し、草木の芽、樹皮等を食する。その性質は、甚だ臆病にして、且つ嗅覺は頗る鋭敏なるを以て、風上よりは、容易に近づくことが出来ない。一たび危険に遭遇するときは、甚だ迅速に走ることを得れども、永く繼續することが出来ないといはれて居る。成熟期は、六歳頃にして、三、四十年も生存するといはれて居る。これには次の種類がある。

〔一〕 歐羅巴ビゾン (European Bison) *Bison europaeus*, Ow.

以前は、歐羅巴大陸の森林地方に廣く棲息したが、濫獵の結果、現今にては、大に其の数を減少し、唯數百頭がリトフニア及びカブカス (Caucasus) に於て保護せられて生存するに過ぎない。肩の高さは六尺位もあつて、體長は九尺以上に達する。割合に大きな圓い、側壓せられたる角を有する。尾は長いのである。

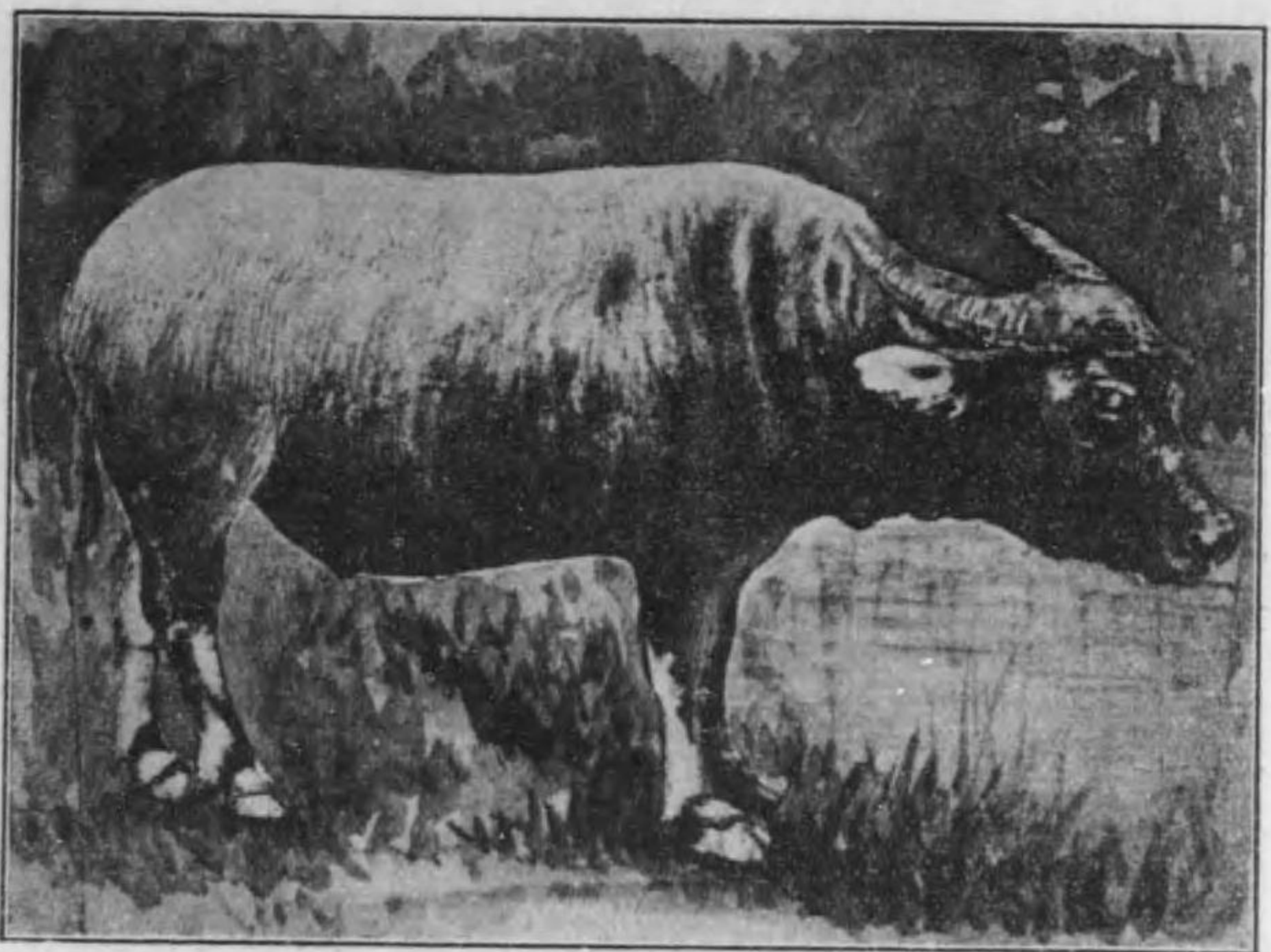
〔二〕 亞米利加ビゾン (American Bison) *Bison americanus*, Gm.

今より約五十年許前には、北米の北部草原に夥しく群居したものであつたが、殖民地の開拓せらるゝに従ひ、絶へず濫獵を受けたのである。例へば千八百七十二年乃至七十四年の二ケ年間には、四百五十萬頭以上も、毛皮用として捕獲せられた。爲めに今は極少數がイェルローストーン天然公園等に於て、政府の保護の下に生存するに過ぎないのである。體軀は前種よりも小く、肩の高さは約五尺に達し、體重は千五百封度乃至二千封度もある。角は前種よりも小さく、黒くして圓い。頭と頸と肩とには、縮れたる暗褐色の羊毛狀の毛を叢成し、體の他の部分には、短い暗褐色の毛を有する。尾は短いが、先端には長毛が總狀となつて居る。

亞米利加のインヂアンは、その肉を食用とする。毛皮は、土人の小舎用の材料、楯、衣服、

靴等として使用せられて居る。

〔八〕水牛 *Bubalus buffelus*, L.



牛 水 圖三百第

英に「インヂアン・バッファロー」(Indian Buffalo) 又「アルニー」(Arnee) 又「ウヲター・バッファロー」(Water Buffalo) 又「アジアチック・バッファロー」(Asiatic Buffalo) 又「トルー・バッファロー」(True Buffalo) 又「稱する體長は七尺以上に達し、高さは肩に於て四尺以上ある。額は牛よりも短く、且つ狭く、弓状を呈し、頭の後方よりは、彎曲せる角を生ずる。角の基部は大にして、扁平となつて居る。頸は短く、後頭部は球状をなし、腰の背部は隆起して居る。體には毛を疎生し、毛は短く、且つ硬くして、色は黒い。野生のものはヒマラヤ山麓、印度のガンガ河、西アッサム等の濕地に群居し、好んで水中に入り、泥砂中に輾轉

し、泥をは皮膚に塗抹して、昆蟲の刺衝を防ぐのである。その性質兇烈にして、可成の大きさの象をも攻撃することがある。又虎でもこれには恐れて、近づかないといはれて居る。體格は強健にして、筋力も亦牛よりも優れるを以つて、臺灣、印度地方、南部支那等にては、飼養して耕耘、運搬用に供する。肉は暗赤色を呈し、脂肪に乏しく、且つ纖維粗大にして、不味なれども、臺灣の土人は、之を食用に供する。乳汁は滋養物として、東印度、支那等にて使用せられ、印度の「ギー」(Ghee) と稱する牛酪は、これより製したものだといはれて居る。角は印材、花活、其他種々の用途に供せられて居る。

〔九〕ケープ水牛 (*Cape Buffalo*) *Bubalus caffer*, L.

南亞弗利加の森林に棲息する。角は非常に大にして、色黒く、その基部は扁平となりて、兜の如く額上に聳へ、左右兩角の間には、三角形の空地がある。體力は非常に強健にして、性質又兇暴にして、よく人や他獸を攻撃する。而して充分に成長せる牡牛は、三頭の獅子でも、逐ひ退ける程であるといはれて居る。毛皮は革紐、其他種々の用に供せられて居る。

〔九〕麝香牛 (*Musk Ox*) *Ovibos moschatus*, Blainv.

普通の牛より少し小さい。前額は陷凹し、口は小さく、口吻は毛を以て被はれて居る。

牡の角は、基脚に於て左右相密接して、扁平に結合し、頭の兩側を超へて、一旦下方に鋭るごく曲りたる後、再び上方に曲り、その先端は、眼の前方に於て、鋭るごく尖つて居る。體には、黄褐色の長毛を密生する外、その下には、柔軟なる淡褐色の羊毛狀の毛を生ずる。北米の北極圏に棲息し、二十乃至百疋より成れる團體をなして群居する。體軀の造りは、重々しく見ゆるが、よく岩上を往來し、その行動は迅速且つ活潑である。

肉は強き麝香の臭氣を放てども、エスキモ人は、左程厭はずして、之を食ふのである。又彼等は、毛皮を用ひて、寢具を製するのである。

[11] 羊科 (Ovidae)

此科には、羊 (Sheep) 及び山羊 (Goat) を包括する。角は眼窩の後部背面より生じ、その横断面は、幾分か扁平にして角張り、且つこれには輪狀の隆起を有し、後外方に向ひて、弓狀若くは螺旋狀に曲つて居る。而して、牛科と同じく、角の内部が空洞にして、胃は四囊に分れて居る。又齒式は牛科と同一である。口は小さく、上唇は中央に於て裂け、毛には普通のものゝ外に、柔軟なる細毛が生へて居る。

[1] 羊 (Sheep)

羊と山羊とは、極めて親密なる血縁を有するを以て、家養種を除く外、この兩者を區

別することは甚だ困難である。飼育せる羊と山羊との毛を比較すると、その間に著しく相違せる特徴を認めることが出来るが、然かも野生せる兩者の毛を比較せば、別に區別すべき點がない。羊を暖國に於て野放しにして、別段に人が毛に手入れをせず、放置して置くと、柔軟なる細毛、即ち所謂羊毛は、速に普通の山羊の有する毛のやうに變化するのである。然かし大體から、通俗的に區別していふと、羊の方の毛は短く、柔軟で、多くは卷縮して居るが、山羊の方の毛は、剛くして長いのである。山羊の方では、顎の下に髭が生へて居るが、羊の方では、顎の下には髭がないと云はれて居る。然しこれとても、真正の區別點ではない。山羊の中には、甚だ長い顎髭を有するものもあるが、又中には、之を有せざる種類もある。羊の中にも、例外があつて、時には髭を有するものもある。羊と山羊との中には、角の形狀は非常に變化するから、角の状態に因つて、羊と山羊とを、絶対に正確に識別することも出来ない。然しながら、羊の角は、山羊の角の生へて居る部よりは、少し後方より生じて、その先端が彎曲して居て、時には螺旋狀に卷曲せるものもある。然るに、山羊の角は、眼の直上より生じて、形は直立で、且つ壓縮せられて、後方と外方とに曲つて居る。又山羊は、恐らくは彼等の祖先と認むべき「アイベツクス」(Ibex) の如くに、常に尾をば、上方に反曲して居ると云ふて、之を區別點とする人もある。

が、山羊の一種なる「マークホル」(Markhor)を瞥見すると、この規則は除外例なくはないことが判然するのである。

野生の羊は、亞細亞、亞弗利加、歐羅巴及び北米のロツキー山に産する。又野生の山羊は歐羅巴のアルプ山脈、ピレネー山脈、亞弗利加のアビシニア附近、亞細亞のヒマラヤ山脈等に産する。山羊は岩石峨々たる峻坂を跳躍すれども、羊ではこの如き敏活なる動作をすることは出来ないといふことである。山羊が敵と闘争する際には、後肢にて體を擡げ、己れの體をば、敵の側面に運び寄せ、頭で押すのである。然しながら、羊は敵に向つて、直ちに突進して、頭で打ち當るのである。而して羊も山羊も、共に群居するを好むのである。

牧羊の起りは、紀元前幾年といふ古代に、ベルシャヤ人がベルシャヤ山羊を飼養したのが始めだといふ説がある。而して、今日飼養せる山羊の品種は、餘程よくこのベルシャヤ山羊に似て居る。尤も其の當時は、毛を取るよりも、乳汁を搾るのが目的であつた。その後、この毛を織物として、利用するやうになつたものである。斯く山羊の毛が、専ら使用せられて居る中に、羊の毛も、織物として、利用するやうになつたものと云はれて居る。英國は、古來歐洲でも、牧畜の盛んなる國であつて、あらゆる羊の種類を飼養し、羊毛を

は、毛織物として諸外國に輸出した外に、又種羊たねひつてを諸國に供給したのである。元來牧羊は、粗放的農業の行はるゝ土地に適するを以つて、十九世紀の頃より、濠洲、北米、南米、亞弗利加等の新開國に、牧羊業が盛んに興り、廉價に、莫大の羊毛を産出するやうになつてから、折角發達した歐洲の牧羊業は、大打撃を受け、これが爲めに、牧畜家は、毛用の羊のみを飼育する方針を變へて、肉用若くは毛肉兼用とせざるを得ざるに到つたのである。今日世界で有名なる羊毛の供給地は、濠洲、これに次いでアルゼンチン、米國、露國等である。支那でも、古來牧羊は盛んに行はれて居つたらしいが、その種類は山羊、羚羊かみじがなどをも含んで居るといふことである。然しその飼養の目的は、主として肉用であつて、古來三牲の一として美味に數へられて居る。

〔一〕羊 オVIS Ovis aries, L.

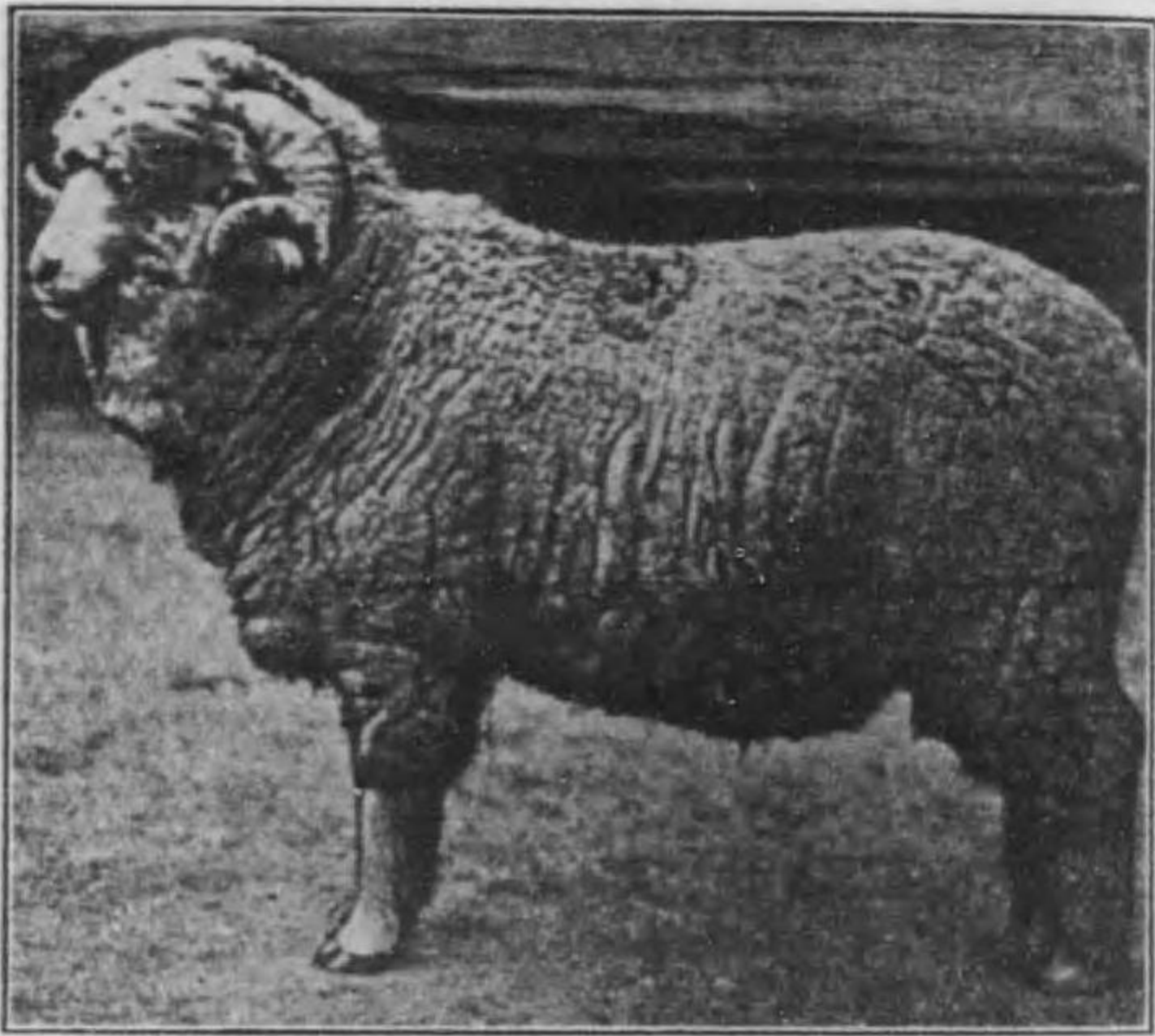
英に「ドメスタック、シープ」(Domestic Sheep) (家養羊)と稱する。體の大きさは、略々犬の大きなもの位であつて、體は柔軟なる長毛を以つて被はれ、毛は品種に因つて、長短一様でないが、多くは捲縮し、その色には種々ある。中には、頭部と四肢とは暗色にして、全身黒色なるものがある。或は反對に、頭部と四肢とは黒色にして、全身暗色なるものなどがある。

頭部は略々圓錐形をなし、眼は温和にして小さく、口も亦小さい。角は品種に因つてその數を異にする。例へばイスランド羊 (Iceland Sheep) には三本、四本若くは七八本の角を有するものがある。又顔黒羊 (Black-faced Sheep)「チエビオット」羊 (Cheviot Sheep)「サウスダウン」羊 (South Down Sheep)等は牝牡共に角がない。又「メリノ」羊 (Merino Sheep)の如く、牡のみ螺旋狀の角を有するものがある。而して角の形狀、大小、方向等も、品種毎に異つて居る。尾毛は脚下までも垂下すれども、その形狀は細長なるものもあり、また扁平にして大形のものもある。四肢は細く、各肢には牛と同じく地に達する二趾を有し、他の二趾は、後方に懸垂して、所謂懸蹄をなして居る。

羊は飼養の結果、種々の品種がある。尾の長短でいへば、長毛種及び短毛種がある。用途より云へば、毛用のものと、肉用のものと、毛肉兼用のものとある。又その生地に據つて、平原種と丘陵種と山岳種との三者に分つことが出来る。傍左に一二の主要なる品種を記載する。

(1) メリノ羊 (Merino Sheep)

「メリノ」は、西班牙語で「徘徊する」義である。十八世紀の中頃に、西班牙に於て改良せられたる優良なる羊である。牡は眼の兩側に、螺旋狀の角を有し、頬と額とには、總々し



第百四圖 メリノ羊

たる毛がある。體質強健にして、毛量多く、その質細美なるを以て、毛用として貴重せられて居る。この「メリノ」羊が、千七百三十三年に瑞典に入り、それより佛國、獨逸、奧太利等にも輸入せられ、漸次淘汰改良せられて、多くの優良なる種類を造つたのである。その中、佛國にて改良せられたるものは「ランブリー」種 (Rambouillet) 又佛蘭西メリノである。これは骨格強健にして、前者よりも大きく、毛量も多く、毛用の外、乳用にも用ゆる。また

「サクソニア」にて改良せられたるものは「エレクトラル」種一名「サクソニア」メリノと呼ばれる。毛質は世界中で、これに比すべきものがないと云はれて居る位であるが、體は小さく、従つて産出する毛量も少く、且つ體質が虚弱である。又奧太利に入つて、改良されたものは「チグレッツチイ、メリノ」(Negretti Merino) である。その體質は強健で、且つ前者より大きく、顔面は狭長にして、殆んど毛がない。又全身の皮膚には皺がある。

(一) レスター羊 (Leicester Sheep)

英國のレスター地方に産するもので、體は肥大し、體重は二十五六貫にも達する。毛は長くして太く、品質は良好でないが、至つて早熟で、肥り易いから、肉用として優れて居る。

(二) コツウオールド羊 (Cotswold Sheep)

前者よりは、晩熟であつて、骨格は更らにそれよりも大い。毛質は佳良ならざれども、産出量が多い。體質は強健にして、風土の變化、飼養の粗悪に堪ゆる長所がある。西曆千四百六十四年に、英國に於て、此種と「メリノ」種とを雜交させて「メリノ」羊を改良して以來、本場の西班牙メリノよりも優良なる「メリノ」種を得たのである。

(四) サウス、ダウン羊 (South-down Sheep)

英國サセックス地方の、南面せる丘原に産する。毛は短く良質でないが、早熟で肥満し易く、肉は最も佳いのである。

(五) シロップシャイヤ羊 (Shropshire Sheep)

顔や四肢は黒褐色を呈し、鼻側には皺を有する。前種よりは成熟することが遅いが、然かも肥満し易く、體質は強健である。

(六) チェビオット羊 (Cheviot Sheep)

體質強健なれども、體軀は大きくない。毛は短く粗くして、「スコッチ」と稱する毛絲の眞物ほんものは、この毛で紡いだものである。

(七) 印度の一角羊 (Unicorn Sheep of India)

軟毛の生へ方は僅少である。二つの角は、共に結合して、一角となり、僅かに先端に於てのみ分離して居る。



第五百五圖 種トツオピエチ

羊は成熟すること甚だ速かにして、早熟種に至りては、生後一歳半乃至一歳と九ヶ月にして、子を産むものがある。山羊と同じく一夫多妻にして、一牡はよく三十乃至五十頭の牝に配することが出来る。牝は通常一年一回受胎し、一産に一乃至五子、稀に六子を産めども、普通は一二子を産むのである。その懐孕期は、凡そ五ヶ月間である。

羊毛の纖維は管状をなし、無數の横紋ありて、相觸接して縮れて居るから、之を壓搾するときは、搦み合ひて毛絲となるべき性質がある。そこで、羅紗、毛布、フランネル、スコッチ、セル、メリンス、毛縞子等を織るのである。羊毛の纖維は、上述の如く縮れて居る者

を、引き張りて絲となせるものなれば、常に舊態に戻らんとする性質がある。されば毛織物に濕りを與へ、或は洋服が雨に濕れたる時などは、織物の表面一體に、小皺を生ずるのは、自然の理である。されど、毛は之に濕氣を與へ、且つ火熨斗を當つれば、自由にならざる性質がある。斯くして之を冷却し、且つ乾燥せしめるときは、變形したる儘になる性質がある。

羊の肉は、その味淡泊である。今本邦産羊肉の成分を見るに、水分五七、三〇、蛋白質一四、五〇、脂肪二三、八〇、鹽分四、四〇を含有して、脂肪分の割合は、牛肉に於けるよりも多い。而して勞働せざる人や、婦人や、病弱者の食料として効能があるといふことである。また羊乳は頗る脂肪に富み、平均百分の六、八六を含有する。伊太利、埃地利、匈牙利の山地、和蘭にては滋養料として、大に賞用して居るといふことである。

〔一〕 野生の羊 (Wild Sheep)

野生の羊には次の種類がある。

〔一〕 ムーフロソ羊 (Mouflon) (*Ovis musimon*, Schreb.)

コルシカ、サルデニアに産する山羊状をなせる羊であつて、羊の家養種の先祖なるべしと考へられて居る。牝には角なく、牡の角は大きく、長さは二尺五寸餘に達し、基部

は三角形をなし、家養の羊の角の如く下方に曲れることなくして、後方に曲つて居る。頸と咽喉部の毛は長いが、體の諸部にあつる黄褐色を帯びた赤色の毛は短く、體側には淡灰色の斑紋がある。また灰色をなせる軟毛を密生する。以前は大群をなして棲息せしが、今はその數を減じたのである。

〔二〕 亞弗利加野生羊 (Barbary Wild Sheep) (*Ovis tragelaphus*)

英に又「アウダッド」(Aoudad) 又「エールイ」



第百六圖 フォーム羊

(Arui) といはる。亞弗利加唯一の野生羊であつて、埃及とマロッコとの間の山地に棲息するが、時にはサハラ砂漠の樹木なき區域内にも、出没することがある。よく成長せる牡では、肩の高さは、三尺五寸位もあり、且つ體軀は強壯である。毛色は黄味が掛つた帶赤灰色であつて、他の羊とは異りて、咽喉部より長い粗糙の鬃が垂下し、以て前肢の膝の處まで被ひ垂れて居る。

〔三〕 アルガリ羊 (Argali) *Ovis ammon*, Pall.



頭羊リガルア 圖七百第

太さは殆んど一尺六寸にも達したものがあつて、角の基部に於ける周囲の大きき、その曲線に沿ふて計りたる長さは、四尺に達するものがあつて、この種の外に、亞細亞には、多くの野生羊の種類を産する。

〔四〕 大角羊 (Bighorn Sheep) 又 ロツキー山野羊 (Rocky Mountain Sheep) *Ovis canadensis*

ロツキー、マウンテンズの高峯に群棲する。角は、アルカリ羊の角に似て居つて、巨大であるが、彼れよりは幾分か短く、且つ螺旋狀の捲き方も少い。毛色は帯灰褐色にして、



圖八百第

他の野生羊の如くに、臀部は白ばみで居る。體の高さは三尺五寸位で體軀は甚だ丈夫に造られてある。性質疑心に富み、且つ臆病であつて、人の姿を見れば、番兵役をなせる羊の、警告に因つて、忽ち彼等は遁走するのである。この羊は、絶壁を往來すること實に巧妙であつて、百五十尺位の高所より、容易に下へ跳躍し、然かも負傷することがないといはれて居る。肉は食用として美味である。

〔三〕 山羊 (Goat) *Capra hircus*, L.

り、又短きものもある。毛色は主に褐色、若くは黒色である。牡は概して頸下に尖れる鬃を垂下する。又牡は羊の牡に見られざる所の、強い臭氣を有する。好んで峻峻の地を徘徊する。

徊し、羊よりは活潑敏捷である。又大に樹皮を嗜むを以て、灌木や幼樹の生せる所は、あまり好まないものである。これには羊と同じく多くの變種がある。

〔一〕 アンゴラ山羊 (Angora Goat)

〔小亞細亞のアンゴラ山地の原産にして、體軀は大きい。體色は乳白色に近く、長い絹狀の捲毛が垂れて居る。牡には長い螺旋狀に捲ける角がある。それは南歐洲、ケープ殖民地等にて、盛んに飼養せられ、毛をば肩掛、唐天ペルシャ、フランシタン等の製造に使用するのである。



羊山ラゴンア 圖九百第

〔三〕 カシミール山羊 (Cashmere Goat)

西藏の高原に産する。毛は長く絹狀をなし、その外に柔軟なる羊毛狀の軟毛があつて、冬の寒氣より體を保護するやうになつて居る。體軀は通常種よりも小さく、耳は垂下し、牝にも小角を有する。この毛より肩掛、手袋其他の毛織物を製するのである。

山羊の肉は羊肉に略ほ類似すれども、その味は劣つて居る。乳汁は淡黄色を帯び、一

種固有の臭氣を有し、その成分中には、平均百分の四、七八(最少量のものは百分の七、五五最少のものは三、一〇である)の脂肪を含有し、頗る滋養の効ありといはれて居る。又山羊の皮は、手袋等を製するに用ひらるゝのである。

〔四〕 野生の山羊 (Wild Goat)

野生の山羊には、多くの種類と、又無数の變種とがある。彼等は皆活潑敏捷の獸にして、好んで岩石峨々たる絶壁を往來するのである。

〔一〕 アイベツクス (Ibex) Capra Ibex, L.

恐らくは普通の山羊の先祖であらうと云はれて居る。アルプ山脈の雪を以て被はるゝ絶壁に棲息する。角は長さ三尺もありて、横に亘れる隆起線を有する。常に老ひたる牡の指揮の下に、五乃至十疋の小群をなすのである。大さは普通の山羊位であつて、冬季には、長き粗毛を着け、その下に柔軟なる毛がある。體の上部は淡褐色にして、體下は白く、横腹には褐色條を有し、背には黒條がある。

〔二〕 ター山羊 (Tur) 又カブカス、アイベツクス

(Caucasian Ibex) Capra cylindricornis

肩に於ける體の高さは、殆んど三尺もあつて、毛色は淡褐色である。角は殆んど圓筒

状をなし、後外方に曲り、その先端のみが一尺位離れて居る。

【三】 マークホル (Markhor) *Capra falconeri*

印度の北西部に産する。牡の角は螺旋状に捲曲し、且つ胸及び肩にまで、擴がれる大なる鬃を有するので著明である。

【四】 バサング (Pasang) *Capra aegagrus, L.*

波斯に産する。角は時として四尺二寸位にも達する。

【五】 西班牙野生山羊 (Spanish Wild Goat) *Capra pyrenaica.*

西班牙の山地に産する山羊である。

【六】 ロツキー山山羊 (Rocky Mountain Goat)

Oreamnus montanus

ロツキー山脈の氷雪を以て被はれたる地方に棲息し、毛色は白である。體には長毛を密生し、その下には良質の軟毛がある。長毛を剃ぎ取りたる大きさは、可成生育せる羊位である。

【三】 羚羊科 (Antilopidae)

體軀の大きさは、牝牛大のものより、小さなものは普通の羊よりも小さいものがあつて、

地球上の多くの部分に棲息する。その角は、基部に於て中空であつて、牛の如く角質の心を有する。而して牛の如く、一度脱落すれば、再び生することはない。多くは牝牡共に角を有すれども、角は眉の上方より出で、伸直にして圓錐状のものもあり、或は多少捲曲するものもある。或は又後方に向つて、鉤状に曲れるものもある。毛は滑らかにして密生し、體軀は輕快にして、四肢は細く、これには小なる蹄を有する。この科には殆んど百種位もあつて、その九割は亞弗利加に産する。

【一】 カモイス (Chamois)

Rupicapra rupicapra, Pall.

アルプ山、カルパチア山、ピレネー山等に棲息する。大きさは小なる山羊位ありて、肩に於ける高さは、約二尺位である。毛色は主に曇つた帯赤褐色にして、背には暗色の一線を有し、頭と後肢とは、白色を混して居る。牝牡共に角を有し、角は頭上より伸直に出で、その先



第百十圖 カモイス

端は後方に至りて急に屈曲して居る。

(一) ガゼリー (Gazelle) *Gazella dorcas*.

「ガゼリー」には多くの種類がある。而して總てのものは小形なるか、若くは中庸大であつて、主として北部亞弗利加、パレスチナ、亞刺比亞、小亞細亞及び中央亞細亞の各地に棲息する。その中で最もよく知られたるもの、一つは、こゝに掲げた「ドルカス、カゼリー」(Dorcas Gazelle)である。アルジェリアより北部亞弗利加を通りて、小亞細亞にまで分布する。肩に於ける高さは、二尺を超ゆることなく、角は牡の有するものは、牝の有する角よりも強くして、且つ七絃琴状をなして、後方に曲り、その長さは、平均一尺位である。脊の毛色は、淡い黄褐色にして、腹部は純白色をなし、脊と腹との間に、褐色若くは暗色の條を有する。顔面には二條を有し、その一條は帶黒褐色なれども、他の一條は白色である。又後肢では、白色部が著しく勝つて居る。眼は大きく、暗色



ガゼリー 圖一十百第

にして光澤がある。常に大群をなして棲息し、四肢は細長にして、迅速に疾走し得るを以て「グレーハウンド」(犬)でも之を追跡することが出来ない位である。飼養せるものは、よく人に馴れるを以つて、シリア及び北部亞弗利加にては、屢々之を飼養することがある。

(三) ハートビースト (Hartebeest) *Bubalis caama*.

「ハートビースト」は亞弗利加大陸に産し、これには九種あれども、その中最も美なるものは「ケープ、ハートビースト」(Cape Hartebeest) 又「赤色、ハートビースト」(Red Hartebeest) である。主に亞弗利加のマシヨナランド (Mashonaland) の南部に棲息する。肩に於ける高さは、普通約四尺であるが、老ひたる牡では、殆んど五尺の高さに達するものがある。毛色は栗色にして、脊に於て紫色を帯びて居る。顔は長く且つ狭い。皺状を呈せる角は、一且稍前方に曲りたる後に、急に後方に向つて、直角に曲つて居て、その長さは二尺を超ゆることは甚だ稀れである。

(四) 四本角羚羊 (Four-horned Antelope) *Tetraceros quadricornis*, H. Sm.

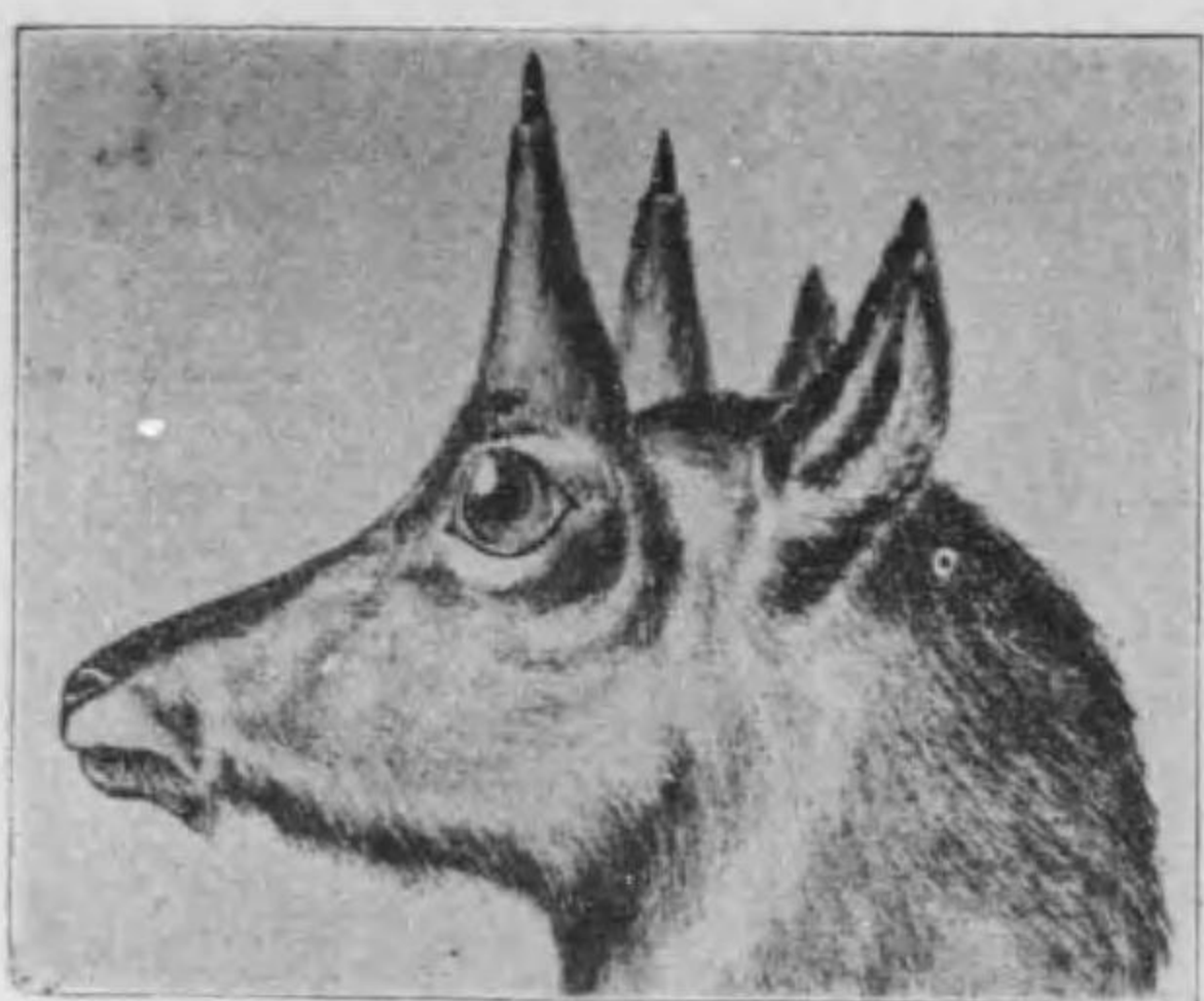
印度産の羚羊の一種にして、牡は常に四本の角を有するので有名である。眼に接近

して位する前方にある一對の角は、甚だ小さくして、單に瘤狀をなせる位であるが、長いものでも、二寸五分より長いことはない。而してその後方に位する一對の角は、それよりも大きくして、長さは三寸七八分位もある。脊の毛色は淡褐色なれども、腹面は淡色である。その習性は、殆んど野兔によく似て、餌食を拾ひに出るのを見ることは、稀れである。彼等は狩獵者に因りて、殆んど蹴倒されるまでは、ちつと地に密着して横はり、いざといふ時に、勢よく跳躍して逃遁するのである。

〔五〕 羚羊 又かもしし又かましし又くらしし又にく又いは
しか又あをしし Nemorhaedus Crispa, Temm.

英に「ジャバニース、アンテロープ」(Japanese Antelope)といはる。土佐、日向、武藏、秩父、下野、信濃、飛騨、加賀、大和等の深山に棲息する。肩に於ける高さは二尺餘、體長は二尺七八寸位あつて、尾は短い。角は黒く、その長さ五寸許にして、少しく後方に屈曲する。これにて、鯉魚を釣る鉤を製するのである。毛色は灰黒色、若くは褐色にして、長い柔毛を生ずる。之を用ひて氈褥となし、又鞍褥とする。大槻博士の「言海」に據れば、かもしかは「氈鹿」の義であるといふことである。毛皮は敷物となり、また靴を製するに用ひ、肉は食用に供せらるゝのである。

〔六〕 叉角羚羊 (Pronghorn Antelope) Antilocapra americana, OW.



圖二十百第 叉角羚羊の頭

英に又「ブロングバツク」(Prongbuck)といはる。角は枝出し、且つ鹿の角の如く、年々脱落する。而して通常牝には角がないが、若し之を有するときは、大さは小さく、且つ又狀をなすことはない。角は先端が黄色味を帯べる外、大部分は黒く、扁平にして、唯先端に於てのみ、少しく後方に曲つて居つて、長さは約一尺位が普通であるが、時には一尺四寸余に達するものがある。この獸は北米のカリフォルニア及びオレゴンに、最も普通に見らるゝものであつて、俗間では單に「アンテロープ」(Antelope)と呼ばれて居る。肩に於ける高さは、平均三尺位であつて、體には剛毛を有する。體下は白く、眼、耳、頰の邊も亦白く、顔面は帶褐色にして、他の體部は栗色である。

叉角羚羊は如上述べたる如く、角の性質は、他の羚羊類とは、大に異なる所あるを以て、叉角羚羊科 (Antilocapridae) なる獨立の一科とする人もある。

〔四〕 鹿科 (Cervidae)

この科のものは、體貌は細形優雅にして、四肢は細く、その動作は敏捷である。尾は甚だ短く、耳は中庸大にして尖つて居る。又鼻孔は吻端に開いて居る。眼は清らかにして、如何にも柔和さうに見ゆる。この科の大多數のものは、眼の内角の下部に、一小凹窩を有し、この部より劇臭を有せる蠟様の物質を分泌する。

角の發生の模様と、その構造とは、他の反芻類とは異り、馴鹿シカの如く、牝牝共に角を有するものあれども、通例牡のみ角を有する。角は枝ありて、年々その枝數を増し、且つ大さも加はり、或る程度までは成長し、且つ毎年脱落する。今角の發生を述べれば、始めに角の基部となるべき突起の部分ありて、その上に軟骨を生じ、又外面を被ふに、天鵞絨テングウ狀の軟皮を以てし、その狀恰も蕈の菌傘キノコを開かざるものに似て居る。之を鹿茸シカノコといふて居る。皮膚には多くの血管ありて、角となるべき骨質を養ふのである。而して軟骨が化骨するや否や、角の下部には結節を生して、血液の循環を止めるが故に、皮膚は乾燥し、且つ故意に之を剝脱して、眞の裸角ヌカツノとなる。この角は、生後一年間は生することなく、第二年目に出來るのであるが、この際は、枝出することはない。第三年目に至りて、この角は脱落して、間もなく、少し長い角が生へ出で、これに一枝が出来て、又角またツノとなる。かくて、第四年には二又となり、年々更生する毎に、一枝宛増すのである。然し六年以上に

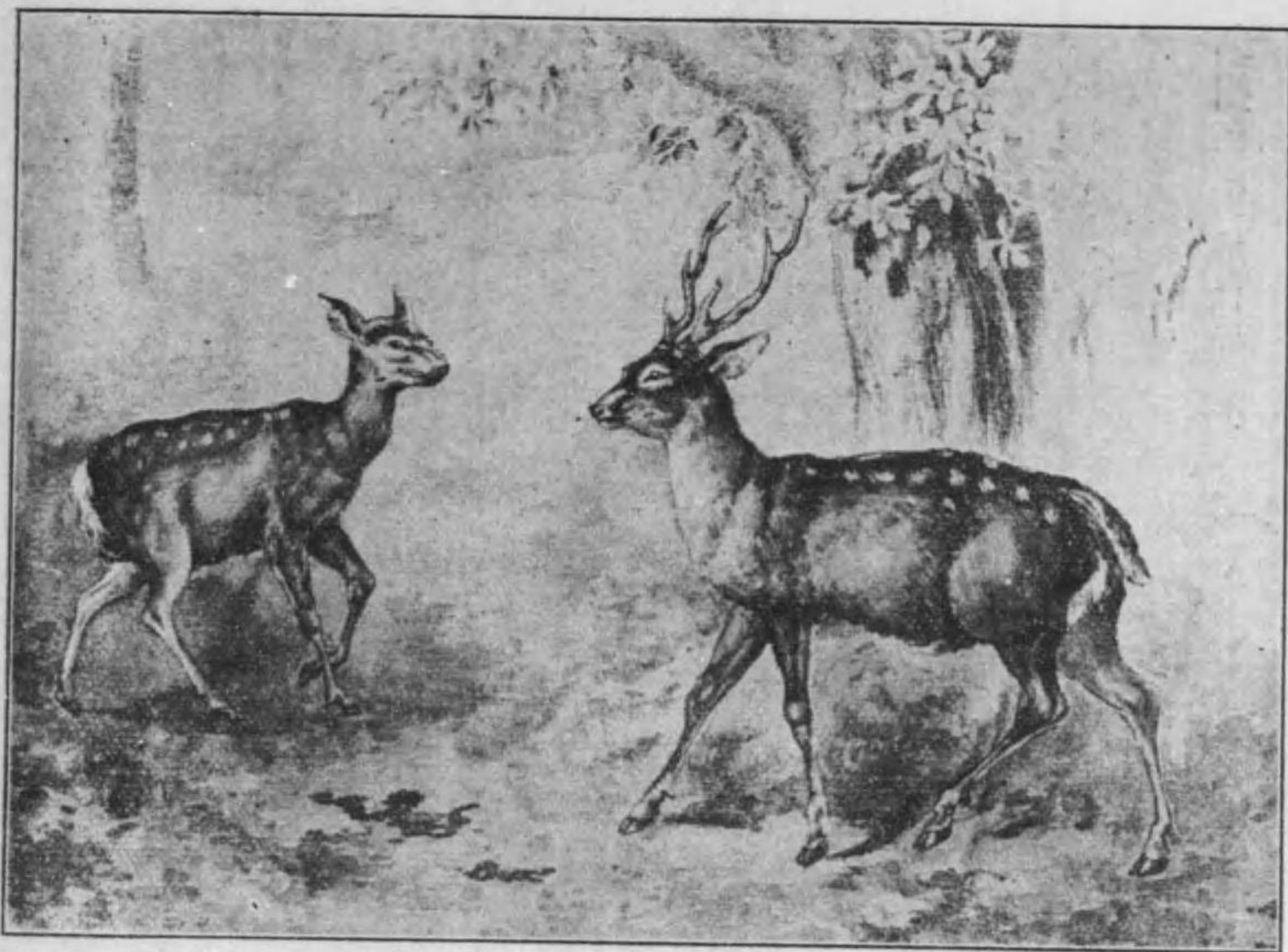
なると、又枝の出來方は、毎年一枝宛増すとも限つて居ないさうである。

四肢は牛科のものと同じく、中央の二趾のみ地に着き、第二趾と第五趾とは、小さく、懸蹄となつて居る。而して鹿科の大多數のものは、後肢の内側に於て、毛叢を生ずることとは、羚羊科のものと異つた所である。

この科のものは、暑き乾燥せる地方を好まずして、常に森林、放牧場等を徘徊し、植物質を食する。齒式は $I. 0. 0. P. 3. m. 3. 34$ である。毛色は褐色を帯びて居るが、幼獸では、多くは生れたる初年に、白色の斑紋若くは條紋を有するものである。この科には二十種ありて、その變種は甚だ多い。而して牝は、四個の乳房を有すれども、分娩する子の數は、唯一子である。常に小群をなして棲息し、濠太利亞及び南部亞弗利加には、産せないものである。

〔一〕 鹿 *Cervus sika*, Temm.

英に「ジャバニース、チーア」(Japanese deer)と稱する。古より畫に描かれ、歌に詠まれ、よく人に知られたる獸であつて、和名鈔には「しか」か、景行天皇紀には「かせぎ」、古歌には「やまのかせぎ」はらひぐさ「もみちどり」すがる「よぶこどり」等の名がある。北海道本州、四國、九州の山地に棲息する。頭は長く、耳は頭の後部にありて、自由に動かし得るのである。



第一百三十圖

口吻は稍圓味を帯んで居る。牡は牝よりも稍大きく、頭部には逞しき叉角を具へて居る。これは鹿に取つては唯一の武器である。晚秋山野の木々が霜に飽き、林衣に紅を染める候となるに「ヒヨ、ヒヨ、ヒユ、ヒユ」と頻りに啼いて、その聲を聞かば、人をして詩趣を惹き起さしむるのであるが、この際は「牡夜鳴喚、牝秋夜最頻」の交尾の時節である。而して平素性質極めて温順なる牡も、性質荒々しくなりて、牝を得んが爲めに、争鬪を敢てするのである。

角の更脱する季節は、大底四月乃至六月の頃である。而して若き鹿の角は、一本角であるが、年を経るに従ひ、又狀

となり、大概は四本枝即ち三叉以上に成長するものはないのである。鹿の毛皮は、褐色にして、頗る美麗である。夏毛には、白色の斑紋を有するが、冬毛にはない。而して幼獣の斑紋は、殊に壯麗である。

鹿は、常に山林原野にありて、山毛櫨、櫟、栗等の果實、カヤ、ス、キ、クマザ、その他の樹木の芽、及び若き枝を食し、また樹葉を食する。牡に新たに鹿茸の生ずる際には、その軟骨を脱落せしめん爲めに、之を以て樹皮を摩擦して、害をなすことがある。又耕地に來りて、蕎麥、粟等を食することがある。

肉は食用として、美味にして、血液を増す効があるといはれて居る。角は彫刻、其他の用に供せられ、皮は鞣皮として使用せらるゝのである。

(一) 水鹿 (川瀬林學博士、鹿參照) 又スインホー氏の鹿

(科學世界、第三卷第十三號) (石川理學博士、述上) Cervus Swinhoei Selater.

臺灣に産する鹿である。

(二) 臺灣斑入鹿 (Formosan Spotted Deer) Cervus pseudaxis, Eydonx and Sonleyet.

臺灣に産する鹿である。

〔四〕 赤鹿 (Red Deer) *Cervus elaphus*, L.

英に又「スタツグ」(Stag)といはる。我が北海道に産するが、樺太には未だ発見せられ



第百四十四圖 赤鹿 (After Protheroe)

て居ないといふことである。その他西比利亚を通りて、欧州大陸の多くの部分及び英國にも産する。毛色は夏では、帯赤褐色であるが、冬季には灰色を帯びるやうに變化する。六月

鹿頭に、一子稀に二子を産み、子は背と體側とに、白色の斑紋がある。體の大きさは、小馬位あつて、枝状をなせる角の成熟せるものは、長さ三尺に達し、二十個の尖端を有する位であるが、時としては、枝は四十個以上の尖端

〔五〕 亞米利加赤鹿 (Red deer of America) *cervus canadensis*, Priss.

を有するものがある。而して一對の角の重量は七十封度(ポンド)に達する位である。英に「ワビチ」(Wapiti)といはる。鹿科中の巨大なるものにして、成熟せる牡にては、五尺半以上の高さに達し、體重は千封度(ポンド)に及ぶものがある。角の又は、十二乃至十四もあつて、時には二十又にも及び、長さ五尺に達する角を有するものがある。ロツキヤ山脈カスケード山脈及びその附近の地方にも棲息する。よく水を泳ぎ、またよく迅速に走るのである。北米のインヂアンは、冬季この獸を用ひて、橇を曳かせて、荷物の運搬用に供する。その肉は美味であるといはれて居る。

〔六〕 サンバル鹿 (Sambar) *Cervus nicolor*

印度に産する鹿にして、大きに於て、赤鹿に優つて居るが、その動作と力とに於ては、赤鹿と等しい位である。毛色は煤褐色にして、眼上には黄褐色の斑紋を有する。角は三又となり、枝株は頭頂を超へて、前方に突出し、先端は簡單に又状となつて居る。而して外部の彎曲線に沿ふての長さは、四尺に達することがある。常に林地に棲息し、主として夜間出で、食を索むる。この獸は水濕地を好むものにして、よく泥濘地に轉輾し居るのである。

マレイ半島、ジャバ、フィリピン諸島には「サンバル」の他の種類を産するが、總べて小形種である。然しながら、その形貌と習性とは、こゝに述べたるものに、非常によく酷似

して居る。

〔七〕 淡黄色鹿 (Fallow Deer) *Dama vulgaris*, Brook.

充分に成長せる牡は、肩に於ける高さは三尺あつて、體重は二百封度^{ポンド}に超ゆるものもある。毛色は概して黄褐色、若くは帶赤褐色にして、白色の斑紋を有し、又體には幾多の白線を有する。而して冬に於ては、毛色は灰色を増し來り、又斑紋は、非常に不分明となるのである。然しながら、夏に於ても、唯不分明なる斑紋を有する帶黒褐色のものもある。角の上部は扁平となれるか、若くは掌狀となつて居る。歐羅巴及び亞細亞に産する。

〔八〕 羴鹿 *Cervulus muntjac*, Gim.

英に「インヂアン、ムンツヂヤック、ヂイヤ」(Indian muntjac Deer) 又「カカー」(Kakar) 又「ギーキング、ヂイア」(Barking Deer) と稱する。肩に於ける高さは、唯二尺位にして、體重は三十封度^{ポンド}よりは輕い。體軀は細く、且つ輕快にして、毛色は赤黄褐色で、頗る美麗である。角は小さく、且つ甚だ單純にして、通例その長さは、三寸三四分乃至四寸二分位であるが、甚だ稀れに、その二倍の長さに達するものがある。顔面には、眼下に斜に走れる二個の隆起線がある。牡の上顎の犬齒は、牙となりて發達し、危難に遭遇するときは、これで犬



種一ノ鹿羴 圖四十百第
Albino Muntjac (From New Illustrated
Natural History of the World)

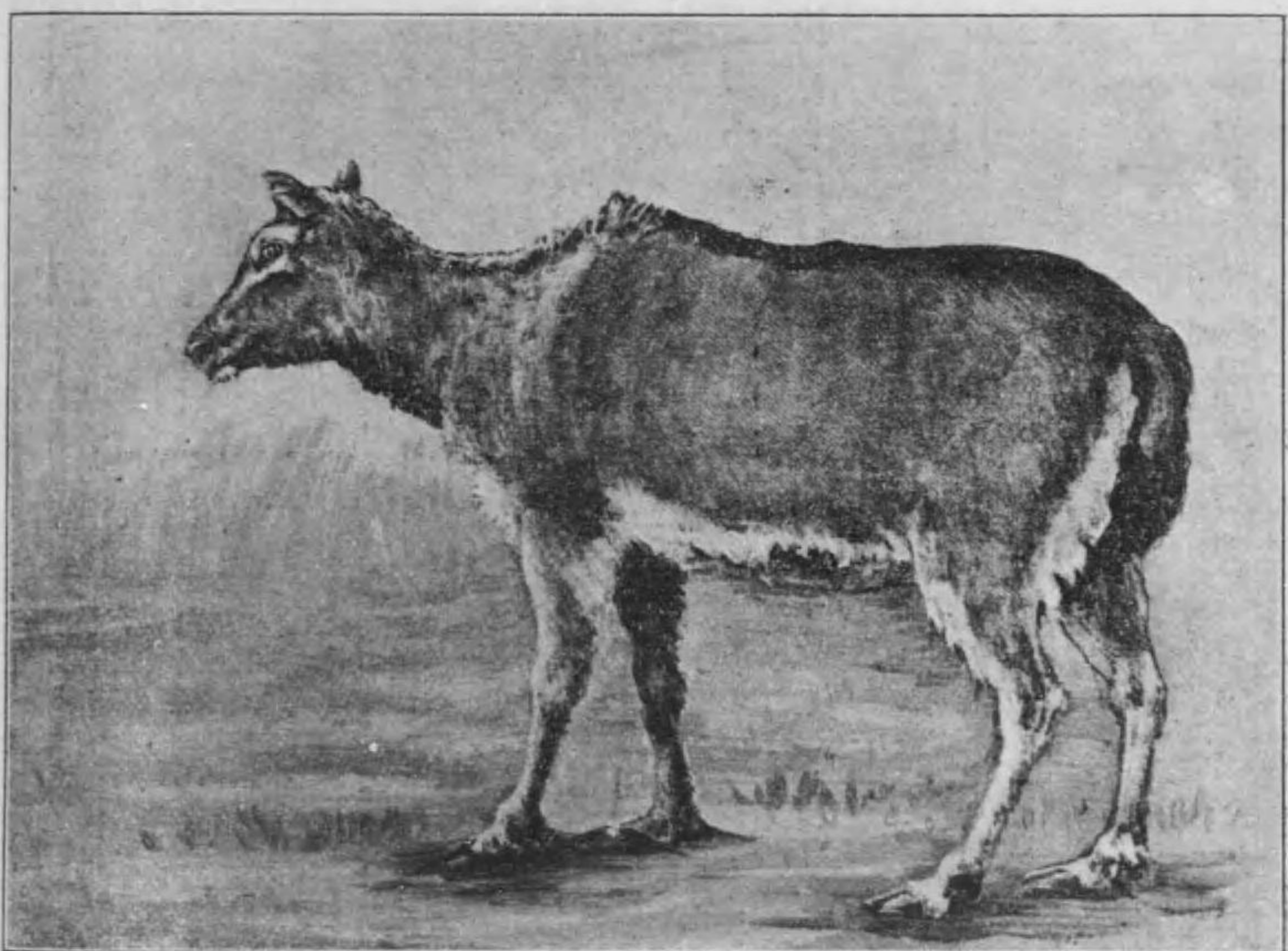
を嚙まんとすることがある。而して物に驚くときは、狐の吠聲の如き叫聲を發する。その性質は、臆病にして、速力は非常に迅速である。この獸は、スマトラ、瓜哇、ホルネオ、マレイ半島、印度、ハイナン、臺灣等に産するのである。

〔九〕 ロー鹿 (European Roe Deer)
Cervus capreolus, L.

最も優美なる小形の鹿にして、肩に於ける高さは、二尺三寸四分許、體長は三尺三寸位ある。角は小さく、長さは七寸五分乃至一尺一寸七分位にして、三枝を有する。毛は粗くして、尾の周圍に白斑を有する外、全體は暗赤褐色である。他の鹿と異りて、眼の内眥には、凹窩なく、又尾はない。常に群をなさず、又一夫多妻でもない。歐洲の暖地及び亞細亞の各地に産し、獨逸及びオーストリア、ホンガリアには、殊に夥しく棲息する。

〔一〇〕 四不像 *Cervus davidianus*, M. Edw.

英に「デービッド、スタッグ」(David Stag) と稱する。佛人デービット氏 (David) が始めて



清帝の獵地たりし、南苑に於て發見したるものである。頭は鹿に似る。牡の角は、他の鹿とは異りて、非常に厚き基部よりして、長さ五寸位の眞直なる幹を出し、其尖端は二枝に分れる。その一枝は長く、且つ強健にして後方に向ひ、その表面には、直角に出でたる、數個の小枝を出し、これらの小枝は、互に相平行して居る。他の一枝は、即ち角の主なる枝にして、殆んも直角に出で、上方に向つて著しく彎曲し、その尖端は、叉狀になつて居る。脊は駱駝に類し、脚は牛の如しである。蹄は割合に小さく、蹄の後方には、廣き硬い座蒲團狀の部分ありて、主としてこの部を用ひて歩行し、

蹄は僅にその一小部分が、地に觸るゝのみである。尾は長さ一尺六寸余もあり、その先端は驢馬の如く總狀をなして居る。

〔一一〕 馴鹿 *Rangifer tarandus*, H. Sm.

英に「レインディア」(Reindeer)といひ、北米にては「カリボー」(Caribou)と稱する。歐羅巴亞細亞、亞米利加の極地に棲息し、我が千島、樺太にも棲む。體軀の大きさは、産地に因りて異れども、概して北極地方に近づく程、大いのである。而して體軀は重々しく造られ、頸は短く、四肢は強健にして、第二第五趾も、第三第四趾の如くに發達して地を踏み、趾端には、裂けたる廣い蹄を有し、氷雪上を跋涉するにも、よく體重を支へて、埋没することはない。

亞米利加産のものは、體軀は最も大きくして、よく成長せる牡にては、肩に於ける高さは、殆んど四尺五寸に達し、約四百ポンドの體重を有する。夏季には、毛色は概して暗褐色にして、頸、鼻、腹部、後肢は白いが、冬季に至れば、毛は波狀に捲縮して、色は淡くなりて、灰色を帯びて居る。

牝牡共に生れて數週間にして、角を生ずる。牡の角の大なるものは、四尺に達するものもある。且つ角は略圓錐形をなし、基部より出づる枝と、頂上に擴がれる枝とありて、

一大壯觀を呈するのである。然し牝の角は、牡のよりは小さく軽くして、枝が分岐し、且つ擴張することが少い。

馴鹿はノルウェーの北部、ラブランド、西比利亞、樺太等に於て、普通飼養せられて居る。その外イスタン、ラブラドル、アラスカに於ても、盛んに飼はれて居る。カムチアツカ、ラブランド、樺太等に於ては、馴鹿は土人の唯一の財産である。池田蘇庵氏の堪察加行に據れば、土人の之を飼養するものゝ多きは二千頭、少きも二十頭を下らずして、馴鹿飼養の多寡は、その貧富の程度を示すものである。而して野生の馴鹿は、多くは槍を以て、之を捕へるといふことである。

馴鹿は、その野生たると飼養するとを問はず、夏は森林より出で、丘陵地に向つて行き、秋は再び舊處に還るを常とする。夏季森林地を去る目的は、主として蚊群の來襲を避くる爲めである。冬季に於て、地面が一面に積雪を以て被はるゝ時には、角と蹄と吻端とを用ひて、雪下に埋没せる地衣類を發掘して、之を食ふのである。

馴鹿は、極地の住民に取つて、有用なる動物はない。先づ橈を曳かせて、盛んに使用せられて居る。即ち二百五十封度の積荷を載せて、一時間九哩から十哩位の割合を以て、十二時間若くはそれ以上も繼續して進むことが出来る。又たつた一人を載せた橈

では、二日に八百哩を旅行し得るものがあるといはれて居る。

馴鹿の皮は、敷物、衣服、寝具、靴、手袋、帽子、革箱、桶、船に製する。而して裸の儘の皮は、細く切りて、繩若くは、撚絲に製し、之をば釣絲、網、弓弦に製するのである。又皮は、屋根、壁等に使用する。國士第四拾五號(明治三十五年六月發行)に掲載せられたる、筑波篤司氏の、西比利亞探検談中には、次の如き一節がある。

中央西比利亞のクラスノヤールスタよりエニセイ河を下つた。即ち北緯六十六度半より、北極圏に下つた。サモイド人及びエスキモー種族が棲む。身の長けは、大抵四尺位である。彼等は馴鹿を飼ふ外、何もなさず。此地方は、何時にても氷つて居て、年中氷で埋められて居るが、そこへ穴を掘つて居る。即ち上部より四圍及び下部は、馴鹿の皮で張り詰めて仕舞ふ。尤も上等社會は、馴鹿の角と氷とを以つて、地上に四角の枠を造り、上の方は馴鹿の皮にて覆ひを拵へて、氷造りの中に棲む云々。馴鹿の肉は食用となり、その乳汁は飲料に供せらるゝのである。筑波篤司氏の探検談には、これに關して詳細なる説話がある。

『馴鹿を殺して皮を剥ぎ、肉は戸外に曝らして置く。すると、僅か三日か四日の間に於て、肉中の水分は蒸發する。元來北極圏内の地は、水蒸氣が少く、空氣が乾燥して居る

から直ぐ、から／＼に乾くのである。之を食べると、鹽氣があつて、丁度日本のしみ豆腐のやうな風味である。馴鹿の乳は、先づ一番始め數多き馴鹿より搾つて、澤山集める。それを馴鹿の皮で拵へた桶に入れる。三日か四日過ぎて、角で以つて攪き回すと、一番上に油が出る。それを小桶に入れると、それが日本でいふバターである。それから、之を二週間位家の中に置くと、上に白きものが見える。それを集めれば、甘酸の珍味を有する「スミタン」といふものが取れる。その次に、三週間許り打ち棄て置くと、段々酸酵して来る。之を桶の中に移し、屢々取り替へると、丁度焼酎のやうなものが出る。これが彼等の酒である。次に残りたるものを漉せば、糟が溜りて来る。それを捏ねて、外に干して置くと、麵麩めんこに似たやうなものが出る。これが彼等のパンである。それから、その跡に残つたものは、純粹の水になる。即ち一つの乳より、殆んど五通りものものが出来る』

極地の土人は、今日の如く金屬製器具の供給をば、文明國より輸入せざりし以前には、馴鹿の角を用ひて槍頭、釣鉤、匙、小刀、柄等に製造したのである。また若い角は、膠にかわを製するに用ひたのである。糞は乾して燃料に供する。

〔一一一〕 大鹿 *Alces machlis*



第百六十圖 大鹿

北部歐羅巴にては「エルク」(Elk)といひ、亞米利加にては「モーズ」(Moose)といはる。歐州及び亞細亞の北部、北米のラブラドル、アラスカに産する。スカンデナヴィヤ及び露西亞にては、大に其の數を減したれども、北米及び西比利亞には、今尙夥しく棲息する。アラスカ産のものは、體軀大にして、肩に於ける高さは、七尺に達し、體重千四百封度ポンドに達するものがある。牡は生れて九月にして角を生じ、年と共に枝を増し、それは五 目にて、充分なる大さとなる。角の枝は、短くして太く擴

り、大なる鋤状ををなし、左右より内方に向つて抱き合ひ、中央は稍凹状をなして居る。而して、一方の角の先端より、他方の角の先端に至る横距離は、六尺もある。而して角の大なるものは、重量七貫以上にも達するといはれて居る。

體には剛毛を生じ、色は暗色を帯びたる赤褐色、若くは帶黄灰色にして、冬季にては、下毛の数を増すのである。眼は小さく、耳は廣く、頸の下には、短き鬃を有し、牡ではこの部に、一囊を有する。口吻は大きく、上唇はよく發達して、前方に突出し、且つ自由に動くのである。さてこの獸は、頸が極めて短く、肥大せる爲めに、頭部を屈めて、地上の雜草を食することが困難である。そこで、多くは叢林に入りて、彼がよく發育せる上唇を用ひて、木葉嫩芽等をば、切り取るのである。

常に群をなすことなく、唯少數の家族より成る。性質極めて戒心深くして、些少の音響にても、尙よく彼等を逃走せしむるのである。四肢は長くして、馳すること最も迅速である。嘗つてスウーデンにて、飼養せるものに、橈を曳かせたることありしが、一日に二百哩以上を走つたといふことである。四肢の蹄は、馴鹿の蹄の如く大なるを以て、軟き土地、若くは雪の上を走るとも、決して陷没することはない。彼れは大なる角を有するが故に、林中を走るには不便なるが如く見ゆるも、實際は否らずして、角をば肩の後

方に仆して、走るが故に、敢へて樹枝に抵觸する憂なく、反つて風を順當に受けて、よく馳するを得るのである。この角は屈強なる武器にして、一撃の下に、狼をも倒すといふことである。

大鹿は、よく水中を游泳し、夏季には、全體をば水中に浸したる儘、頭丈けを水面上に出して、蠅類の刺螫を防ぐといふ。常に沼池附近の林地を徘徊する。牝は初産には一子を産み、以後は二子を産むといふことである。

大鹿の肉は、美味にして食用となり、毛皮は種々の用に供せられて居る。

[五] 麝香鹿科 (Moschidae)

體軀は細小にして、牝牡共に角を有しない。牝にては、上顎の犬齒は強く發達して、口外に突出する。又牡では、臍と生殖器との間に、一囊を有し、麝香を分泌する。尾は短く、鹿と異りて、眼の内眥に存する涙孔がない。

[一] 麝香鹿又獐 (Musk Deer) *Moschus moschiferus*, L.

ヒマラヤ山及び中央亞細亞に産し、山毛櫟、石楠、チズ等の如き、高山植物の生育せる地方に棲息する。肩に於ける高さは、僅に二尺で、體長は三尺有餘である。毛は長く、粗糙にして、色は灰褐色を普通とすれども、時には帶黄赤色のものがある。耳は大きく、四肢

は長く、殊に後肢は前肢よりも長い。蹄は側方にあるものがよく發達して爪状をなし、且つその部に附着せる筋肉の作用で、これが運動が自由自在なるを以、よく突出せる

岩角などを踏むに適するのである。されば岩石峨々たる峻峻地、棲むも、尚よく輕快敏捷に跳び駆けることが出来る。牡の腹部の後方に存する囊より、麝香を分泌する。冬季の蕃殖の際に於ては、特に強き香氣を放つのである。而して之を取り出して、乾燥せるものは、小なる鰻頭大であつて、香料として使用するのである。

〔二〕 チエブロテーン
(Chevrolain) *Tragulus*

英に又「ディアレット」(Dierlet) 又「マウス・ディア」(Mouse Deer) といはる。その概形と習性とは、全く鹿の如しであるが、牝牡共に角がない。而して上顎の犬齒は、小牙となりて發達



麝香鹿 圖七十百第

する。四肢には豚の如く四指(趾)を有する。又胃は三囊より成る。この類には、少くも六種ありて、その中五種は亞細亞に産し、一種は西部亞弗利加に産する。

〔一〕 印度チエブロテーン (Indian Chevrolain) *Tragulus memina*

英に又「カンチル」(Kanchil) といはる。「チエブロテーン」の中で、この種の毛色は褐色の地に、多少縦線状をなして、排列せる白の斑紋を有する。體の大きさは、僅に兎位に過ぎない。

〔二〕 マレイチエブロテーン (Malayan Chevrolain) *Tragulus javanicus*, Pall.

スンダ島に産する。牡には麝香を發する囊を有しないのである。

〔六〕 麒麟科 (Camelopardalidae)

頸は甚だ長い。前肢は長くして、後肢は非常に短い。それ故に、背面は後方に傾斜して居る。



圖八十百第 亞弗利加產チエブロテーン

〔一〕 麒麟 *Camelopardalis giraffa*, L.

陸棲動物の中で、最も丈け高いものは麒麟である。充分に成長せる牡では、高さ一丈八尺乃至二丈に達するものがある。而して牝は牡よりも少し低い。これ主として頸部の長さと四肢の長さに基く爲めである。その頸部の長きことは、動物中之に及ぶものがない位であるが、その頸椎



麒麟 圖九百萬

骨を數ふるときは、哺乳類一般の通性の如く、その數は七個である。唯その椎體は、甚だ長くして、横突起は短い。然かも前後に擴張して、一は椎骨の前端に向ひ、一はその後端に向つて二分するを以て、各頸椎はこれに因りて、恰も鑽にて穿つたやうになつて居る。而して頸は屈撓性がない。されば麒麟が水を飲み、若くは生草を食ふには、前肢の兩股をば、不器用に擴げて、體の重心を取りながら、頸を低下するのである。頸の背面には、短き薄い鬃がある。幼獸の頸は、親に比すれば

頗る短くして、前肢より長からざれども、漸々成長するに至れば、親の如く長くなるのである。

頭は長く、漸々尖り、頭上には、牝牡共に切株狀に見ゆる二本の短角を生ずる。この角は、鹿角の如くに前頭骨にのみ附着するにあらずして、其の一部分は、顛頂骨に附着する。而してその上をば、額の皮膚に因りて完全に被包せられ、その先端には、暗色の剛毛を生じて、その状恰も總の如くなつて居る。ヌビア産の麒麟にては、屢々、額の中央に、第三の角を存するものがある。

眼は大きく、圓く、暗色にして、顔の側面に著しく突出し、長い睫毛を生じて、如何にも優しい表情を示して居る。眼が斯く大きく突出せると、頭が前述の如く、地上遙かに高處にあるを以て、恰も望樓の如き有様であるから、廣濶なる範圍を見得らるゝ利益あるのみならず、頭を轉せずして、或る度合までは、よく後方をも見ることが出来るのである。

上唇は長くして、下唇を蔽ひ、且つよく動くのである。口腔は割合に小さく、齒は門齒、は、犬齒、は、臼齒、は、皆であつて、上顎には門齒も犬齒もない。舌は非常によく發達し、死せるものにて測りたるに、その長さ一尺四寸許もあつたものがある。而して大に彈

性に富み、屈伸自在にして、よく枝葉を把握することが出来るのみならず、その表面には無数に大なる乳頭突起を生せるを以て、よく食物を吟味し得るの利益がある。この動物の嗜好する食物は「アカシア」「ミモサ」の如き、豆科の喬木の嫩芽にして、之を舌の先に引き懸けて取るのである。鼻孔は、駱駝の如く開閉自在にして、砂塵一たび起れば、直ちに之を閉塞して、砂の侵入を防ぐのである。また耳殻は大にして、よく動き、諸方より、音響を聞き取り、以つて危害の近づくを知る利益がある。

胴は割合に短く、胸と臀との間は、唯七尺位である。脊は甚しく後方に傾斜するを以て、體の前部は後部より高いのである。四肢は脛部に於てよく發育し、第三趾と第四趾とは、地に着き、趾端には相互に分離する蹄を有する。尾は中庸の長さありて、その先端には黒き毛叢を有し、之を用ひて、蠅其他の昆蟲を掃ふに使用する。

麒麟は亞弗利加に産し、エシラピアより南はケープ殖民地の界に至るまで分布し、その毛色は、林地の幹の色とよく一致する。然しながら、六乃至二十疋の群をなして、森林附近の廣原に徘徊することを見ることがある。その性質極めて注意深くして、群には番兵を置きて警戒に任ずる。又視力と嗅覺とは、頗る鋭敏なるを以て、危難の時は、直ちに疾走する。然し平地に於ては、その速力はあまり迅速にあらずして、馬で追ひかけ

て二哩も進めば、之に追ひ付くことが出来る。然しながら、石礫多き所にては、之に追ひ付くことは困難である。走るときには、左右の肢を交互に進めることをなさずして、同時に同側の前後の二肢をば、前方に進めるから、歩く毎に、體は大に動揺する外に、長頸をば波形に動かすのである。屢々渴を醫さんが爲めに、水邊に來り、水を飲むとき、獅子の餌食となることが多い。然れども、一たび危急の場合に於て、到底その逃れ能はざるを見るや否や、敢へて獅子の如き強敵に向ひ、強力なる四肢の蹄にて、彼を打ち付け、時には獅子をして、逃走せしむることがあるといはれて居る。

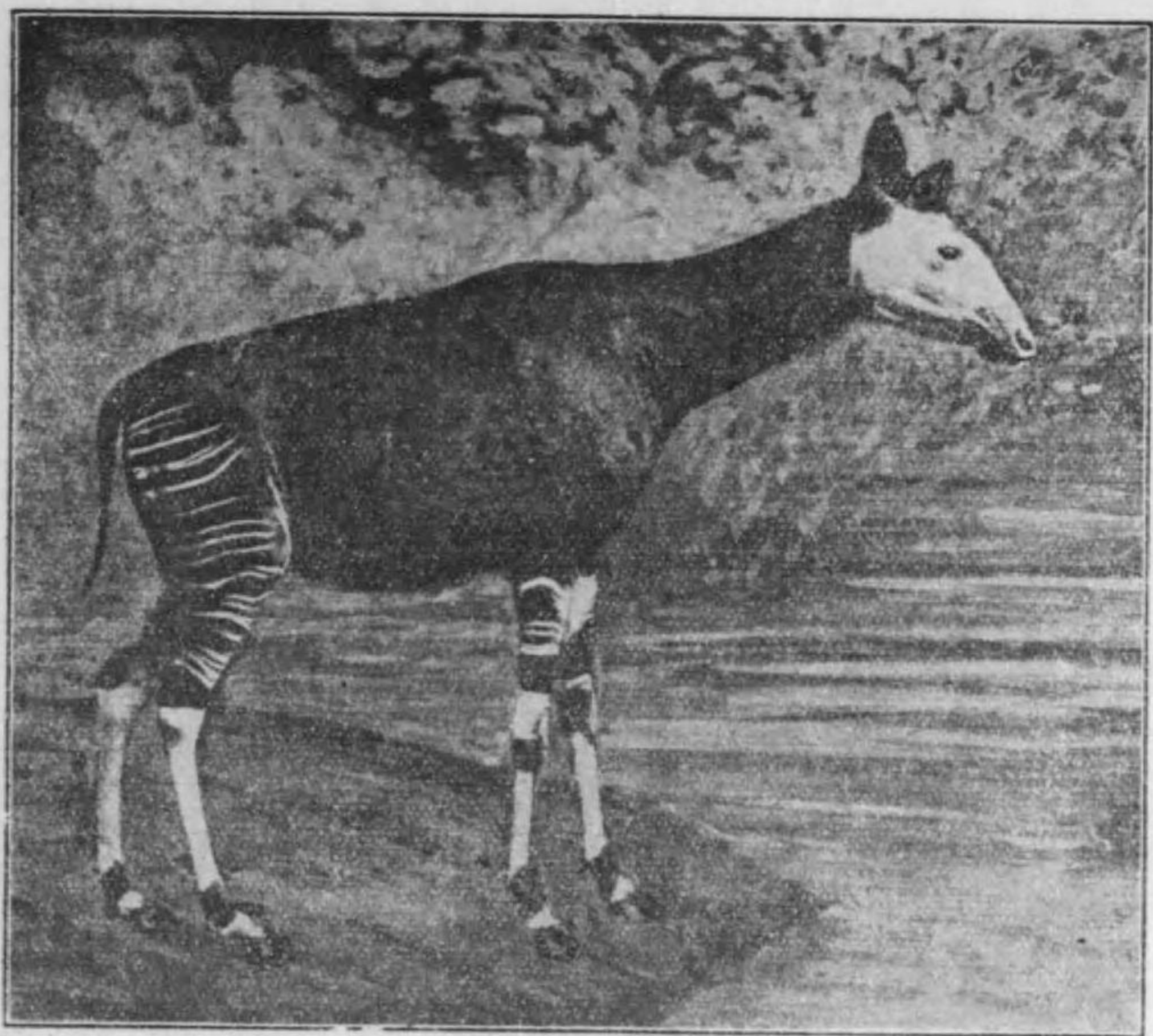
麒麟には、二種及び十變種を區別する人がある。その一種はケープ殖民地の界より、英領東部亞弗利加を通りてスガんに産する。而して他の一種なる北方種は、アビシニア及びニールの間の地方に産するのである。南方産のものは、短き密接せる毛を有し、毛色はクリーム色を帯びた黄褐色にして、それには暗黄褐色及び帶褐黑色の斑紋が、不規則に散布して、全體の觀は豹の毛皮に似て居る。而してスビア産の者は、毛色は一層赤味を帯びたる栗色の地に、黄褐色の斑紋列がある。麒麟の形貌は、羚羊カウチと、鹿と、牝牛と、駱駝と、駝馬とを混じて、優美に造り上げたやうなものである。牝は十五ヶ月間懷妊して子を産み、その數は毎回一子である。

麒麟の毛皮は、鞣して履を造り、股にある長腱は、亞刺比亞人に因りて毛皮を縫ふ絲

として用ひられ、又樂器の弦に使用せらるゝのである。その肢骨は鈿鈿、其他種々の製作品に供する。

(一) オカピ (Okapi) Okapi johnstoni

サ！エイチ・エム・スタンレー氏 (H. M. Stanley) は始めてセムリキ (Semliki) 森林に於て、ある未知の獸あることを報告したのであるが、氏自身は、之を見た譯でなくして、土人が捕へたことを聞いたのである。その姿は、幾分驢馬状をして居るといふたのである。それより十年を経てサ！ハリリー・ジョンストン氏 (Sir Harry Johnston) は、この獸を見て、之をば斑驢状の斑紋を有する「ミユール」として記載した。氏は非常に熱心に搜索したりしも、僅かに土人より皮を得たのみで、その當時は生きた標本を手にする事が出来なかつたのである。



第百二十圖

この獸の頭部は、麒麟状をなして、眼の直上には、二つの甚だ短く曲れる角があり、體軀は非常によく「ハートビースト」(Hartebeest) に髣髴して居る。四肢は細く、且つ恰好よく、蹄も恰好がよいのである。之に因つて見れば、この獸は、疑ひもなく速力の迅速なることが判然するのである。毛色は主に帶紫褐色にして、後肢と腿と前肢とには、横断せる條紋を有する。

[七] 駱駝科 (Camelidae)

四肢は長くして、第三と第四趾とは、發達して地を踏み、これには、小形なる蹄を有し、其後方には、座蒲團状の硬結部を有する。而して第二と第五趾とを缺いて居る。頭は小さく、頸は長く、體面の毛は、全身長きものと、體の或る部分に於てのみ、長きものがある。幼獸に於ては、兩顎には六枚宛の門齒を有すれども、成長したるものにては、内方にある二枚の門齒は、脱落したる後、再生することはない。犬齒は兩顎に二枚宛ありて、前臼齒は、幼獸にては、主なれども、成長せるものにては、上顎の第二と、下顎の第二第三

とは再生せざるを以てきとなる。而して後臼歯は第三囊である。胃は第三囊が、第四囊と分離して居ない。その性質溫柔にして、家畜として飼養せられて居る。

〔一〕 亞刺比亞駱駝 (True Arabian Camel) 又 單峰駱駝 (Dromedary) *Camelus dromedarius, L.*

頭は小さく、頭上には角がない。耳は小さく圓味を帯び、聴覚は耳の大きさに比して優つて居る。眼は長方形にして、水平の瞳孔を有し、且つ突出し、外觀は如何にも柔和に見ゆるのである。眼瞼は二重にして、砂塵の眼に入るを防ぐのである。鼻孔は斜に開在し、且つ自由に開閉し得るを以て、砂漠に於て、一たび猛烈なる砂塵の起ることあるも、忽ち之を閉ぢて、砂の鼻孔内に侵入するを防ぐのである。嗅覚は大に發達して、約一哩の處よりして、よく水源地の所在を嗅ぎ付けることが出来る。

上唇は分離し、且つ著るしく擴張し、物を以て、食物に觸れて、その性質如何を吟味するを得るのである。食物は主として灌木喬木の葉、及び乾燥せる草にして、一旦門齒と犬齒とにて咬み切り、然る後臼齒にて咀嚼するのである。門齒は圓錐狀をなし、且つ側面より著しく壓搾せらるゝを以て、稍犬齒に似たる觀がある。胃は三囊より成りて、重瓣胃は判然として居ない。且つまた瘤胃には、二列に小さき巾着狀をなせる水胞と

稱する囊が、二三十も着いて居る。その大なるものは、成長せる獸にて、擴げて測りたるに、幅と深さは、殆んど二寸五分もありて、狭口に因つて瘤胃に通じ、囊中には、水を貯

蓄する。而してその貯ふべき全水量は、三升一合乃至三升七八合に達するといふことである。斯く水胞を有することは、駱駝をば砂漠の旅行に使用し得る要件の一つにして、若し水が盡きて、愈々困阨するとき、亞刺比亞の隊商は、その伴へる駱駝を屠りて、水胞中にある水を飲むのである。

駱駝の頸は頗る長く、屈曲すれども、その頸椎骨は、他の哺乳類と同じく七箇である。肩に於ける高さは、約七尺にして、頭頂に至る高さは、九尺に達する。毛は寧ろ長くして、概して淡褐色を呈するが、時には殆んど黒いものも、又殆んど白いものもある。胸と膝には、皮膚の硬き胼胝ありて、地上に横はるときに、皮膚を傷害せぬやうになつて居る。尾は短く



駱駝亞刺比亞 圖 二八六

して垂下し、その先端には毛叢を有する。四肢は長くして、第三趾と第四趾とは發達して地を踏み、蹄は不完全なれども、蹄は厚く膨脹して褥状をなし、且つ弾力性に富み、以つて趾と趾とを連絡する。これあるが爲めに、埋没し易き砂漠の地を歩むも、よく重い體を支へて、砂中に埋没することがないのである。駱駝が「砂漠の舟」として貴重せらるゝは、一つはこの装置あるに因るのである。

單峯駱駝は、亞刺比亞を中心として、東方は印度に、西方は北亞弗利加の海岸に産する家畜で、背上には一個の肉峰を有する。この肉峰は、體内の脂肪分が堆積せるものにして、駱駝が長距離を旅行し若くは疲勞するときは、著るしくこの大きさを減すれども、食物を攝取するときは再び舊の大きさに恢復する。この肉峰は、人を載するとき、鞍の用をなし、荷物は通例脊の兩側に附着せしむるのである。

駱駝の速力は、一時間八哩乃至十哩である。而して休息することなくして、二十四時間の間、絶へず旅行を繼續することが出来る。又一日七十乃至八十哩の割合にて、約一週間旅行を繼續することが出来るのである。北部亞弗利加、シリア、印度に於ては駱駝を耕耘にも使用する。長毛は織物の材料となして、衣服或は寢具を造るに用ひ、皮は鞣皮となして諸種の用に供する。肉を食用とし、幼獸の肉は、その味犢牛の肉に似たり

といはる。乳汁も賞用され、又バター及び乾酪を製し、糞は燃料に供する。



駱駝アリトクバ 圖二百二十二

牝は毎産に一子を産み、一年間は子に哺乳する。子は生れて八日にして高さ三尺許に達し、十六歳乃至十七歳にあらざれば成熟しないのである。

(一) バクトリア
ア駱駝

(Bactrian Camel)

又雙峰駱駝

(Two-humped Camel)

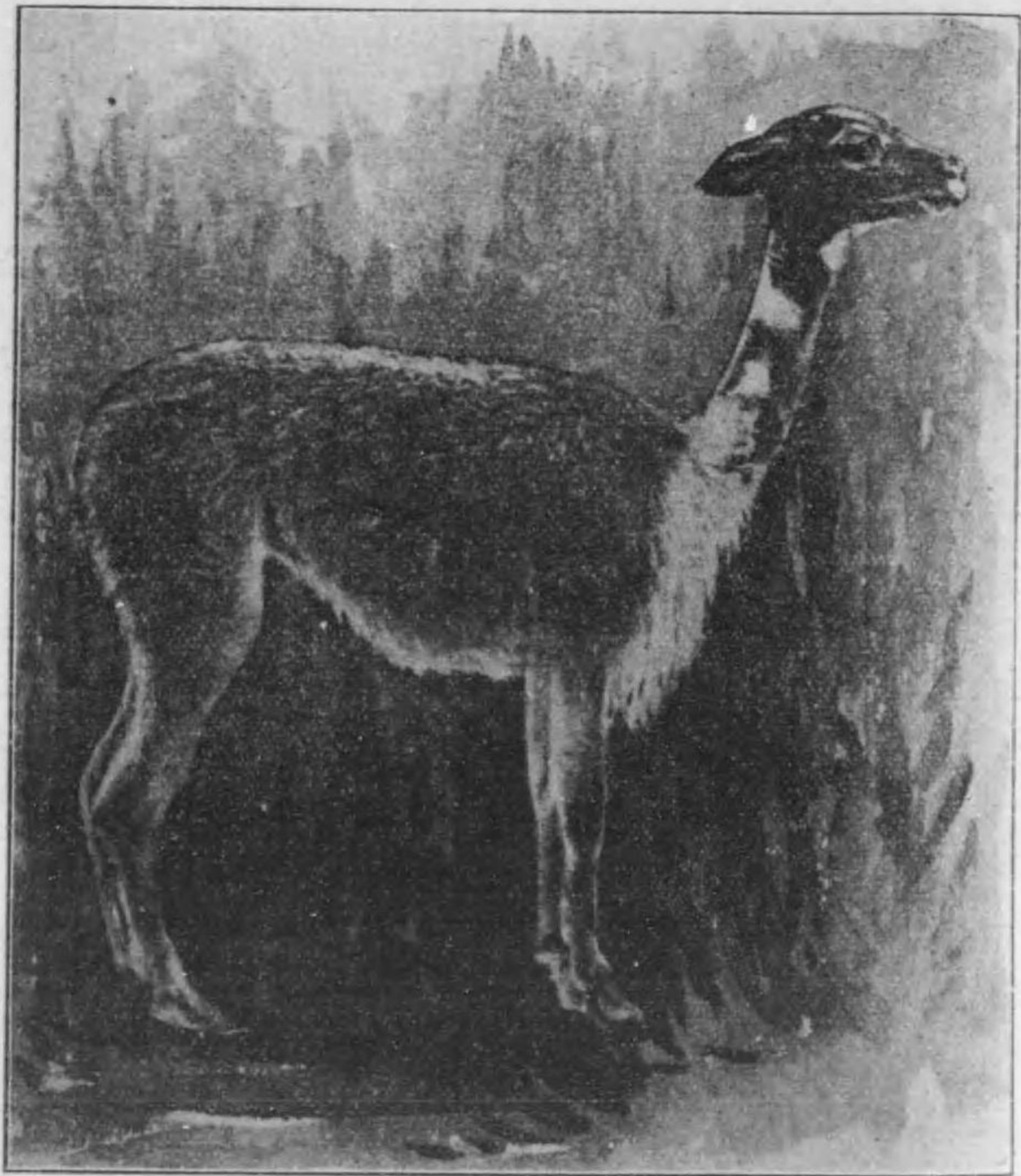
(Camelus Bactrianus, L.)

〔肉峰は二個を有し、體軀は前種よりも重々しく造られ、且つ丈けが高い。嘗つて東京駒場なる農科大学にて飼養せし牡は、その高さ凡そ七尺にして、體重は百九十貫餘もあつたといふことである。四肢は前種よりも短く、毛は前種よりも長い。中央亞細亞、支那、蒙古、滿州に産する。荷物の運搬用として盛んに使用せられて居つて、日露戰役には兩軍互に輜重用として、この種の駱駝を使用したのである。〕

〔三〕 亞米利加駱駝 *Auchenia glama, L.*

英に「ラマ」(Lama, Lama)といはる。體軀は駱駝よりも小さく、肉峰を有することなく、頭、耳、眼は割合に大きく、毛は甚だ柔軟にして、全體は長脚長頸を有する羊の如くに見ゆるのである。蹠の胼胝は、駱駝の如く發達しない。又二趾は連接せずして離れ、その蹄は鋭るごとく、且つ堅硬となりて、岩石地を踏むに適するやうになつて居る。この種に近似せるものは、他に三種ありて、皆南亞米利加のアンデス山脈地方に棲息するのである。

亞米利加駱駝の體の高さは、三尺乃至四尺にして、牝は牡よりも小さい。毛色は概して褐色若くは黒色にして、時には白色を帯びたるものもある。この獸は全く飼養せるものにして、俗に「南亞米利加駱駝」(South American Camel)と呼ばれて居る。アルヘンチナ



第百二十三圖 亞米利加駱駝

國のパンパス草原より、ペルー國のアンデス山地方及びボリヴィア國に産する。この獸は廣く運搬用に使用せられ、一日十哩若くは十二哩の割合にて、十二三貫匁の重さある荷物を運搬することが出来る。而して四五日間も、水を飲まずに、旅行を繼續することが出来る。昔西班牙人が殖民した時に、ポトシ銀山には、この獸をば三十萬頭も使用して、銀鑛をば、山地より海岸に運搬したものである。その性質群居を好み、柔順にして馴れ易い。その毛は粗糙なれども、また織物に使用することが出来る。幼獸の肉は

食ふべく、糞は燃料に供せらるゝのである。乳汁も亦食用となる。

二九二

〔四〕 羊駱駝 *Auchenia alpacos*, Gm.

英に「アルバカ」(Alpaca)といひ、又「ペルー」にては「パナ」(Paco)といはる。ペルーの南部、ボリヅイア等の山地、海面上八九千尺以上の高地に於て、半家養的に群居する。體は「ラマ」よりは小さく、胸と脚とには胼胝なく、外形は稍羊に類似する。頸、肩、脊、横腹、臀、尾の毛は甚だ長くして、絹狀の組織より成り、且つ金屬光澤を有せるを以て、毎年之を剪り取りて、毛布、肩掛、外套の裏地等の織物として賞用せらる。軟毛の色は、帶黃褐色又は黒色なるか、若くは灰色又は白色である。又荷物の運搬用としても使用せらるゝことがある。

〔五〕 グアナコ (*Guanaco*) 又「ヒユアナコ」(*Huanaco*)

Auchenia huanaco, H. Sm.

前記二種の先祖であつて、エクアドルよりケープ、ホルンに至るアンデス地方を通して群居する。戒心深き野生の獸にして、頸より軀幹全體は、長い柔毛で被はれ、腹面と四肢との毛は短い。毛色は濁りたる赤褐色で、胸、腹、四肢の内面は白く、額と脊とは黒味を帯び、後肢には黒い長圓形の斑紋を有する。肉は美味なるを以て、これが爲めに絶えず狩獵せられ、又「コンドル」(Condor)の爲めにも、少からず屠殺せらるゝのである。

〔六〕 ビクナ (*Vicuña*) *Auchenia vicugna*, Gm.

「ラマ」類中では最も小形なる獸であつて、大きさは「ラマ」と「アルバカ」の中間位である。主としてペルー及び其附近の地方に野生する。而してその習性は、非常によく「カモイス」に似て居る。毛は短いが、柔軟且つ絹狀にして縮れ、頸の背部より胴までは赤黄色で、頸の下面及び四肢の内側は赭色であるが、胸毛は長く、色は白く、腹毛も亦白い。この毛と、その美味なる肉を得んが爲めに、狩獵せらるゝのである。「グアナコ」と同じく、一疋の老牡は、多くの牝を伴ひて群居し、雨季には雪線近く棲めども、乾燥季には低い谷に降りて來るのである。

第二類 不反芻類又雜食類 (Non-ruminantia) 又 (Omnivora)

食物は、植物質及び動物質より成り、齒には犬齒を有し、胃は單一にして、食物を反芻しない。第二乃至第五指(趾)は、概ねよく發達する。皮膚には毛を生せざるか、或は粗毛を生ずる。

〔1〕 野猪科 (*Suidae*)

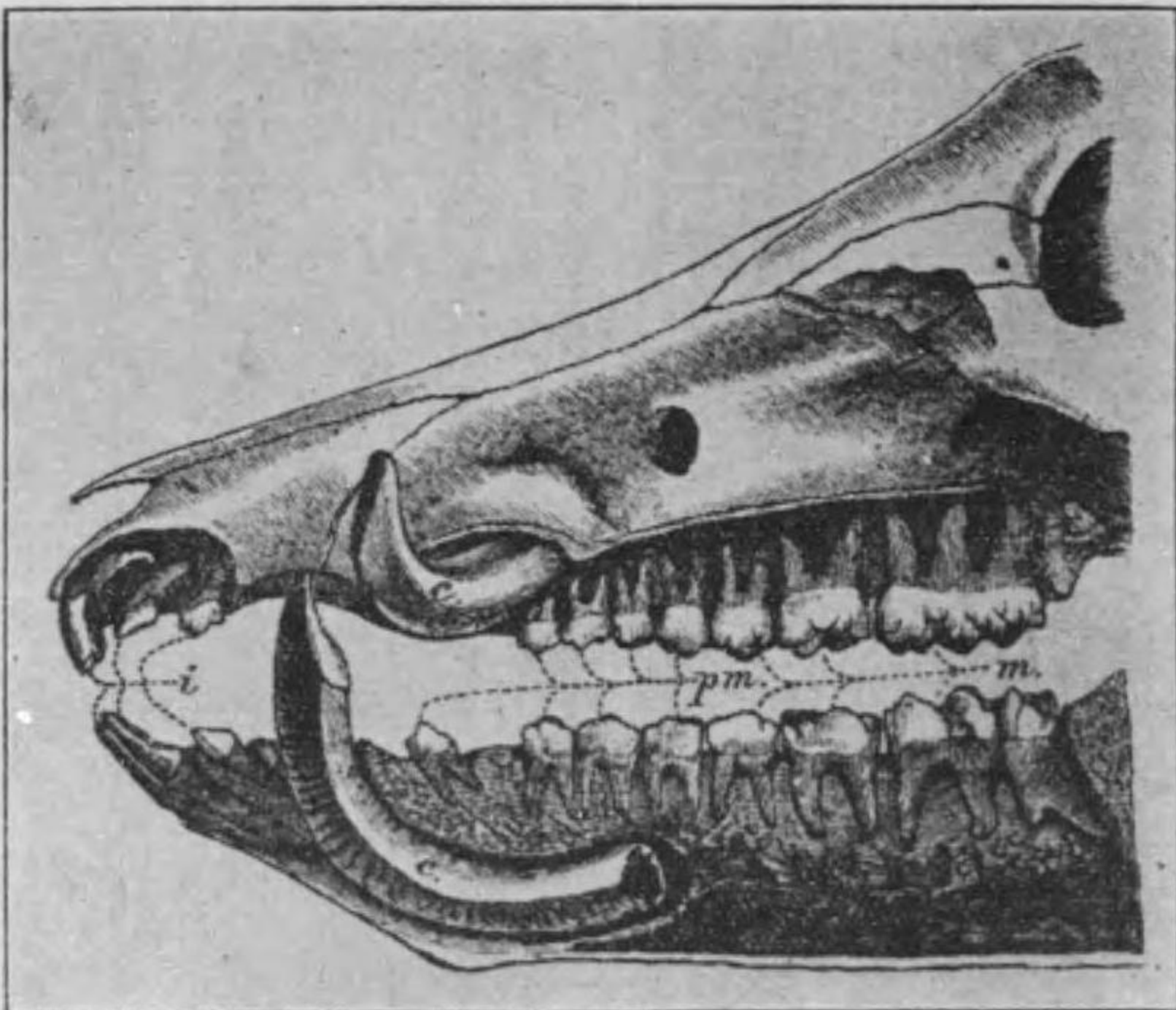
體軀は重々しく、短大にして、頸は極めて短い。體には剛毛を生じ、鼻端は長く伸長し、

て吻となり、これにて地を掘るに用ゆる。又その端には鼻孔を開く。耳は大きく、ピラ／＼として居る。齒式は完全にして、普通の猪では i_1, p_4, m_3, c_1, i_1 である。而して犬齒は牡にありては、甚だ強大なることがある。臼齒の咀嚼面には、半月状の褶襞を有しない。四肢にある第三第四趾は地を踏めども、第二第五趾は小形である。而して四肢の骨格中、腕前骨と跗前骨は各相癒着して一片となることなく、全く分離せる骨片より成つて居る。この類は歐羅巴亞細亞及び亞弗利加の北部に産する。

〔一〕 野猪 *Sus leuconystax*, Temm.

本州四國九州に産すれども、北海道には産せない。體軀は肥大にして、頭は割合に小さく、耳も小形にして、頸部は判然しない。されば急に方向を變ずること能はずして、常に一直線に突進する。全身には黒褐色の粗毛を生じ、四肢は短く、尾は稍太くして、毛を叢生する。大なるものは、體重二十余貫に達するものがある。琉球産の猪は、内地産のものに比して、四肢長く、頸部は幾分か判然し、耳は内地産のものに比して、稍大きく、頭の長さも、軀幹に比して甚だ長い。また尾は細小にして、毛を叢生しない。而して體重は内地産のものよりは、遙かに少いのである。齒式は野猪科の通性に於て、述べた通りであるが、上顎の門齒は第一齒より第三齒に至るに従ひ、急にその大きさを減少し、下顎の門

齒は、細長にして密接し、殆んど水平の位置に位する。而してその先端は、稍中央線の方に傾いて居る。また第三の門齒は甚だ小形である。犬齒はよく發達し、その上顎にあるものは、強く外上方に屈曲し、その先端は



第百二十四圖 歐州野猪 (*Sus Scrofa*) の齒を示す
(齒白) m (齒白前) pm (齒犬) c (齒門) i
(After Flower and Lydekker)

少しく内方に曲つて居る。而して下顎にある犬齒は、上外方に向ひ、且つ幾分か後方に彎曲して、その後縁は、上顎の犬齒の前縁と相觸れて、摩擦するやうになつて居る。この牙は、猪にとつては、食物を得るに必要な器官であつて、又攻撃若くは防禦に使用するのである。

日中は灌木叢生せる日當りよき窪地にて、睡眠を貪り、夜間出で、徘徊し、吻端を以つて、地を掘り起し、蚯蚓を探り、松蕈、稻、芋、大豆、小豆等の作物を、害する。また檜、樅、椎、山毛櫸、栗等の果實を食ひ、有益鳥の巢を破りて、雛を奪ひ、又野鼠兎等の幼兒を捕殺する。又溪流に出で、石を掘りて、蟹を探

り、松樹の根を掘起し、潤葉樹の皮をも食ふのである。彼の羊の如きは、全く草食するを以て、腸は體長に比して、凡そ二十八倍もあれども、猪では以上述べたる如く、雜食するを以て、腸の長さは體長に比して、僅に三倍に過ぎないのである。幼獸は群居するを好み、老ひたるものは、單獨に暮らし、交尾の期に至れば、牡間に烈しき争闘がある。而して牝は四五月頃子を産み、若齡のものでは、一産に四疋乃至六疋を産めども、體格壯健のものは、十疋以上を産むのである。子は一年半位にして成熟し、その生存期は二十歳乃至三十歳である。

野猪の肉は、古來山鯨と稱へられ、固有の風味を有し、豚肉よりは脂肪質少く、且つ蛋白質に富み、頗る美味である。又背部にある太き毛は、刷子、筆等として使用せらるゝのである。

(11) 豚 (Pig)

豚の牡をば、英に「ボア」(Boar)といひ、牝を「ソウ」(Sow)といひ、成長せるものをば、總稱して「ホッグ」(Hog)といふのである。豚は頗る古代より飼養せられたる家畜にして、支那にては、今より四千八百年前に、埃及にては三千五百年前に、既に之を飼育したといはれて居る。されど、豚が本邦に傳はりたるは、近世のことにして、大約二三百年前始め

て、琉球に輸入せられ、それより大隅、薩摩等に傳はりしは、今より百年前のことにして、漸く本邦の諸處に傳搬したるは、維新前のことであつて、その流行を來たせしは、全く維新後である。

豚の品種は、之を大別して亞細亞種と、歐羅巴種との二つにする。

甲 亞細亞種

この種は、瓜哇、スマトラ等に産する野猪の一種 (*Sus vittatus*, Mill. Sch.) より馴養したる變種にして、支那及び本邦の豚もこれに屬する。

(一) 支那種

この種は、支那にて盛んに飼養せられる。頭は短小にして、額は直立し、鼻は短く、且つ廣い。耳は狭小にして、よく動き、頸は短く肥り、體軀は圓くして長い。背は眞直にして、少しく凹み、四肢は短小にして、尾は少しく捲縮する。體面には、僅に粗毛を被り、毛色は主に黒色なれども、稀に黄色若くは黄色味が掛つたものがある。早熟速肥を以つて有名にして、生後六ヶ月乃至八ヶ月に至れば成熟し、體重は二十八貫乃至三十四貫に達する。この種は英國種豚の改良に採用せられたるが、その缺點は、受胎力の強からざるに存するのである。

(二) 谷頭種

この種は、神奈川縣谷頭村の原産にして、皮膚は赤色を帯び、白色の粗毛を生ずる。その性質温和にして肥満し易く、生後一ケ年を経れば、二三十貫となり、中には八十貫以上のものである。然しながら、腹部大にして、臟腑及び骨多く、且つ、肉量は割合に少い。千葉縣下にて多く飼養するものである。

(三) 琉球種

日本在來種を島豚といひ、支那より輸入せるものを唐豚といふ。唐豚は體長く、丈け高くして黒色である。

乙 歐羅巴種

この種は中央歐洲、中央亞細亞、小亞細亞、北亞弗利加に産する歐洲野猪 (*Sus scrofa*, L. = *Sus europaeus*, Pall.) より淘汰改良したるものである。左に主要なる一二種を擧ぐ。

(一) バークシャー種 (Berkshire Pig)

英國バークシャーの原産にして、毛色は黒色又は赤褐色にして、毛は捲縮して居る。中形の豚中の最優等種にして、最も廣く世界に傳播する。頭は小さく、頬は廣く、耳は尖る。生後十ヶ月乃至十五ヶ月位にして、二十四貫乃至三十六貫に至るものがある。

(二) 小形ヨークシャー種

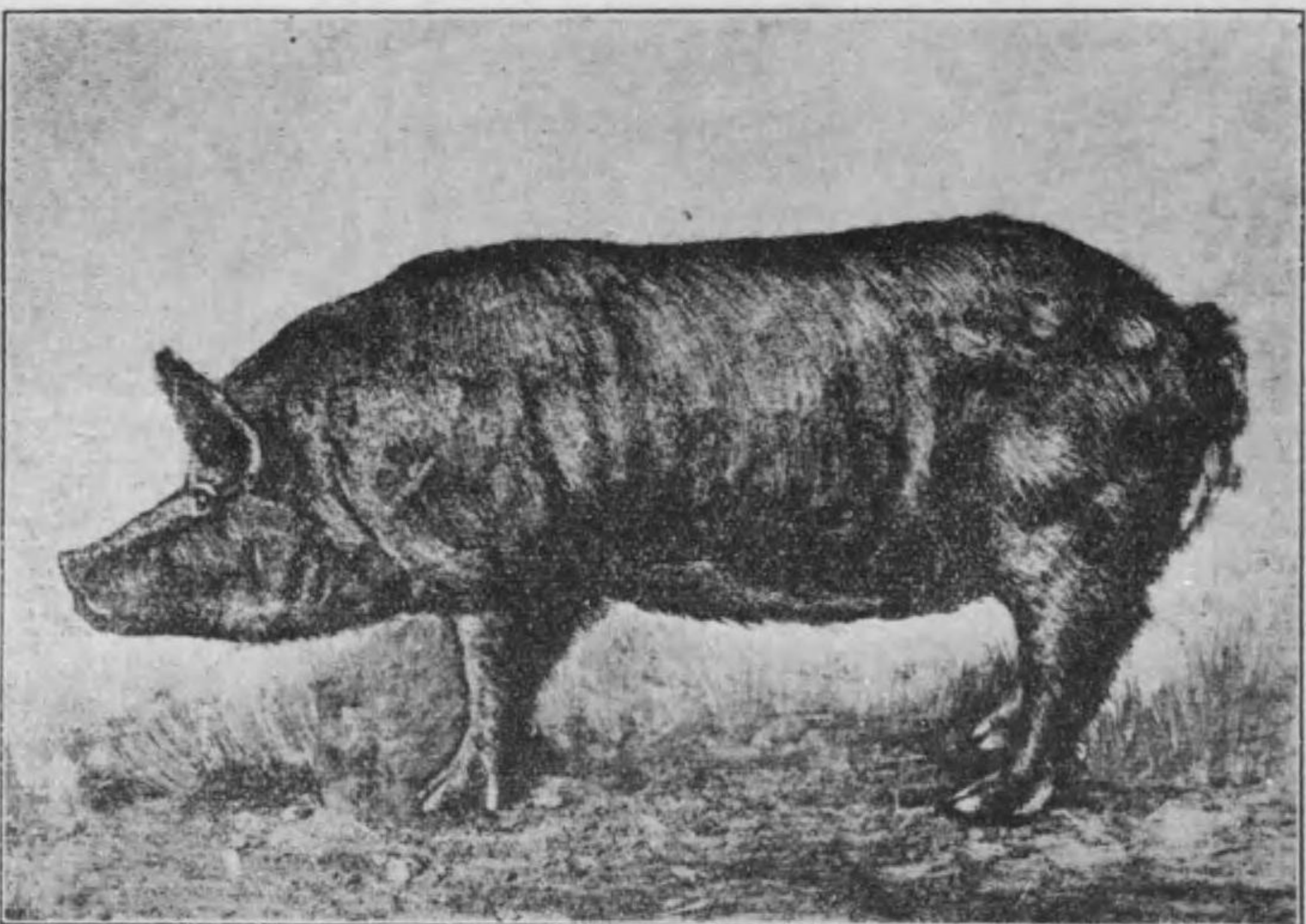
(Small Yorkshire Pig)

この種は、彼の有名なる英國短角牛の改良家チャールズ・コーリング氏の改良創成せしものにして、純白色にして、軀幹長方形をなし、頭は短く、口は廣くして、鼻骨は短縮する。脚は短く、胸は廣い。早熟にしてよく肥満し、生後八ヶ月乃至十ヶ月にて、市場に賣り出すに適する程、肥満するのである。

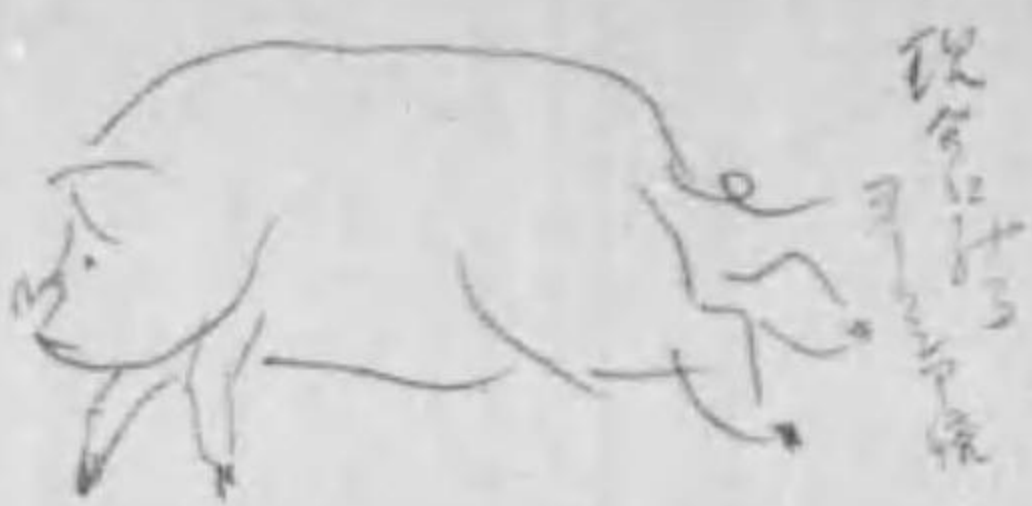
(三) ポーランド・チャイナ種

(Poland China Pig)

米國オハイオ州に於て、その在來種と、支那種と、バークシャー種との雜種より作りたるものである。頭は尖り、大なら



種ヤシクーバ 圖五十二百第



ずして稍凹む。耳は小さく、少しく垂下する。喉肉は大に發達し、頸は肥大し、肩も廣く、尾は捲縮する。毛色は黒くして、額、肢端、尾端のみは白い。脚は短小なれども強健である。體はよく肥満し易く、燻製製造に適するのである。

(四) チエスタド、ホワイト種 (Chester-White Pig)

ポーランド、チャイナ種とバークシャー種との混合種より作り出せるものである。頭は小さく、鼻は尖り、頬は發達して廣く、耳と首とは少しく垂れて居る。體軀は大にして四肢は小さい。蕃殖力は非常に強大にして、一産に八乃至十五匹を分娩するのである。

猪これより豚の外部形態を述べん。頭は大きく圓錐形をなして多少伸長し、鼻は筒狀に突出し、その先端は擴張して切斷せられたるが如く見ゆる。之を動かして土を堀るに使用すること、野猪と異なる所はない。眼は小さくして斜に着き、耳の位置は稍高く、その形狀及び方向は品種に因りて異り、或は直立するものあり、或は垂下するものもある。且つ耳は自在に動かすことが出来る。口腔は大きく、その齒列と齒の形狀とは、野猪と異なる所はない。野猪と同じく雜食し、且つ如何なる廢棄物をも、好んで食するを以て

農家の副業として、飼養するに容易なのである。胃腸の消化力は、極めて鋭敏にして、攝取したる食物は、容易に養分に變成せられ、この養分は又筋肉及び脂肪に變化する力甚だ強きを以て、忽ち肥満するを得るのである。體軀は肥満して、脂肪に富み、その形は圓筒狀をなし、四肢は短く、前後肢共に地を踏むべき二蹄を有する。

豚は品種に因りて、その成熟期に遅速あれども、凡そ七八ヶ月を経れば、蕃殖用に供することが出来る。一牡は凡そ十五頭内外の牝に配せしむるを得るのである。牝は通常十六週間懷胎し、年に二回分娩し、毎回八乃至十四五頭を産むのである。

豚の肉は、脂肪に富み、本邦産のもの、肉は、百分中二八、一の含有量があるが、中には百分の五〇以上に及ぶものがある。脂肪は豚脂を製して、食料及び藥料となし、又ステアリン蠟燭、石鹼を製する。生肉は種々の調理法がある。即ち之を煮、或は炙りて食ひ、或は鹽藏する。又脚及び腿の肉は、燻烟して燻腿となし、又腸に肉を詰めて、所謂腸詰として食用に供するのである。皮は鞣して馬具、革囊等種々の器具を製し、剛毛は刷毛となし、膀胱は水囊として使用するのである。

(11) 疣猪 (Wart Hog) *Phacochaerus aethiopicus*, Cuv.

ケープ殖民地より、アビシニアに至る東部亞弗利加に産し、幾多の變種がある。頭は

甚だ大きく、鼻端は長く廣く、且つ扁平であつて、眼は細い、頬の兩側には、大なる疣狀の肉の突起を垂下し、牙は時としては、長さ二尺以上に達するものがある。これで一打撃を與ふれば、犬の體をば二つに切斷するし、又人の腿肉をば、裂くほどである。一般の色は黒褐色にして、前肢には長い剛毛を有し、體の他の部分は殆んど裸である。

〔四〕 バビルサ (Babirusa) *Porcus babirusa*, L.

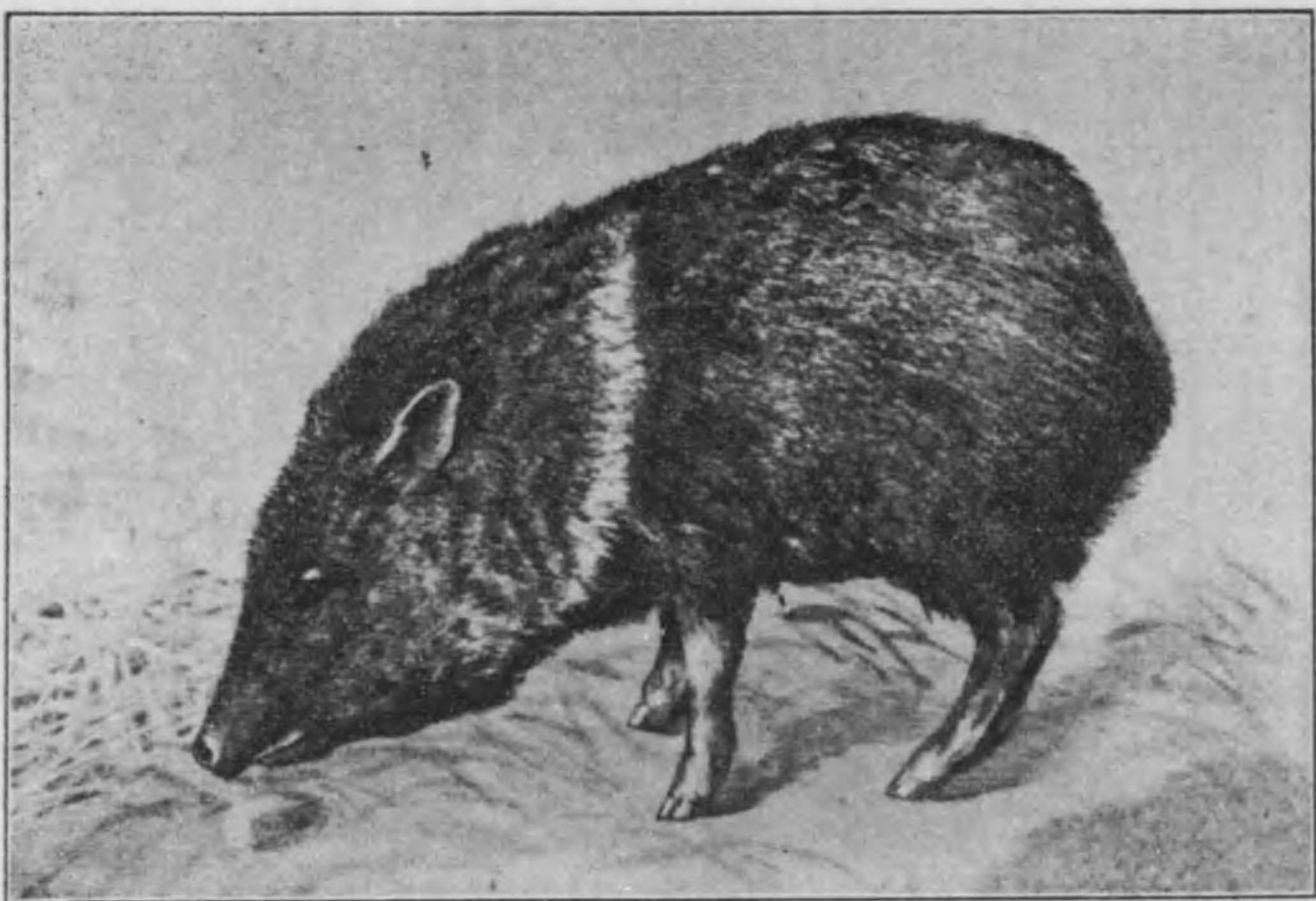
「バビルサ」なる名はマレイ語の「ババ」(Baba) (豚)、「バサ」(Basa) (鹿)の意より出でたのである。蓋しその形貌は豚狀をなし、牙が角狀に突出せることは、鹿に似て居る爲めであらう。マレイ群島に産する體には剛毛を疎生し、毛色は鈍い灰色である。牡にては犬齒は大に發育し、その上顎にあるものは、上唇にある穴を通りて、外部に突出し、その先端は上方に彎曲して、額の皮膚に觸るゝ位である。また下顎にある牙も、外部に突出するを以つて、牙は合計四本を有するのである。上顎の牙は、全く武器として使用すること能はざれども、下顎より出でたる牙は短く、これにて敵を防ぐのである。而して牝には牙はない。

常に群をなして棲息し、玉蜀黍の畑に出て、少からざる損害を與ふるのである。爲めに土人に因りて狩られ、その肉を食用として用ひられて居る。この獸は、よく水を泳

ぎ、時には狭い海峡を泳ぎて、島より島に行き渡るといふことである。

〔五〕 ペツカリー (Peccary) *Dicotyles*

亞米利加に産する獸にして、その外形と齒の模様とは、頗る豚に似たれども、又これと著しく異なる所がある。犬齒は上方に突出することなくして、下方に向く。また尾がない。後肢には四趾を有せずして、唯三趾のみを有する。胃はその構造複雑となりて、余程よく反芻類の胃に似た所がある。又脊の中央に於て、皮膚下に開く所の一腺を有し、これより惡臭を有する油質を分泌する。されば、屠殺したる後、この腺を除去せざれば、肉は食ふに堪へないといふことである。これには次の如き種類がある。



第百二十六圖 頭條ベツカリ

〔一〕 頸條ベツカリ (Collared Pecary) *Dicotyles torquatus*, Cuv.

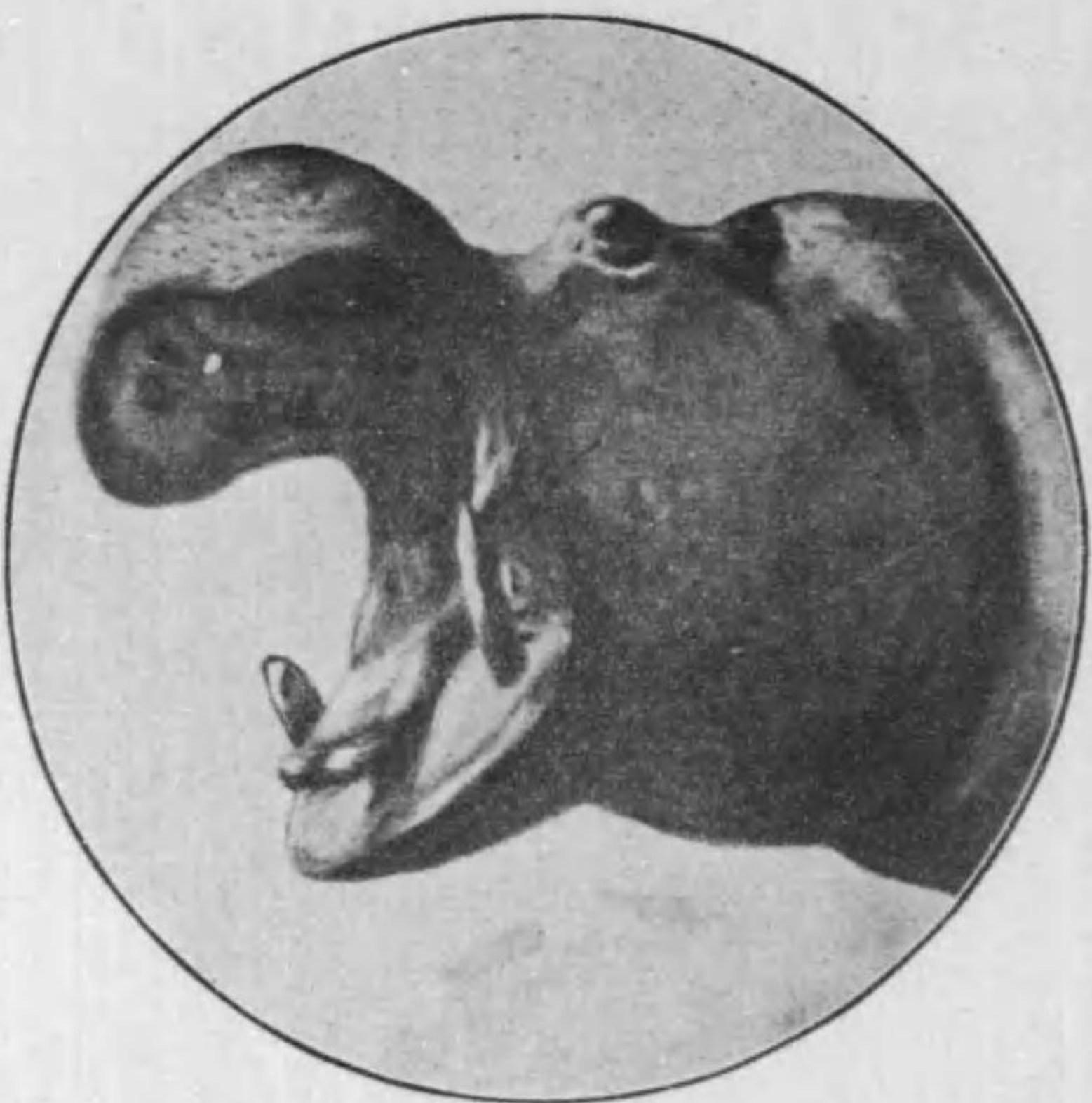
南はバタゴニアより北はアーカンソウ及びテクサスに至る地方に産する。肩に於ける高さは、一尺三寸四分に超ゆることなく、體には剛毛を生じ、毛色は帶黒褐色にして、横腹には帶黄褐色及び白色部を有する。また頸の周圍には、帶黄色の條紋を有する。この種の食物は、果實、穀粒、根、爬蟲類、小鳥及びその卵より成り、雜食である。

〔二〕 白唇ベツカリ (White-lipped Pecary) *Dicotyles labiatus*, Cuv.

この種は、前種よりも幾分か大きく、肩に於ける高さは、一尺五寸許に達する。その分布は左程廣からずして、英領ホンデウラスより、パラグアイに擴がる。性質は兇暴にして、群をなして敵を攻撃するときは、獵師と雖も、一旦樹上に匿れて、彼等の包圍を避くる位であるし、また「ジャグアー」や「ベューマ」も、この群の攻撃に對しては、恐怖して遁去するさうである。その食物は、主に植物質であつて、耕地を害することが多いのである。

〔三〕 河馬科 (Hippopotamidae)

河馬は英に「ヒツポボタムス」(*Hippopotamus*) 又は「リバー・ホールズ」(*River Horse*) と稱する。體軀の重大なることは、象に次ぐのである。亞弗利加のハルツーム及びリンボボ河の上流間に位する地方の、湖沼河川に往來する。頭は巨大なれども、耳は小さく直立



河馬の頭 圖七十二百第 (From New Illustrated Natural History of the World)

し、自由に動かし、よく音響を集めることが出来る。眼は頭部に高く着き、膨れ出して居る。且つ鼻孔も高く、眼と同一線上に位するを以て、水中に沈入する際に、眼と鼻とを水面上に出して、敵を注意し、及び呼吸を營むことが出来る。鼻端は短く、且つ甚だ幅廣くして、圓く膨大し、これには針狀の剛毛を生ずる。上唇は厚く、且つ大きい、口腔は廣濶にして、齒式は $\frac{13}{13}, \frac{0}{0}, \frac{P.4, m.3}{P.4, m.3}, \frac{4}{4}$ である。犬齒は後方に屈曲し、その長さは、屢々約三尺三四寸に達するものがあるが、平均の長さは、約二尺五寸位である。上顎の門齒は、下方に屈曲すれども、下顎の門齒は、殆んど水平に横はりて、その先端は、前方に突出する。齒の如此構成を有するが爲めに、恰も剪斷機の如く作用して、水生植物、蘆葦、其他の草本をば、切り裂くに適するものである。而してこれらの齒をば、武器として攻撃用に使用するは、唯負傷せるか、若

くは忿怒する場合に於てのみである。而して斯かる場合に於て、一噛み付きで、土人の獨木舟を破砕したり、又は人をば兩斷したこともある。一時は、この大なる犬齒をば、義齒の製造に盛んに用ひたことがある。而して大なる牙は、重量五封度乃至八封度もある。門齒は其狀鏹狀をなして長く、犬齒と同じく齒根を有せずして、絶へず成長する性質がある。胃は頗る大きく、この中には、一石乃至一石二斗位の食量を入るゝことが出来る。

牡の皮膚は粗糙にして疣狀を呈し、且つ強韌であつて、色は石版色を帯びたる銅褐色であるが、牝では、それよりも淡いのである。背部に於ける厚さは、實に一寸三分もあるから、動物全體より皮膚を剝いて、その新鮮なるものゝ重量を測れば、實に六十七貫七百四十匁といふ驚くべき重さがある。顔面、吻端頭の兩側、尾端には、僅少なる剛毛を生ずれども、その他の部分は、殆んど裸出する。四肢は短く、爲めに肩に於ける高さは、四尺乃至五尺を超ゆるものはない。而して體長は一丈二尺乃至一丈四尺であるが、充分に肥大せる獸では、四噸の體重を有するものがある。四肢共に四趾を有し、趾端には小蹄を有する。

河馬は常に河流、湖水に二三十頭宛群居する。時には河流の二三哩の間に、幾百疋の



馬 河 圖八十二百第

群居を見ることがある。晝間は水中に潜没して游戲し、夜間出で、陸上を徘徊し、時には耕地を踏み荒らすことがある。その體軀は巨大なれども、概して危険はない。然しながら、一たび危難に遭遇して、忿怒するときは、烈しく敵對し來るのである。

河馬の肉は、暗赤色をなし、食用となすべく、殊に脂肉は、土人が鹹藏して賞味する所である。皮は、鞭その他の製造品に使用するし、犬齒は今尙商品として販賣せられて居る。

河馬には次の二種を區別する。

(一) ニール河馬 Hippopotamus amphibius, L.

亞弗利加大部の河湖に分布する種類で、上下兩顎には、各側二本宛の門齒を有し、體形は甚だ大きくある。

(二) リベリア河馬又矮小河馬 (Pigmy Hippopotamus) Hippopotamus Iberiensis, Mort.

西部亞弗利加に産し、その分布區域は狹少である。體軀は甚だ小さく、一般に下顎の門齒は、各側に一個宛あるのみである。

第三亞目 爪蹄類 (Lamangia 又

Lamangia)

〔一〕 蹄兔科 (Hyracidae)

齒式は $I_2, C_0, P_4, M_3 = 34$ である。この科には次の如き種類がある。

〔一〕 蹄兔 (Hyrax capensis, Schreb.)

英に「ロック、バッチャー」(Rock Badger) 又「ロック、ラビット」(Rock Rabbit) 又「デーマン」(Daman) 又「ダッシー」(Dassy) といひ、殖民人は「クリップ、ダグ」(Klip Dag) (岩兔の義) といふ。亞弗利加及びシリアに産する。この科の中で、最大なるものにして、體長は一尺五寸に達する。この敵には、獅子、鬚狗、其他の食肉鳥類あるを以て、常に群



第百二十九圖 蹄兔

居して、岩石の間に隱伏し、その性質臆病にして、且つ戒心深いのである。されば、その穴を出で、食物を索むる間にも、通例老ひたる牡をば、番兵として、警戒の任に當らしむるのである。而して危険が近づくときは、番兵は頻りに金切聲を發して、急を全隊に傳ふるのである。その性よく人に馴るゝといはれて居る。

〔一〕 シリア蹄兔 (Syrian Hyrax) Hyrax syriacus, Schreb.

アビシニアより亞刺比亞、シリア及びバレスチナに産する。舊約聖書にある「コーニー」(Coney) 及び聖書中の「シャファン」(Shaphan) は、この種を指したものと云はれて居る。體の高さは九寸余、體長は約一尺位ある。毛色は脊部は帶灰褐色で、横腹は黄褐色で、體下は白色である。常に岩石間の裂罅や、穴中に棲息し、その性質活潑にして、穴より敏捷に突進する。時には穴の入口にある大石上に多數群居して、日光に浴することがある。常に芽、雜草及び花を食ひ、柔順にしてよく人に馴れる。

第五目 長鼻類 (Proboscidea)

體軀は陸棲動物中の巨大なるものであつて、皮膚は厚く、且つ皺襞を有し、これには僅少の毛を粗生するに過ぎない。門齒は下顎になくして、上顎の兩側に於てのみ二本宛ある。而して上顎の二門齒は、常に發達して大なる牙となりて、口外へ突出するが、齒

根なくして、象が生きて居る間は、絶へず成長する。而して珫瑯質は、僅かにその尖端にのみ存し、後には、この部も磨滅するのである。而して象牙として珍重せらるゝ部分は、齒質より成るのである。象牙はその質緻密にして、美麗なる紋斑を有し、光澤美しきを以つて、最良の彫刻材となり、また櫛、小箱類、小刀の柄、置物、其の他各種の裝飾品に製せらる。印度象にありては、唯牡のみ牙が發育し居て、牝の牙は殆んど無い位小さいが、時には牡にても、同様に牙の發達せざるものもある。然し亞弗利加象にては、牡牝共に牙を有し、殊に牡にては牙は大きく、且つ重々しく發達して居る。印度象の牙一個の重量は、七十六封度^{ポンド}が最大限であるが、亞弗利加象では、右側の牙が長^{フット}十呎と四分の三吋、基部の周圍二十三吋、重量二百二十四封度^{ポンド}であつて、左側の牙が、長さ十呎三吋半、基部の周圍二十四吋半、重量二百三十九封度^{ポンド}といふ大きなものがある。

犬齒は全く無く、臼齒は扁平なる幅廣き一組の齒より成るが、珫瑯質で圍まれたる齒質の板が、若干個縦に並列して、之をば更らに白堊質で包みて、一大塊に結合して居る。この齒質板の数は、亞弗利加象では、その最大の臼齒に、十乃至十一、印度象では、二十七枚に達して居る。印度象と亞弗利加象とは、その食物の撰擇を異にするを以つて、前者の臼齒の咀嚼面にある齒質板は、狭い橢圓形の凸凹の一行となつて居るが、後者に



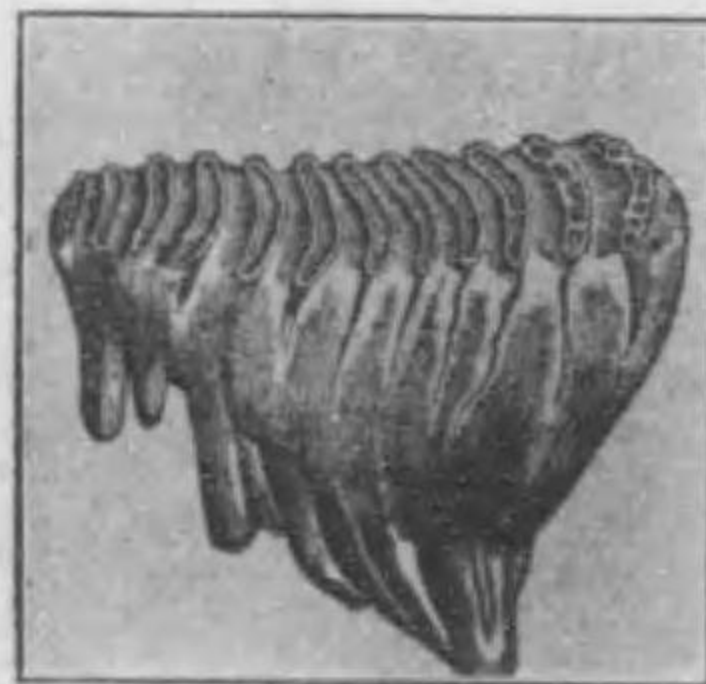
圖十三百々 亞弗利加象の顎上の臼齒の咀嚼面
(After Owen) (質齒)d (質瑯瑯)e (質堊白)e

於ては、菱形を呈して居る。而して、舊い臼齒が磨滅するとき、他の臼齒が、之に代りて生へ出で、一生涯中に、六回脱換するのである。故に生後二週間位にして、始めて出來たる臼齒より、最後の壽命迄の間に生ずる臼齒の總數は、^三で表はされて居る。而してオーツエン氏に據れば、この中^三は、前臼齒で、^二は後臼齒であるといふことである。而して一回に生ずる臼齒の數は、年齢に従つて異れども、上下兩顎に於て一本、二本時として三本位である。

大なる牙、及び大なる鼻を支ふる爲めには、象の頭部は巨大なるを要するのであるから、頭の後部と顛顚部とは、著るしく突出すれども、頭部全體には、腦髓を含有するものではない。前頭骨と顛顚骨とには、陥凹せる廣室を有する爲めに、頭が大いのである。尤も吾々人類よりも、巨大なる體軀の動作を支配するには、それ相應に、神経系統の發育を要するは明瞭なることであるから、象

内外普通動物糖

圖一十三百第 印度象の臼齒の咀嚼面



の腦髓の重さが吾人の腦髓の重さの二倍もあるは、當然のことであるが、八九百貫乃至千貫以上もある體重と、腦の重量との割合は、百と一との比であつて、吾人の體重と腦の重量との割合は、五十と一との比であるに比較すれば、象は性質伶俐なれども、その智力に至つては、到底人類に比較すること能はざるは、明らかなことである。

象の頭骨は大きい外に、重き巨大なる牙を有するを以て、是等を支持するには、頸は太く短く、且つ充分に強健ならざるべからざるのである。然し頸が重いと、その缺點として、之を低下したり、左右に回轉することは出来ない。又この重い體軀を支へる爲めには、四肢は甚だ太く強固となり、體軀に對して垂直に着き、最も多くの獸に見るが如く、後脛部に於て屈曲することはなく、恰も圓筒狀の柱の如き觀を呈する。従つて前肢は、之を敏活に使用することは出来ない。この不便利を補ふ爲めには、鼻は頗る巨大に、且つ長く發達して、象に特有の外貌を與ふるやうになつたのである。

鼻は筒狀をなし、その末端は恰も切斷したるが如くなり、その中心には骨髄なく、内孔と外膜との間には、多數の筋肉が、縱横に、又放散狀に擴張するを以つて、是等筋肉の收縮に因つて、敏活に鼻を動かすことが出来る。鼻孔の尖端には、印度象にては一個、亞弗利加象にては、二個の指狀突起を有し、その觸覺極めて鋭敏にして、地上にある微小

なる物體をも容易に把握することが出来るのである。されば鼻は象に取りては、手の代用を務め、食物を捲いて口に取り入れ、或は水を充たして口に運び、或は之を用ひて敵を攫みて打ち倒す武器となつて居る。即ち象の鼻は、手と武器と觸覺器の三者を兼ねたものである。

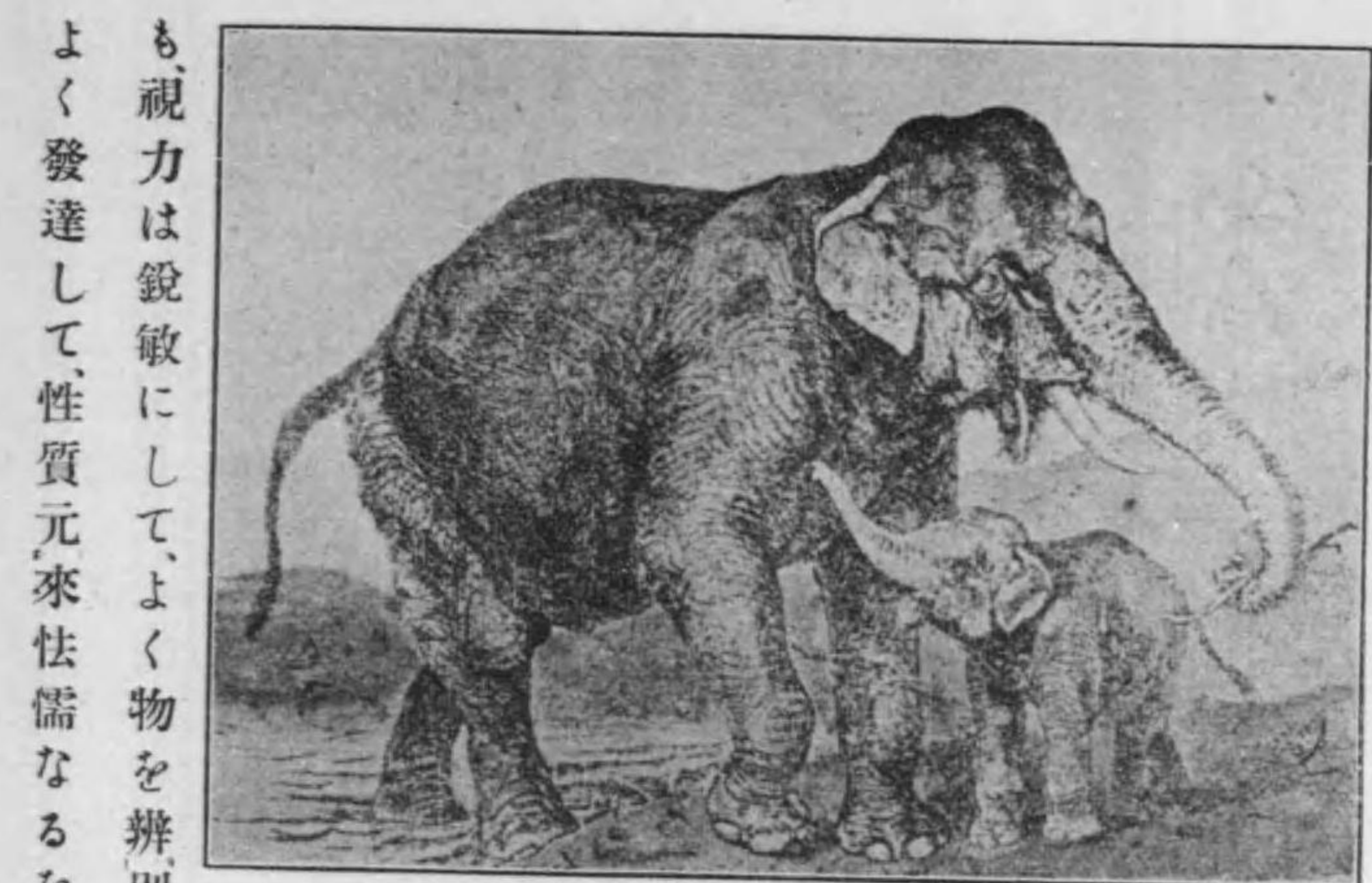
四肢共に短くして、前肢は後肢よりも長い。兩肢共に五指(趾)を有し、趾は皮膚の中に包まれて、これには短い蹄を有する。象はその體軀の割合に、動作は著しく活潑である。彼れは犬のなす如くに、容易にその脚で横臥し、再び起つことが出来る。又後肢のみにて立ち、又前肢に於て體を擡げることが出来る。然しながら速歩はやあし又は駈歩かきあしをすることは出来ない。尤も必要に際しては、一時間八哩位の割合で、歩行することが出来るのである。

〔一〕 印度象 (Indian Elephant) *Elephas indicus*, Cuv.

印度象は、印度、バルマ、シアム、セイロン、スマトラ島に産し、種々の使役用として飼養せられて居る。通例肩に於ける高さは、九尺を超ゆることなく、鼻の先端より、短尾の先端に至るまでの長さは、約二丈六尺位ある。尤も、カルカッタ博物館にある骨骸では、高さ一丈二尺に達するものがある。皮は粗糙革質にして、野生のものにては、寧ろ青白味

を帯びたる褐色である。然しながら飼養せるものにては時々油を以つて塗擦せらる

ゝ爲めに、皮膚は著るしく暗色を呈する。象の皮膚は厚くして、背部に於ては、三寸三四分の厚さあるものも、普通でなくはないのである。



象 度 印 圖 二 十 三 百 第

も、視力は鋭敏にして、よく物を辨別し、決して敵と味方とを見誤ることはない。嗅官もよく發達して、性質元來怯懦なるを以て、未だ目撃せざる敵の臭氣によりて、退却する

印度象の頭は伸長し、額は凹みて居るが、亞弗利加象にては、頭は非常に短く、且つ額は凸圓である。又亞弗利加象にては、頭の兩側には、巨大なる耳殻を有すれども、印度象にては、耳殻は普通の大きさである。前者の耳は、長さ三尺五六寸、幅二尺數寸に達し、垂るゝ時は、肩を被ふのである。耳殻は、象の意志に従つて、自由に動かし得べく、従つて、吾人が團扇うちやうせんを使用する如くに、自在に使用することが出来るのである。眼は頗る小なれど

といふことである。牧畜者の説に據れば、印度象では性質概して柔和にして、飼養し易いが、その體力は甚しく劣つて居るといふことである。

印度象は、常に群居を好めども、一群中の數は、三十頭を超ゆることは稀れである。而して、皆同一家族中のものであらうと思はれて居る。茲に著明なる事實は、全群が同時に敵に向つて突撃することはしないことである。象は常に休息なく、絶へず體軀や、鼻や、四肢を動かし居る動物であつて、甚だ短氣である。その食物は、汁液に乏しく、棕櫚ちんろう、無花果いちじく、ジャク等である。その性質、大に日光を恐れて、曉の後に、原野に出づるものは稀れで、夜間出で、森林等を徘徊し、嗅覺及び觸覺によりて、樹葉其他の食物を辨別するのである。又よく泥や水の混せるものをば、體上に浴あびるを好み、よく水を泳ぎ、容易に大河を渡るのである。時としては、單に鼻の先端のみを水面に出して、呼吸を營みつゝ、水底を歩むのである。

印度地方にては、象を馴養して、材木の運搬、耕耘上の使役に用ひて居る。殊に森林及び沼地等に於ける運搬用としては、最も有効にして、印度の軍隊にては、馬を使役し能はぬ所の山地等に、大砲其他の輻重武器の運搬用として用ひて居る。而して象の荷物を運搬する量は、凡そ駱駝五頭の積載力に匹敵するといふことである。其他象皮は、鞣

皮として種々の製作品に供せらるゝのである。

〔一〕 亞弗利加象 (African Elephant) *Elephas africanus*, Blumb.

亞弗利加象は、割合に近年までセネガル及びアビシニアより、ケープ殖民地の境界にまで棲息して居つたが、年々象牙を取る目的を以つて、多數のものが殺戮を加へられたのである。嘗つて亞弗利加より歐洲に輸入せられたる頭数は、一年に六千以上に上り、西曆千八百八十年より同八十四年に至る四ヶ年間に於て、英國に輸入せられたる象牙の量は、一年平均五百噸に上つた程である。爲めに現今にては、大にその數を減して、殖民地々方にては、象の姿を見ざるに至つた程である。

亞弗利加象は、一般に印度象よりも大きく、肩に於ける高さは、平均一丈よりは少し超へて居る。彼の有名なる狩獵家のオスウェル氏 (Oswell) は、高さ十二呎二吋のもの、射殺したといふことである。亞弗利加象は、古はカーセージ人に依つて、軍隊用として使役せられたのである。今日では象牙と、齒と、皮膚とを使用するのみである。尤も亞弗利加の土人は、その肉を食料に供し、鼻や四肢の筋肉は、脂肪に富むを以て貴重し、又皮で水囊を造るのである。

多くの牡には牙を有し、それは平均三十五封度乃至七十封度の重量があるが、東部



象加利弗亞 圖三十三百第

赤道下の亞弗利加産の牡では、屢々牙の曲線に沿ふて計りたる長さが、九尺で、重量百十五封度に達するものがある。而して最大なる象は、必ずしも最良なる象牙を有するものとはいへない。今その一例を述べれば、グロガン氏 (Grogan) が射撃した牡象は、高さ十一呎六吋もあつたが、一つの牙は、唯八十五封度の重量を有するに過ぎなかつたのである。

つたのである。嘗つて東部亞弗利加にて獲たる象牙は、長さは十呎あつて、その重量は一方のものが、二百二十四封度で、他方のものは、二百三十五封度であつたのである。

亞弗利加象は、恐らく絶滅せんとしつゝあるといふことは、よく人のいふ所である。然しながら、有名なる狩獵家エフ、シイ、セロウス氏 (F. C. Selous) の言に據ると、亞弗利加に於て、英國旗の翻へる地方、即ちザンベジの北部と南部とに於ては、象は保護せられて居る。而してウガンダに於ては、かゝる大獸の狩獵免許税は、一ヶ年五十磅ポンドの高い課税である。この免状の所持者は、狩獵期に、唯二頭の象を射殺し得るのみで、彼れが捕殺し得る他の野獸の數も、目録に調製し置く程、監督が嚴重である。そこで南部亞弗利加全躰として考ふるときは、最近二十五年間に、象は減少することはなかつたのである。願ふに、彼の麒麟が、非常に減少したことより以上に、象が減少することは、恐らくはあ
るまいと思はれるといふて居る。又最近パーウエンゾリ (Ruwenzori) 地方にあつたグ
ロガン氏 (Trogan) 及びシアーブ氏 (Sharpe) も、該地方に於て、一日の旅程中に、千頭乃至
千五百頭の象群を見たといはれて居る。

亞弗利加象は、常に廣漠たる郊野を徘徊するを以つて、その行歩は印度象よりも速
かである。汁液に富める「ミモサ」を嗜食し、又牙を用ひて、樹木の柔軟なる根を掘起し
て食する。而して、通常右方の牙を多く供用するを以て、その質輕疎となつて、短くなつ
て居る。

象は一牡多牝に交り、交尾の時期に至れば、眼と耳との間にある一腺は、よく發達し
て、果實を搾りたる汁液に似たる物質を分泌し、牝を誘引するといはれて居る。その成
熟期は最も遅くして、三十歳にして始めて子を産み、九十歳迄の間に、平均六子を分娩
する。母親は二十ヶ月間、その子を伴ひて哺育する。子は乳を飲む時は、鼻をば背上に載
せ置き、口より親の乳汁を吸ふのである。乳房は胸部に二個ある。象の壽命は百二十歳
以上に及ぶのである。

第六目 鯨類又游水類 (Cetacea)

鯨類は、頗る巨大なる海獸にして、その大なるものは、十一間半に達するものがある。
常に海水中に棲息するを以て、體形は魚類の如く、紡錘狀を呈する。頭は頗る大きく、脊
美鯨メクジの如きは、全體の三分の一を占める位である。眼は小さく、耳には耳殻を缺き、耳孔
も亦小さい。鼻孔は頭上にありて、往々合して一孔となり、且つ嗅覺は極めて鈍鈍である。
常に肺臟で空氣を呼吸するを以つて、時々水面に浮び呼吸する。その際、鼻孔より吐出
する呼氣は、水分を含有すること多く、且つ急に外氣に觸れて、冷却するを以つて、猛烈
なる水煙となりて上昇する。これ俗に「鯨の潮吹」と稱するものである。

頭は直ちに圓筒状をなせる軀幹と連続し、頸部は外面より區別することが出来ない。然し内部には、七個の短縮せるか、若くは一塊となれる頸椎骨を有する。前肢は短き鰭状となれども、これは游泳には左程作用はない。後肢は之を缺き、唯僅に内部に骨盤として代表せらるゝのみである。尤もグリーンランド鯨にては、この外に、大腿骨及び脛骨の痕跡を有する。尾はよく發達して筋肉に富み、鰭状をなして水平に擴張し、上下に動きて、水中游泳の主要なる器官である。中には背鰭を有するものもある。

前肢は、主として巨大なる體軀の平均を支持するに用ひられ、又母鯨は、その子供を握る腕として使用する。チイエルセリン博士 (Thiercelin) に據れば、鯨は春季交尾し、秋の中頃に子を産むといふことである。尤も一説には、十二月より翌年一月頃迄の間であるといはれて居る。一産に唯一兒を分娩するが、稀に二兒産むことがある。子は生れて活潑にして、直ちに母の跡を追ひつゝ、水中を游泳して、乳汁で養はるゝのである。母親の乳房は、腿の凹處に存在する。

以上述べたるが如く、鯨の體形の、魚に類似する、また前肢の鰭となり、尾も同じく鰭となるは、全く水中の生活に適するものであるが、鯨は、大概是、水面上に於て、游泳すれども、その肺臓は甚だ大きく擴がり、且つ著しく體の後方に亘れるを以て、よく空氣の

多量を吸入するを得るのみならず、同時に體をば水平に支ふるを得るを以つて、二三百尋の海底にも潜入することが出来る。その深處より水面上に浮び出でんとする時は、幅廣き渦流が先づ水の表面に顯はれ、次に口端が水面に出で、次に鼻孔、次に脊の一部、次に尾部といふ順序に顯はれ出づるのである。この時既に鼻孔は水の表面に達し、白色の水蒸氣の二柱は、二三間の高さに噴出せられ、その後三四十秒間は、その體が水を透して見られ得る位なる、水面下僅かな深さの處を游泳する。斯く鯨が泳ぎ居る間に、再び口端と鼻孔とは、水面上に現出し、再び所謂「潮吹」を始める。斯くの如く、水の表面に於て呼吸をしたり、或は游泳すること約十分位である間に、數回水蒸氣の柱は高く噴出せらるゝが、最後の噴出は濃厚にして、且つ永く繼續するを以つて、間もなく鯨が水中に沈む徴候であることが知らるゝのである。この際、鯨は體軀をば水中より高く擡げ、再び水中に入るかと思へば、又體をば高く擡げ、尾部のみ水面下に沈む位の姿勢である。斯くの如くすること、數回にして、體の平均を取りたる後、遂に全く水底深く沈み行くのである。水中に沈むこと大約三十分時には、それ以上の永きに亘り、再び水面に出で、呼吸を營み、爲めに所謂「潮吹き」をなすのである。天氣靜穩なる時には、呼吸音は、五十五間以上にも聞ゆるが、鯨が忿怒したり、或は物に驚怖するときに發する音

は幾千メートルの距離にまで達するのである。(以上はチイエルセル博士の捕鯨雜誌に據る)鯨の所謂潮吹きの状態と水中に沈まんとする時に當つて、水面上に現はす背部の形状とは、鯨の種類を鑑定するに必要なものである。鯨の速力は、一分間に六百六十メートル以上を游泳するといはれ (Lucapole氏)、また一時間三リーグの割合であるといはれて居る。(Boiard氏)

鯨の皮膚は、厚さ六寸六分以上もある。表皮は滑澤にして、毛を生ぜざれども、真皮の下には、厚き脂肪層一時としては厚さ二尺に達する脂肪層を有し、以つて體温の冷却するを防ぎ、又體の比重を軽減せしめて、水中の運動に適するのである。

鯨類は、常に群をなして棲息する。而して小形の種類は、時々海岸に來遊し、時としては、大河の河口に入り來ることがある。然しながら、大形なる種類では、廣濶なる海洋に棲息し、且つ寒冷なる地方を好むのである。常に水母、蝦蟹類、烏賊及び章魚類を食する。鯨類は、齒の有無により、二つの亞目、即ち鬚鯨類、齒鯨類の二つとする。而して海牛類は、特に獨立の一目に編入せられ居れども、今之を鯨類中の一亞目として、左の如く三亞目に分ちて記述する。

第一亞目 鬚鯨類又無齒類 (Mystacoceti)

胎兒中に、齒の萌芽を生ずれども、それは生まるゝ以前に脱落し、その代りに鯨鬚を生ずるものである。

第二亞目 齒鯨類又有齒類 (Odontoceti)

鯨鬚を有することなく、その代りに、上下兩顎、若くは唯一方の顎に、圓錐形の齒を生ずるものである。

第三亞目 海牛類 (Sirenia)

齒式及び内部の構造は、有蹄類に近似する所あるを以つて、嘗ては、象類に近き位置に編入せられたこともある。又外形は、鯨類と同じきを以つて、鯨類の中に編入せられたこともあるが、今は獨立の一目として區別するのである。然し、前にも述べた如く、便宜、鯨類の一亞目として記述する。體形は、鯨と同じけれども、短き頸は、明瞭に胴と區別せられて居る。鼻孔は、哺乳類の大多數のものに見るが如く、吻端に位し、鯨類の如く、所謂潮を吹くことはない。唇は膨大し、外耳は之を缺いて居る。前肢は短くして、鰭狀をなし、臂關節に於てよく動き、五指の端には、小形の爪を具へて居る。又前肢の間には、乳房がある。又鯨類と同じく、後肢を缺き、尾鰭を有する。皮膚は厚く、體面には剛爪を粗生する。

常に海岸に生ずる水生植物及び海藻を食し、門歯は交脱し、犬歯を缺き、臼歯の齒冠は扁平である。

三二四

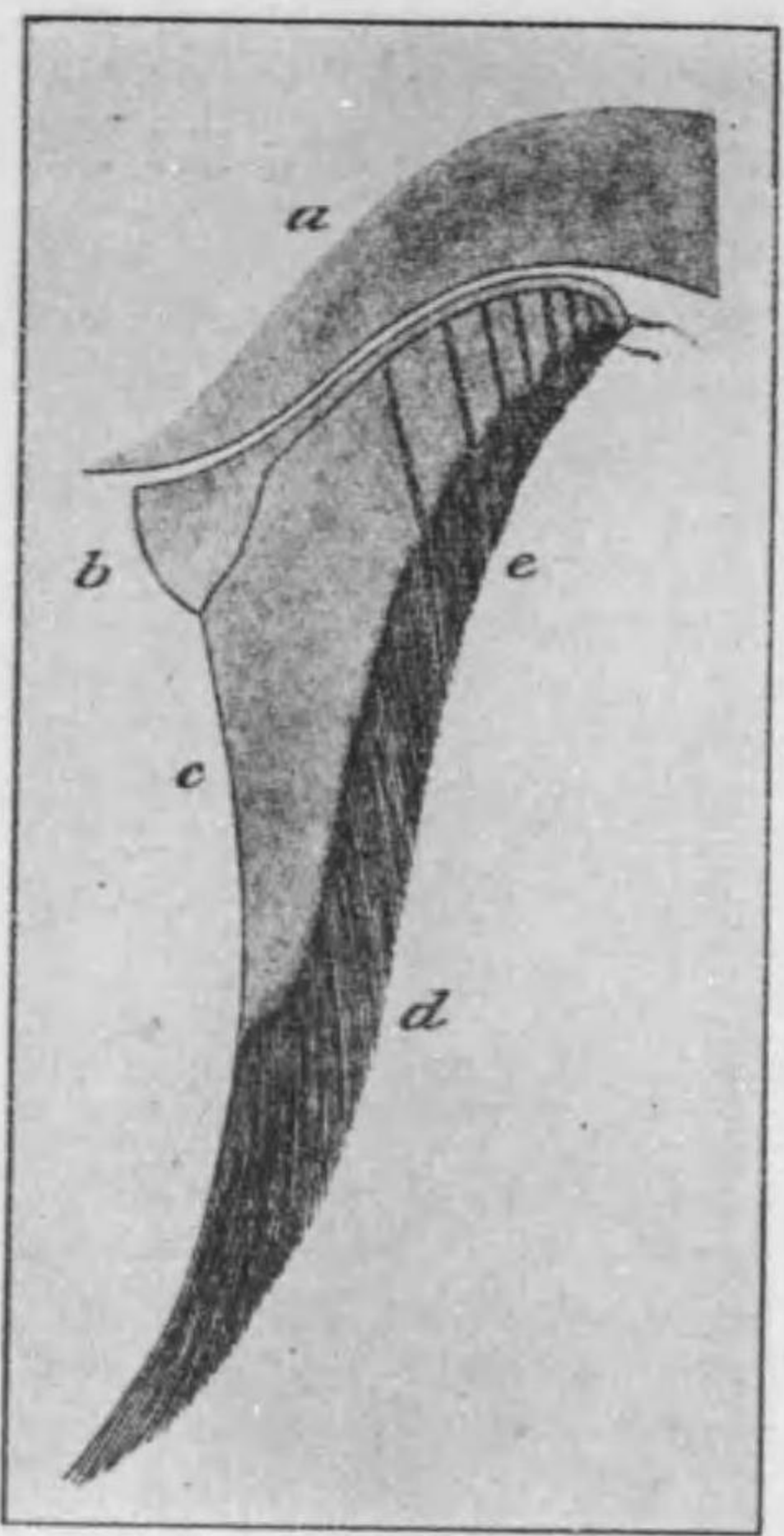
第一亞目 鬚鯨類又無齒類 (Mystacoceti)

鬚鯨類は、一般にその頭は大きく、口蓋の皮膚は、強壯なる皺襞をなし、以つて角質に變せり。之を鯨鬚と稱する。鼻孔は一對にして頭上に位する。

鯨鬚は三角状をなせる角質板にして、その數々百枚に達し、その内縁は斜状をなし、且つ細裂し、恰も櫛齒状である。口腔は頗る濶大にして、グリーンランド鯨 (Greenland Whale) *Balaena mysticetus* には、口腔の長さが、約一丈六尺、幅が七尺、高さは一丈乃至一丈二尺もあるから、この中には、捕鯨用の小船と、その上に乗れる水夫を、その儘容れることが出来る位である。この鯨の舌の長さは、時には八メートル、幅四メートルに達することがある。

諸鬚鯨類が食餌を攝食する方法を述べれば、彼は先づ海面に浮漂する、微小なる甲殼類などを認むるときは、一旦その下顎をば低下し、次に大なる舌をば、顎の方に擴げ出し、口を開きつゝ、食餌に向つて突進する。而して口腔内に侵入し來る海水は、鬚と鬚

との間隙よりして、側方に流れ出て去り、食物は總べて、その櫛状の毛に於て、一面に附着する。斯くして、鯨が二十間乃至二十五間許も進行するや、その速力を緩め、下顎を高め、兩唇をば鬚の角質板に當て、口を閉づる。然るときは、水は角質板の間隙より、濾過せられて、外界に出づるのである。斯くして、舌をば閉ぢたる口腔内に擴げ、その先端を



面斷の顎上鬚鯨鬚長 圖四十三百第 (After Owen) (す示を鬚鯨)

ば回轉して、鬚の内縁にある櫛状毛に懸かれる小動物をば、集めて一塊として、嚥下するのである。口腔は巨大なれども、咽喉は小さく、食道は細くして、世人が想像するやうに、大なるものを嚥下することは出来ない。然

しながら、海面に浮遊する微小動物を集むるには、口腔の大なるを要するのである。若し口腔小さくして、一時に食物の微量のみを攝取するのみに止まらんか、彼の巨大なる體軀の生存上、必要なる營養を得ることは困難である。これ口腔が大なる理由である。

鬚鯨類は、多くは北太平洋の近海に産する。これには次の如き種類がある。

〔一〕 鬚鯨科 (Balenopteridae)

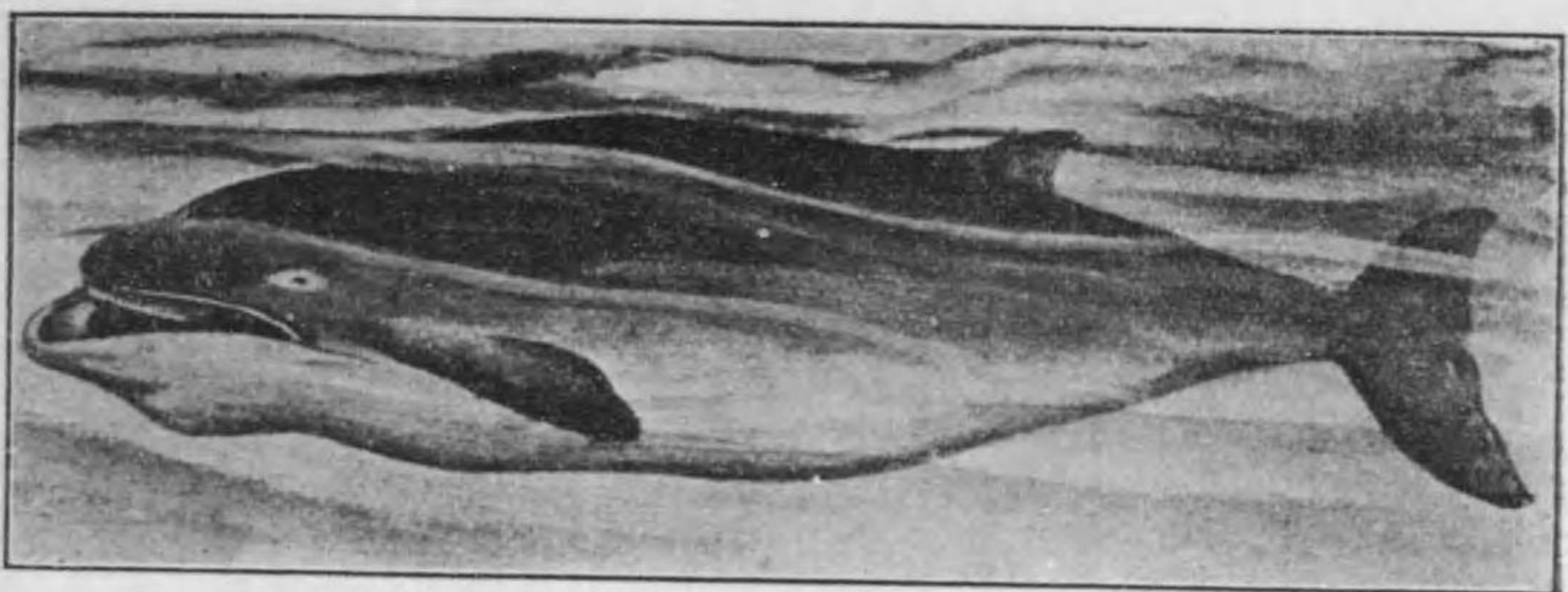
鬚は短くして廣く、背鰭は判然し、前肢は披針状を呈する。

〔一〕 鬚鯨又鯨鯨 *Balaenoptera velifer*, Cope.

英に「ダイク、ホエール」(Dike Whale)と稱する。太平洋、日本海に多く、殊に紀伊、土佐、肥前、加賀、長門、朝鮮海に多い。全身黒色を呈し、腹部は稍白くして、咽喉部は赤色を帯びて居る。體長は二丈乃至四丈あり、常に鰮、アミを食する。

〔二〕 長須鯨又長簀鯨 *Sibbaldius sulphureus*, Cope.

英に「サルファ、ボットム、ホエール」(Sulphur-bottom Whale)といふ。腹底が硫黄色を帯ぶるにより、この名を得たのである。胸部より腹部に亘りて、縦の皺襞を有し、頭は扁平にして尖り、背鰭も亦尖りて、且つ縦扁である。體色藍黒色をなせるものを、通常



第三百五十五圖 鯨

長須鯨といひ、灰色をなせるものをば、白長須といふ。全體は、長き竹筴状をなして居る。故に長須鯨の名がある。體長は大なるは十二丈に達するものあれども、通常長須鯨では、四五丈乃至六七丈のものが多く、常に好んで鰮、アミを食ふ。日本海、韓國沿岸、土佐、紀伊、銚子、肥前五島附近、金華山沿海に多く來遊するのである。

〔三〕 座頭鯨 *Megaptera versabilis*, Gray.

英に「ハンブバック、ホエール」(Humpback Whale)といはる。背部は暗黒色、腹部は淡灰白色をなし、咽喉部には皺襞を有する。また脊には肉瘤より成れる低き鰭を有する。全體の形狀は、盲目者が琵琶を負ふた形に似るから、この名ありといふことである。身の長け、小なるは二丈五尺、大なるは七丈に及ぶものがある。日本海、南海、東海共に多く棲息し、特に紀伊、土佐、房總、三陸地方、長州等に多い。常に鰮、トビノウツヲ、アミを食する。

〔二〕 脊美鯨科 (Balenidae)

頭は甚だ大にして、脊鰭を有するものと、有せざるものとある。

〔一〕 脊美鯨又世美鯨 *Balaena siboldii*, Gray.

英に「ライト、ホエール」(Right Whale)といはる。その頭部は、體長の三分の一以上に達し、脊は純黒色にして、腹部は白い。故にまた腹白の名がある。而して頬部及び眼上には、

灰白色の斑紋がある。體長は、普通は三丈乃至五丈で、時には六丈六尺乃至八丈有餘に

三二八

達する。米國西北の沿海より、ベーリング海の南部、カムチャツカ沿岸、オコック海等に棲み、本邦の沿海にては、紀伊、土佐、肥前、薩摩、長門、朝鮮海等に産すれども、現今にては、大にその数を減少したといはれて居る。而して性質敏捷にして、容易に沿岸に近寄らないのである。

(一) 南部脊美鯨 (Southern Right Whale)

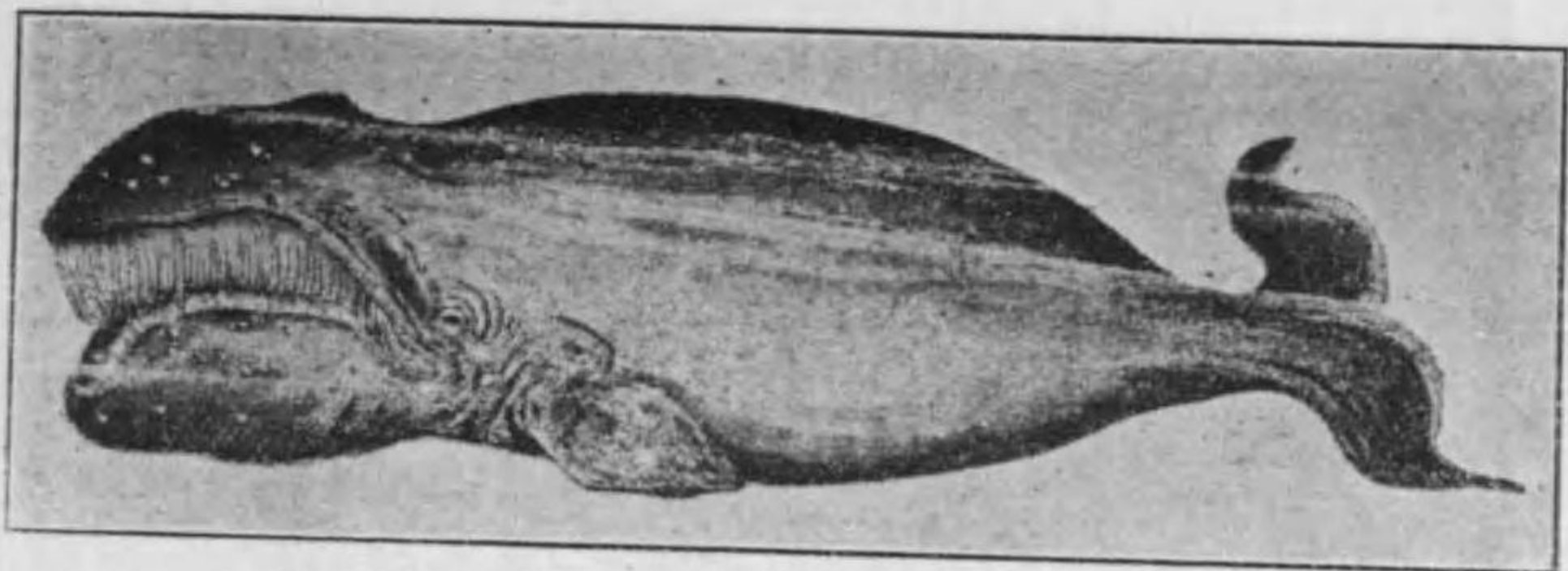
Balaena australis

亞弗利加南端のケープ殖民地、濠太利亞、ニュージールランド附近の海洋に産すれども、南氷洋には棲息しない。その體軀は著しく小形である。

(二) グリーンランド鯨 (Greenland Whale)

Balaena mysticetus

英に又「ノーザン・ホエール」(Northern Whale) 又「ライト・ホエール」(Right Whale) といはれ、北氷洋に棲息する。頭は著しく大きく、顎は遙かに後方に開



第百三十六圖 脊美鯨日本重要水産動物圖

き、爲めに口腔は極めて濶大である。充分に成長せるものにては、七丈に達すれども、五丈以上の長さに達するものは、稀れに見らるゝやうになつたさうである。大なる鯨にては、鯨鬚の全量は約一噸の重さを有するのである。

(四) 小鯨又克鯨 *Rhachianectes glauca*, Cope.

英に「カリフォルニア・グレー・ホエール」(California Gray Whale) と稱する。體形は殆んど圓長にして、頭部は割合に小さく、且つ胸鰭も狹長にして、脊鰭を缺いて居る。全體淡灰色にして、少しく蒼色を帯び、諸處に灰色の小斑紋を有する。體長は二丈乃至四丈に達する。而して體大にして脊に凸凹なきものを、青鯨といひ、韓國沿海に多く棲む。又脊に凸凹あるものを「しやれ」と稱する。小鯨は北緯二十度以上の海洋に棲息し、本邦にては、沿岸到る處に游泳する。その食物はナマコ、蟹等である。

鬚鯨類の用途

脊美鯨、白長須座頭鯨の鬚は、眞黒色であるが、長須鯨、鱒鯨の鬚は、黒白の縦縞を有し、小鯨の鬚は白色である。脊美鯨の鬚は、一頭分優に一萬五千圓乃至二萬圓の價格を有する。以上述べた鯨の鬚は、何れも質透明にして、光澤を有する。而して脊美鯨の鬚を最良とするが、近來海外に高價に賣れ行くを以つて、内地では、普通工藝品の原料として

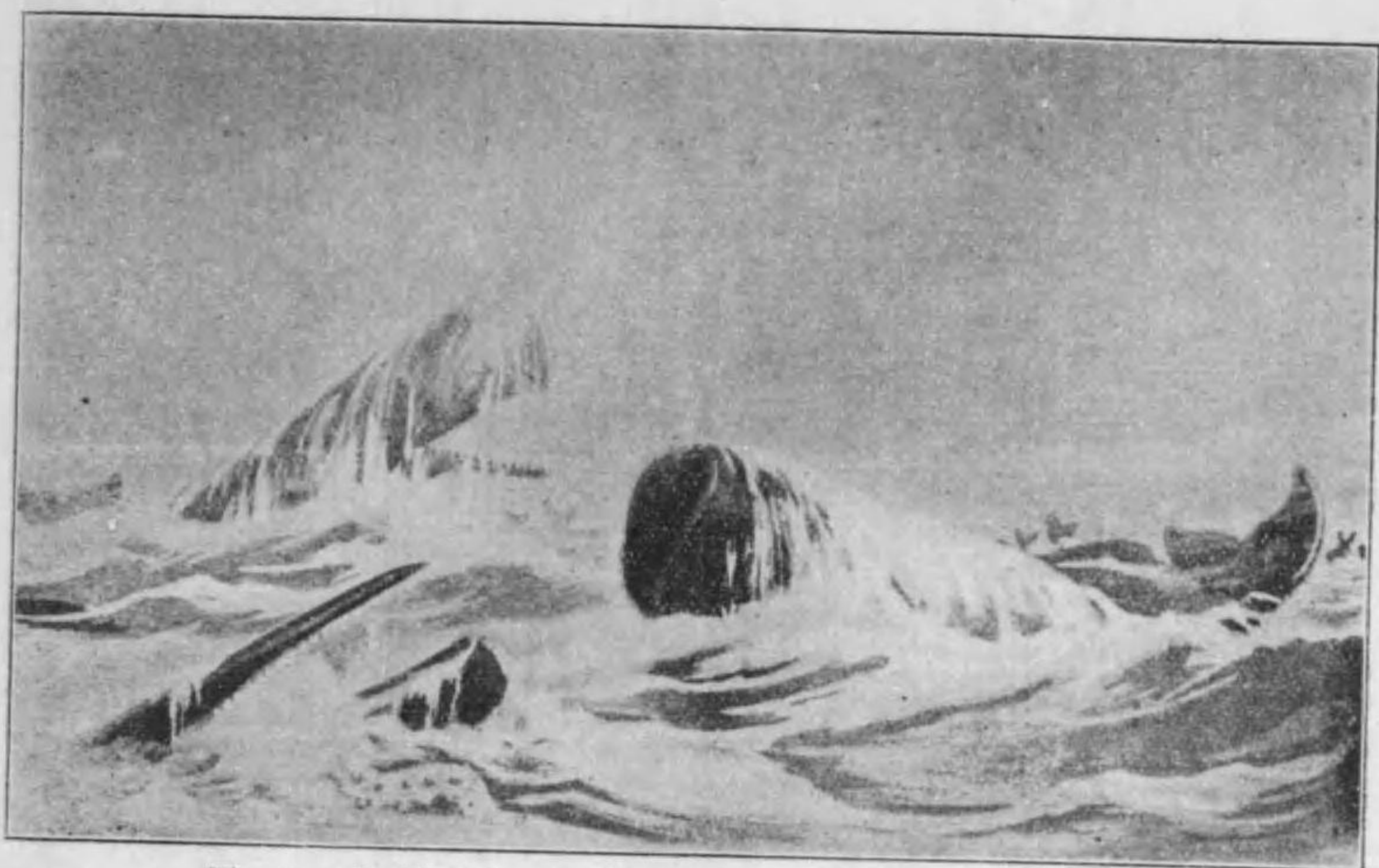
使用しない。内地に於ては、僅かに醫療器械の一部に使用せらるゝに過ぎない。普通製作品の原料としては、長鬚鯨、白長鬚、座頭鯨の類が、盛んに使用せらるゝのである。

鬚を柔軟ならしめ、五分幅に截ち、表裏両面より、適當の厚さに削り、之を數十丈又は數百尺に繼ぎ合はせ、更らに適當の幅に割りて、兩端を殺ぎ、磨いて光澤を出し、然る後、編綴に付すのであるが、今は機械力にてなすのである。従來鯨の鬚の編物は、鬚の上皮のみを用ひしに止まり、その身は、僅かに扇子の要かまひに用ひ、或は原形の儘、煙草盆等の把手に用ひられたるに過ぎざりしが、近時は、この鬚身を利用して、各種の工藝品を製出するに至つたのである。即ち敷物、籠類、會席膳、盆、硯箱、文庫類、大靴おほかばん、火鉢、唐紙引手、西洋家具、其他の指物に應用して實用向である。

鯨鬚を織物となすには、鯨鬚引子けいしと、普通の絲とを取り交せ、縦横に織立つる法と、縦横共に、鯨鬚引子けいしを織り立つる法との二つがあり、共に東洋漁業會社の實用新案權を得たものである。長須鯨の如き、純白なる部分は、染色自在なるを以つて、縞物、模様物、共に隨意に織出すことが出来る。その用途は、鼻緒地、椅子張地、テーブル掛、下駄表、夏座團地、袋物等が、その重なるものである。鯨鬚の相場は、時によりて高低あるが、普通長須のは、十貫につき十五圓座頭のは八圓位である。

鯨の白皮とは、脂肪層のことにして、白肉又は皮肉ともいふ。食用として美味であつて、脊美鯨のが最も甘いのである。赤肉は牛肉と殆んど區別なく、成分も牛肉と大差がない。長須鯨の肉は、相當に美味であるが、鰯鯨、小鯨の肉は、甘くない。然し座頭鯨の白皮は、非常に美味である。

鯨の骨は、釜に入れて煮て、脂肪を脱去したるものを、粉末として、肥料に供する。成分は、百分中磷酸一九、五窒素三、九を含み、平均十貫ななの生の骨よりは、三貫なな許の肥料を得るのである。臟腑も凡そ二時間位煮てから、日光に晒して肥料とする。鯨の油は、腦油、透油、舌油、骨油、皮油、臟油等に分けられる。長須鯨の六丈四尺のものでは、舌油二石三斗五升四合、骨油一石八斗一升九合、臟油三石三斗一升七合、總計七石四斗九升の油を得た。尤も長須鯨の皮油をば、全部取ることゝすれば、まだ十石二斗許は、餘計に採油せらるゝのである。又座頭鯨の四丈二尺のものより、舌油一石八斗九升、骨油一石四斗八升五合、臟油二石二升五合、總計五石四斗の油量を得たのである。尤もこの鯨の皮油をば、全部取れば、尙十三石二斗も採油することが出来る。明治四十年八月の相場では、長須鯨座頭鯨とも、一斗入二罐の一函で、透油は六圓、舌油は五圓、臟油は四圓八拾錢位であつたのである。鯨の油は、水雷艇の諸器械、揉皮、其他一般の機械用として使用するが、大部



第百三十七圖 抹香鯨の群遊する 圖
(From Marvels of the Universe)

分は外國に輸出せらるゝのである。

(雜誌太平洋第六卷第二五、二六號所載桑田透一氏、鯨の話。及び時事新報四十二年五月六日所載記事に據る)

第二亞目 齒鯨類又有齒類

(Odontoceti)

兩顎若くは唯一顎に、圓錐狀の齒を有し、頭は中庸大にして、鼻孔は二個合一して新月形を呈する。主として魚類を食する。この類には次の種類がある。

(一) 抹香鯨科 (Cetodontidae)

頭は巨大であつて、その先端は圓く膨脹する。額骨の中には、二室を有して脂肪を含蓄する。齒は唯下顎にのみ存して、圓錐狀を呈する。主として頭足類を食する。

(一) 抹香鯨又眞甲鯨

Physeter macrocephalum, Simm.

英に「スバーム、ホエール」(Sperm-Whale) 又「カシアロット」(Cachalot) と稱する。牡は平均牝の大きさの二倍もあつて、時には三倍も大きいものがある。大きさは通例四五丈のものが多く、充分に成長したる牡では大き約七丈に達し、胴の最も太き所の周圍は、四丈五尺、體重は殆んど百十噸に達するものがある。尾はその面積は、百二十平方呎で、一時間の最大速度は、十四哩も遊泳することが出来る。頭は頗る巨大にして、體長の約三分の一を占め、その前面は切斷せられたやうになつて居る。下顎は伸長し、時としては、長さ二丈に達し、これには後方に彎曲せる、圓錐形の齒を生じ、その數は五十乃至六十の間において、各齒は數吋宛離れて居る。動物がその正式の位置にあるときは、下顎は約四十五度の角度をなして、下方に懸垂し、爲めに割合に小形の舌、及び咽喉部を見るこゝが出来る。上顎には齒なけれども、下顎の齒が嵌入すべき齒槽を有する。脊は淡黒色にして、少しく紅色を帯び、恰も抹香の如しである。而して腹部に至りて、漸く淡色となつて居る。常に暖帶地方の海洋に棲息し、海水の温度が、五十度を多く降らざる處に棲み、特に北緯三十度内外の所に多い。本邦にては、土佐沖、紀州沖、小笠原近海より、北海道の東方の海にも游泳する。常に章魚、烏賊、水母の類を食する。その性群居するを好み、時には二三百疋も集ることがあるといはれて居る。單に一對にて泳げるは、決して見ら

れないといふことである。

抹香鯨の肉は、あまり甘くなけれども、油質は極く良好である。即ち三丈の抹香鯨にては、腦油三石四斗八升、骨油六斗九升六合、皮油十一石六斗、臟油二石七斗八升四合、總計十八石五斗六升を取つたさうである。

顔面頭蓋と、腦頭蓋との接合に因つて、形成せられたる伸長せる管は、深さ二メートルよりは、浅いことはなく、これは、腦髓を含める室とは全く連絡がない。この室には、水の如き無色透明なる液體を有する。而して、これが室より出されて、空氣に觸るゝ時は、雪白色に凝結する。之を鯨頭油といふのである。この物質は、抹香鯨の生活上に、如何なる作用あるかは、不明なれども、水の表面に、重き體を浮び出させる、浮子の如き作用が、あらうと考へられて居る。鯨頭油を精製して、これが蠟分鯨腦といふをば、蠟燭、石鹼、香料、調藥料に使用し、又脂肪分(鯨腦油)をば、燈油器械油として使用するのである。

腸の中には、アンベルgris (Ambergris) と稱する分泌物がある。常に腸中に四五個の球狀、若くは不規則なる塊狀となりて存在する。これは、暖めれば、脂肪狀となる。一定の抹香鯨より得る量は、五百斤、即ち我が八匁半位である。然し時には、五キログラム乃至十キログラム、即ち我が一貫三百三十三匁三五乃至二貫六百六十六匁七の多量に



圖八百三十八 抹香鯨が鳥を食ふ圖
(From Marvels of the Universe)



圖八百三十八 抹香鯨が鳥賊を食ふ
(From Marvels of the Universe)

れないといふことである。

抹香鯨の肉は、あまり甘くなく、けれども、油質は極く良好である。即ち三丈の抹香鯨にては、腦油三石四斗八升、骨油六斗九升六合、皮油十一石六斗、臍油二石七斗八升四合、總計十八石五斗六升を取つたさうである。

顔面頭蓋と、腦頭蓋との接合に因つて、形成せられたる伸長せる管は、深さ二メートルよりは、浅いことはなく、これは、腦髓を含める室とは、全く連絡がない。この室には、水の如き無色透明なる液體を有する。而して、これが室より出されて、空氣に觸るゝ時は、雪白色に凝結する。之を鯨頭油といふのである。この物質は、抹香鯨の生活上に、如何なる作用あるかは、不明なれども、水の表面に、重き體を浮び出させる、浮子の如き作用が、あらうと考へられて居る。鯨頭油を精製して、これが蠟分鯨腦といふをば、蠟燭、石鹼、香料、調藥料に使用し、又脂肪分、鯨腦油をば、燈油器械油として使用するのである。

腸の中にはアンベルgris (Ambergris) と稱する分泌物がある。常に腸中に四五個の球狀、若くは不規則なる塊狀となりて存在する。これは暖めれば、脂肪狀となる。一定の抹香鯨より得る量は、五百斤、即ち我が八匁半位である。然し時には、五キログラム乃至十キログラム、即ち我が一貫三百三十三匁三五乃至二貫六百六十六匁七の多量に

上ることがあるといふことである。この物質は、英に又「グレーアンバー」(Gray Amber) (灰色の琥珀) といはれ、灰色の地に、黄色若くは赤色の條線を有する脂肪物質である。この物質は、時には海上に浮ぶことがあり、又は波の爲めに、海岸に打ち寄せらるゝことがあり、又時には、この鯨の腸を剖きて取ることがある。その成分は、百分中八十五は「アンブレイン」(Ambrein) と稱する、白色の光澤ある物質より成る。その用途は、香料として貴重せられ、所謂龍涎香と稱するものである。この「アンベルグリス」は、抹香鯨の主食料たる鳥賊類の爲めに、腸を刺激せられ、肝臓の胆汁が、病的に變化して生成したものである。

抹香鯨の齒は、その質象牙に似て、堅硬なるを以て、義齒其他の製作品とする。昔時は之を粉末にして、下毒劑に用ひたといふことである。肉は食用となり、皮及び骨よりは、膠を製するのである。

〔一〕 槌鯨 *Hyperoodon rostratus*, Cham.

英に「ボットルノーズ、ホエール」(Bottle-nose Whale) といはる。頭は短き嘴狀の口の上に峙立して圓形を呈する。下顎には小なる圓錐形の齒が四個ある。脊鰭は稍や濶大にして、前肢は小さい。體長は二丈五尺乃至三丈五尺にして、體色は灰黒色で、體の下部のみ

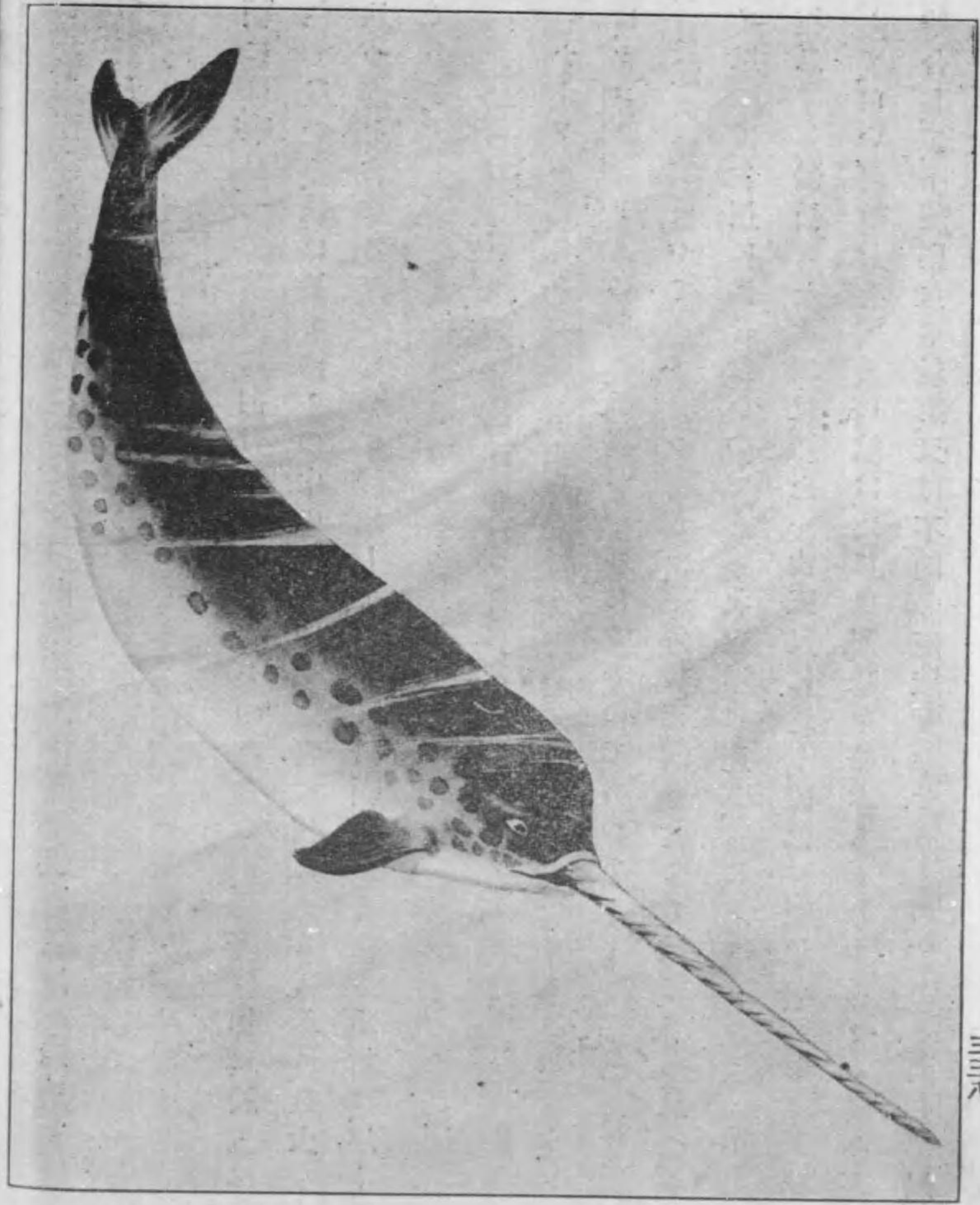
は白い。北太平洋に産し、本邦にては、金華山沖より、伊豆、紀伊の近海に群遊し、殊に房總近海、伊豆大島附近に多いのである。

〔二〕 一角科 (Monodontidae)

上顎には、唯二つの前方に向ける齒を有するのみなるが、是等は、牝に於ては小形である。然しながら、牡に於ては、その中の一本、即ち通常左側にあるものは、巨大なる螺旋狀の、且つ溝を有する牙となつて發達して居る。又兩顎にある他の小齒は、早く脱落するのである。

〔一〕 一角 *Monodon monoceros*, L.

英に「ナール」(Narwhal) 又「シーウニコルン」(Sea-unicorn) といはる。この「ナール」といふ名は、イスラント人に因りて、與へられたるものであつて、「ナー」(Nar) は死骸、「ワル」(Wal) は鯨の義であつて、イスラント人は、一角は死骸を食する鯨と考へ、且つその肉は、有毒と思つて、食用に供せないものである。北氷洋に産し、殊にグリーンランドの海岸に多く棲息する。體長は一丈四尺乃至一丈五尺に達し、體色は灰色か、若くは天鵝絨様黒色にして、白い斑紋を有する。斑紋は、時には圓味を帯ぶるものあれども、屢々斑紋は相互に結合して、不規則なる輪廓、又は不明の疱狀をなせるものがある。而して尾及び前



三三八

圖九十三百第

角 一

肢には斑紋を有しない。然れども尾の接近する所に於ては、その兩側に於て、蠟狀の條線が、幽かに顯はれて居る。牝は牡よりも斑紋が多く、幼者は一層暗色である。

幼獸の上顎に於て、二個の小形なる中空の牙がある。それは牝にては、一生涯發育することなくして、小なる儘であるが、牡に於ては、左方のものが螺旋狀に燃れて、黄色の象牙質の牙となりて發育し、その長さは、八尺乃至九尺にも達する。時としては、右方のものが斯くの如く發達することがあり、又極めて稀れに、左右兩方のものが發達することがある。この牙は、フイギユアー氏及びバード氏の著書に據れば、門齒であると述べられて居るが、又或る書には、多分犬齒の發達したものだといはれて居る。この牙の作用に就いては、種々の議論がある。然し牝に發達し居らざる所を以つて見ると、食物を取る爲めに、使用するものではあるまい。或る人は、この牙で氷を穿ちて、呼吸用の穴を穿つべき、螺鑽ねくわの如き作用あらんと、眞實らしい説を述べて居るが、恐らく、この牙は牡同志が、蕃殖期に於て、牝を得んが爲めに、争闘する武器であつて、その作用は、恰も鹿の角と同様らしく思はるゝのである。

歐洲に於て、昔は、この牙には、醫療上の効能ありと考へて、總べての毒分に、確實なる解毒劑であると、信んじて居つた。彼のチャールズ第九世の如きは、毒殺せらるゝを恐